改訂版

古の日本（倭）の歴史

第4部

古墳時代前期
3世紀中旬～5世紀初頭
（邪馬台国終焉期＋崇神王朝（三輪王朝））

古墳時代中期
4世紀末から5世紀、応神王朝（河内王朝）

藤田泰太郎

第4部　概略

1

第4部　古墳時代前期・中期

1.古墳時代前期（3世紀中旬～5世紀初頭、邪馬台国終期）＋崇神王朝（三輪王朝、崇神天皇～仲哀天皇）

古墳時代の始期は巨大な前方後円墳が造られ始めた時期とされる。従って、3世紀後半始めの最古級で巨大な前方後円墳である箸墓古墳の造営をもって古墳時代が始まったとする。箸墓古墳には邪馬台国の卑弥呼（孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命か）が葬られている。前方部が途中から撥型（ばちがた）に大きく開く墳形であり、吉備様式の特殊器台が後円部に並んでいる。箸墓古墳に続く時期に造られた西殿塚古墳も箸墓の様式を踏襲しており、卑弥呼の後継者の台与の墳墓と考えられている。これら2基の邪馬台国終結期の前方後円墳に続くのが、崇神天皇に始まる崇神王朝の歴代天皇の巨大な前方後円墳である。これらの古墳は、奈良市にある宝来山古墳（垂仁天皇陵）を除いて、天理市・桜井市の大和・柳本古墳群にある。崇神朝の後にヤマト王権に権力交替があったと思われる。景行天皇陵は天理市の柳本に造営されるが、成務天皇陵や神功皇后陵並びに垂仁天皇妃（日葉酢媛）陵などは、奈良市の佐紀盾列古墳群にある。なかでも、日葉酢媛陵の墳形には丹後の古墳の影響が強く出ている。その後、所謂応神東征といわれる、応神天皇を掲げた神功皇后軍（神功皇后・武内宿禰・建振熊）の東征により仲哀天皇の皇子（香坂王・忍熊王）が誅殺される。この内乱により古墳時代前期が終わり、応神王朝（河内王朝）が始まる。

3世紀半ば卑弥呼が亡くなり、邪馬台国は狗奴国の攻勢もあり混乱状態となり、男王（開化天皇か）を立てるが争乱状態となった。開化天皇の御子の日子坐王（『古事記』、『日本書紀』では彦坐王）は、妻の息長水依比売（台与か）を卑弥呼の後継にし、狗奴国との抗争を鎮めた。また、日子坐王は、丹波道主王命（台与との子）とその娘の日葉酢媛命（垂仁の皇后）、狭穂彦と狭穂姫（日子坐王の子、狭穂毘売は垂仁の妃）、和邇氏らの丹波・若狭・近江・美濃勢力（日本海系勢力、近江王朝）を纏め、開化天皇の異母兄弟の大彦の勢力（瀬戸内海系勢力、崇神王朝）と対抗したと思われる。その当時、丹後に巨大な前方後円墳が造られたが、これは日子坐王の権勢を反映したものと思う。垂仁朝に狭穂彦が反乱を起こしたが敗北し、妹の狭穂姫は兄に殉じた。この敗北の結果、日子坐王勢力は衰退していった。

3世紀末の崇神東征により、邪馬台国の王権は伊都国・任那連合に奪取され、崇神王朝（ヤマト王権）が誕生する。宝賀・貝田推論によると、崇神即位は315年。しかし、日子坐王が束ねる日本海勢力（近江王朝）と近江北部・美濃を中核とし東日本に拡がる狗奴国の勢力（大国主勢力）が葛城など西日本諸国にも存在していた。葛城勢の武埴安彦王と妻の吾田媛が謀反を起こした。瀬田内海勢力の吉備津彦が吾田媛

2

を破り、大彦命と彦国葺命は武埴安彦を破った。この争いの結果、崇神天皇と大彦は安定した政権基盤を築いた。崇神天皇は、北陸道、東海道、西道（山陽道）と丹波（山陰道）のそれぞれに大彦、武渟川別（大彦の子）、吉備津彦および丹波道主王（日子坐王の子、）を派遣し諸国を平定した。また、出雲神宝を管理していた出雲振根の不在中に弟の飯入根が神宝を奉献する。出雲振根は怒って飯入根を殺す。ヤマト王権は吉備津彦と武渟河別を派遣して出雲振根を誅殺（出雲神宝事件）。崇神朝につづく垂仁朝の五大夫は、彦国葺命 (和邇氏)、武渟川別 (阿倍氏)、大鹿嶋 (中臣氏)、十千根　(物部氏) および武日　(大伴氏)であり垂仁天皇を支えた。

崇神の御代に疫病が流行り政情が不穏になり、天皇は御殿で天照大神（卑弥呼をも表象）と倭大国魂神（大国主の荒魂）の二神を祀ったが、政情は回復しなかった。そこで、大田田根子を祭主として大物主神（大国主の和魂）を祀り、市磯長尾市を祭主として倭大国魂神を祀ることで、疫病がはじめて収まり、国内は鎮まった。また、神託により垂仁天皇の皇女倭姫命が天照大神を祀る伊勢神宮内宮を創建している。さらに、垂仁天皇と狭穂姫の間の誉津別皇子が物言わないのは、出雲大神の祟りと思われた。天皇は皇子を出雲に遣わし、大神を拝させると皇子は話せるようになった。大国主は国譲りに応じる条件として「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておりましょう」としていたが、これに従って出雲大社が造られ、大国主の祟りが鎮まった。また、垂仁朝に皇祖神たる天照大御神を祀る伊勢神宮が造営された。

景行朝に日本武尊は西征し、熊襲建を謀殺する。さらに東征し、駿河、相模と上総を制し、反転して尾張から伊吹山に向かい神の化身と戦うが深手を負い大和への帰途亡くなる。これは、伊吹山は狗奴国の神奈備で狗奴国の残存勢力のために敗死したと考える。狗奴国は成務朝に日本武尊の御子の稲依別により滅ぼされ、ここにヤマト王権による倭国平定が完遂した。

ヤマト王権による倭国平定が終わる4世紀後半になると倭国軍の南朝鮮への展開が活発化する。中国は五胡十六国の大分裂時代で、この時期、高句麗や百済も華北や江南へ進出する。倭国軍が百済と高句麗に進出する中、369年、百済王世子奇生は倭王に友好のため七支刀を送る。384年には、新羅からの朝貢がなかったので、葛城襲津彦が新羅討伐に派遣された。391年は、倭国は百済・新羅を臣民化し、409年高句麗に攻め込むが広開土大王（好太王）に大敗する。これらの倭国軍の南朝鮮への侵攻が、神功皇后の「三韓征伐」に当たると考える。応神天皇を掲げた神功皇后軍により仲哀天皇の皇子（香坂王・忍熊王）が謀殺される。この内乱により応神王朝が誕生する。

第4部　概略

3

2. 古墳時代中期（4世紀末から5世紀、応神天皇～武烈天皇）

応神天皇の東征により、応神王朝が樹立された（宝賀・貝田推論によると、応神即位は390年）。応神東征とは、河内の物部氏や中臣氏と結託した大山祇神やスサノオの流れを汲む息長氏出自の応神天皇の宇佐神宮からの東征である。成務朝の倭国の平定および応神東征により、倭国は隆盛期を迎え、倭国軍が強力な武力を背景に南朝鮮に進出するとともに、壮大な前方後円墳の建造を含む大土木事業が活発化する。また半島や中国との交流も日本海経路ではなく主として瀬戸内海経路をとるようになる。最大級の前方後円墳は、河内の古市・百舌鳥古墳群の誉田御廟山（応神陵）、大仙（仁徳陵）や上石津ミンザイ（履中陵）で、その当時地方の有力豪族（吉備、日向や毛野）も巨大な前方後円墳を築造した。

5世紀半ばに、允恭天皇（即位；441年）は、氏姓の乱れは国家の混乱を招く原因になりかねないと考え、氏・姓の氏姓制度を整えた。この允恭の施策によって、貴族・百姓の身分的序列化が成し遂げられた。5世紀末には、倭国の勢力下にある南朝鮮の栄山江流域に前方後円墳群が造られた。また、古墳の石室が竪穴式から横穴式に変遷する。古墳時代後期（6世紀）になると古墳の規模は縮小へと向かった。

応神天皇の母の神功皇后の「三韓征伐」のように、応神王朝になる頃から倭国軍の朝鮮半島進出が盛んになった。それに伴って半島からの渡来人が目立ってきた。応神朝には、百済より和邇吉師（王仁）が渡来し、『論語』と『千字文』をもたらす。また、葛城襲津彦や倭軍の精鋭の助けにより新羅の妨害を排し、弓月君（秦氏の先祖）の民が百済より渡来した。この頃、海部（あまべ）、山部などの土木技術者も渡来した。これら渡来人の助けで大堤や巨大古墳を築くなどの大型の土木工事が行われた。仁徳朝（即位：414年）には、大阪湾沿岸部の河内平野一帯で、池・水道・堤などの大規模な治水工事が行われた。また、難波の堀江の開削を行って、現在の高麗橋付近に難波津が開かれ、当時の瀬戸内海物流の一大拠点となった。

5世紀後半につくられた倭製の土師器、青銅器、巴形銅器あるいは滑石の祭器が、伽耶と称される南朝鮮の慶尚南道や全羅南道の墳墓や集落遺跡から発見されている。一方、倭においても、伽耶製の陶質土器や筒形銅器、さらに鉄艇と呼ぶ半島製の鉄製の短冊形の鉄素材の出土量が急増している。さらに、応神王朝では、従来の古墳に埋められた埴輪などの素焼きの土師器に加えて、ろくろを使い成形し高温で焼く須恵器が造られ始めた。

4

大阪府の陶邑窯跡群で生産された須恵器が前方後円墳分布域の北端と南端にまで運ばれている。また、牧畜が一般化し、平郡氏が王権の馬の管理に携わった。

倭の5王と雄略天皇（即位；465年）

応神王朝の倭の五王とは、『宋書』倭国伝などに記された、中国南朝に遣使した倭王「讃、珍、済、興、武」（「梁書」では讃＝賛、珍＝彌）を指す。この5人が歴代天皇の誰にあたるかは、『古事記・日本書記』から推定すると、済＝允恭天皇、興＝安康天皇、武＝雄略天皇と考えられる。しかし、残る讃、珍については、讃＝応神天皇または仁徳天皇あるいは履中天皇、珍＝仁徳天皇または反正天皇など諸説がある。以下、倭の五王の外交年表。413年、讃 東晋・安帝に貢物を献ずる（『晋書』安帝紀、『太平御覧』）。421年、讃 宋に朝献し、武帝から除綬の詔をうける。おそらく安東将軍倭国王（『宋書』夷蛮伝）。425年、讃　司馬の曹達を遣わし、宋の文帝に貢物を献ずる（『宋書』夷蛮伝）。430年宋に使いを遣わし、貢物を献ずる（『宋書』文帝紀）。438年、倭王讃 没し、弟珍 立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、正式の任命を求める　（『宋書』夷蛮伝）。4月、宋文帝、珍を安東将軍倭国王とする（『宋書』文帝紀）。443年 済　宋・文帝に朝献して、安東将軍倭国王とされる（『宋書』夷蛮伝）。451年、済 宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される（『宋書』倭国伝）。7月、安東大将軍に進号する（『宋書』文帝紀）。462年、宋・孝武帝、済の世子の興を安東将軍倭国王とする（『宋書』孝武帝紀、倭国伝）。477年、興没し、弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する（『宋書』夷蛮伝）。478年、武 上表して、自ら開府儀同三司と称し、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする（『宋書』順帝紀）（「武」と明記したもので初めて）。479年、南斉の高帝の王朝樹立に伴い、倭王の武を鎮東大将軍（征東将軍）に進号（『南斉書』倭国伝）。502年、梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を征東大将軍に進号する（『梁書』武帝紀）。

讃（履中天皇か）、珍（反正天皇か）や武（雄略天皇）は、自らを「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、宋の皇帝に正式に任命を求めている。皇帝は、百済だけは倭国の支配下であると認めず、他の南朝鮮は倭国の領域であることを認めている。このことは、南朝鮮は縄文時代前期から倭人（西日本縄文人）が住み、倭の勢力下にあったが、百済だけは後年、漢や魏の強い影響下にあったことを、倭王のみならず南朝の皇帝もまた認識していたからだと考える。

第4部　概略（つづき）

5

5世紀後半の応神王朝の政変は雄略天皇（倭王武）の登場と関係すると思われる。雄略天皇は、平群氏、大伴氏や物部氏の力を背景にした軍事力で専制王権を確立した。天皇の次の狙いは、連合的に結び付いていた地域国家群をヤマト王権に臣従させることであった。葛城、吉備などの諸豪族を制圧したことが『記紀』から伺える。西都原古墳群（宮崎県）では、5世紀前半になって女狭穂塚古墳や男狭穂塚古墳のような盟主墳が出現するが、これら盟主墳は5世紀後半以降途絶える。河内の王家と密接な関係のあった淀川水系有力首長系譜（大阪三島の安威川、長岡や南山城の久世系譜）が、5世紀前半に盟主墳を築き全盛期を迎えるが5世紀後半にはこれらの系譜は断絶する。この政変により、新たな系譜が巨大な前方後円墳を築き始める。熊本県菊池川流域の江田船山古墳の系譜、埼玉県の稲荷山古墳の系譜、群馬県の保渡田古墳群の系譜などである。とりわけ、江田船山古墳と稲荷山古墳からは獲加多支鹵大王（ワカタケル大王、雄略天皇）の文字を刻んだ鉄剣が出土している。なかでも、稲荷山古墳からの鉄剣には、古墳の被葬者オワケの7代前はオオヒコノミコトと記されており、大彦命は崇神朝の四道将軍の一人である。雄略天皇の武威が関東・九州におよんでいたと推定される。その後の武烈天皇は、大伴金村に命じて恋敵の平群鮪を殺害し、その父真鳥の館に火を放って焼き殺してしまう。ここに平群氏は討滅される。

対外的には、462年、倭軍が新羅に攻め込んだが、将軍の紀小弓が戦死してしまい敗走した。475年、高句麗が百済を攻め滅ぼしたが、翌年、雄略大王は任那から久麻那利の地を百済に与えて復興させた。この他、呉国（宋）から手工業者・漢織（あやはとり）・呉織（くれはとり）らを招き、また、分散していた秦民（秦氏の民）の統率を強化して養蚕業を奨励した。479年、百済の三斤王が亡くなると、入質していた昆支王の次子未多王に筑紫の兵500をつけて帰国させ、東城王として即位させた。兵を率いた安致臣・馬飼臣らは水軍を率いて高句麗を討った。このように、雄略朝では、倭国は百済と協力し、新羅に当たりまた高句麗の圧迫に対抗した。

武装男子立像（群馬県太田市出土）東京国立博物館蔵、国宝

曽我遺跡（そがいせき）、5世紀後半から6世紀前半までの期間に営まれた大規模な玉造りの集落。（古代史　旧石器時代～律令国家までの写真と地図で解説、成美堂出版）

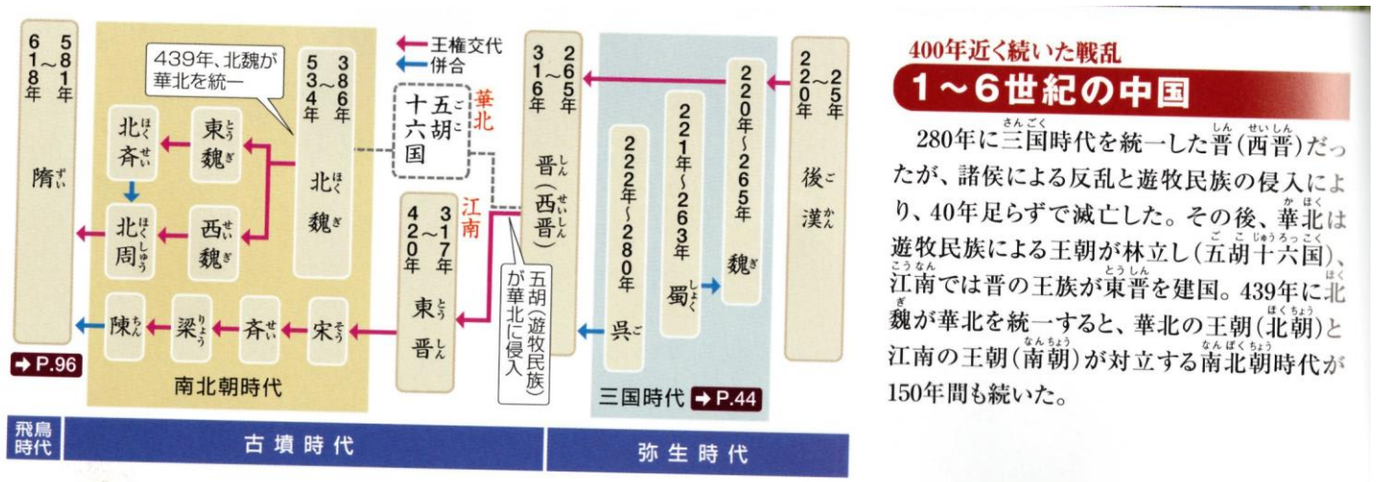
古墳時代の東アジア

中国では、3世紀後半に魏（265年に晋となる）が蜀と呉を相次いで併合し、国内を統一した。しかし、内乱などによって支配がゆらぎ、遊牧民族の五胡が侵入、晋（西晋）は滅亡し、華北では五胡や漢民族の諸国家が興亡を繰り返した（五胡一六国）。また、華北の漢民族の多くは江南（長江流域以南）へと移住し、晋王朝を再興した（東晋）。

その後、五胡の一つの鮮卑が北魏を建国し、華北を統一、中華文明を取り入れ、均田制を実施するなどして繁栄したが、6世紀に東西に分裂。一方、江南では東晋が420年に滅び、その後は宋・斉・梁・陳の短命な王朝が続いた。華北と江南で諸王朝が交替し、対立した時代を南北朝時代と呼ぶ。

朝鮮では、高句麗が自立し北部を支配、好太王（広開土王）の時代に隆盛を迎える。南部では百済、新羅が成立し、これら3国の覇権争いが続くことになる。

（図解　古代史、成美堂出版）



日本海系と瀬戸内系の抗争

藤田

日子（彦）坐王の系統　天皇家本流以外の皇族の系図は書かれないものだが、日子坐王は例外的に書かれ、天皇家に準じる扱いを受けている。その事もあってか、のちに沙本毘古（狭穂彦）謀反に発展したり、天皇並の権力を有する神功皇后が登場する。日子坐・狭穂彦は、崇神・垂仁とは別流か。

倭国大乱

前津見（但馬の女）（湖東の物部？）

天日槍
近江犬上氏などの祖」

クワシヒメノミコト
細媛命（磯城県主大目の娘）

オオヤマトネコヒコフトニ
7．孝霊天皇

ヤマトクニカヒメ
倭国香媛（海部・尾張）

四道将軍（崇神朝）

吉備津彦命

吉備

卑弥呼（日御子）

ヤマトトトモモソヒメ
倭迹迹日百襲姫命

タジマノモロスク

タジマノヒネ

タジマノヒナカギ

近江の御影神

河内
青玉繋の娘

オオヤマトネコヒコクニクル
8．孝元天皇

ウツシコメノミコト
鬱色謎命（物部）

武埴安彦命

吾田媛

東海

瀬戸内海系

オオヒコノミコト
大彦命
大毘古命

ハハツヒメ
姥津媛
（ワニ）

日本海系

オキナガミズヨリヒメ
台与？

丹波大縣主由碁理
邪馬台国都市牛利？

ワカヤマトネコヒコオオヒヒ
9．開化天皇

イカガシコメノミコト
伊香色謎命（物部）

丹後に巨大前方後円墳

沙本之大闇見戸売

ヒコイマス
彦坐王
日子坐王

ヲケツヒメ（葛城）

天豊姫命
竹野姫（丹波）

武淳川別

北陸

キヨヒコ

タジマモリ

ミマキヒメノミコト
御間城姫命
（大彦の女）

ミマキイリヒコイニエ
10．崇神天皇

丹波道主王命
タニハノヒコタタスミチノウシノヒコ

丹波

イリネ

タニハノ
アジサハヒメ

ヤマシロノ
オオツツキマワカ

遠津年魚眼
眼妙媛（紀国）

スガノモロオ

スガカマノ
ユラトミ

タジマノヒタカ

豊鍬入姫命

豊鍬入彦命

上毛野君や下毛野君の始祖

彦坐王の後継氏族が和邇氏族の補完的な位置を占め、また海人性をかなり備えた氏族と見ざるを得ない。
（和珥氏、宝賀寿男）

狭穂彦

カニメ
イカツチ

タンバノ
タカキヒメ

狭穂姫命

スイニン
11．垂仁天皇
イクメイリビコイサチノミコト
活目入彦五十狭茅尊

八坂入彦命

カツラギノ
タカヌカヒメ

オキナガ
スクネ

日葉酢媛命(丹波)

誉津別命
（ほむつわけのみこと）

倭姫命

播磨　稲日大娘

オオタラシヒコ
オシロワケ
12．景行天皇

八坂入姫命

日本武尊

両道入姫皇女

13．成務天皇

4世紀末～5世紀初め

息長氏出自の**神功皇后**は、基盤的には卑弥呼や台与と同じ日本海系（大国主、ホアカリ、和邇ら）に属する。また、皇后は天日槍の末裔であり、葛城の血をも引く。神功皇后の三韓征伐やその後の畿内平定に武内宿禰（葛城の襲津彦や蘇我氏の祖）や武振熊命（和邇、彦国葺命の孫）の働きにより香坂王・忍熊王の反乱を平定したという。

オキナガタラスヒメ
神功皇后

14．仲哀天皇

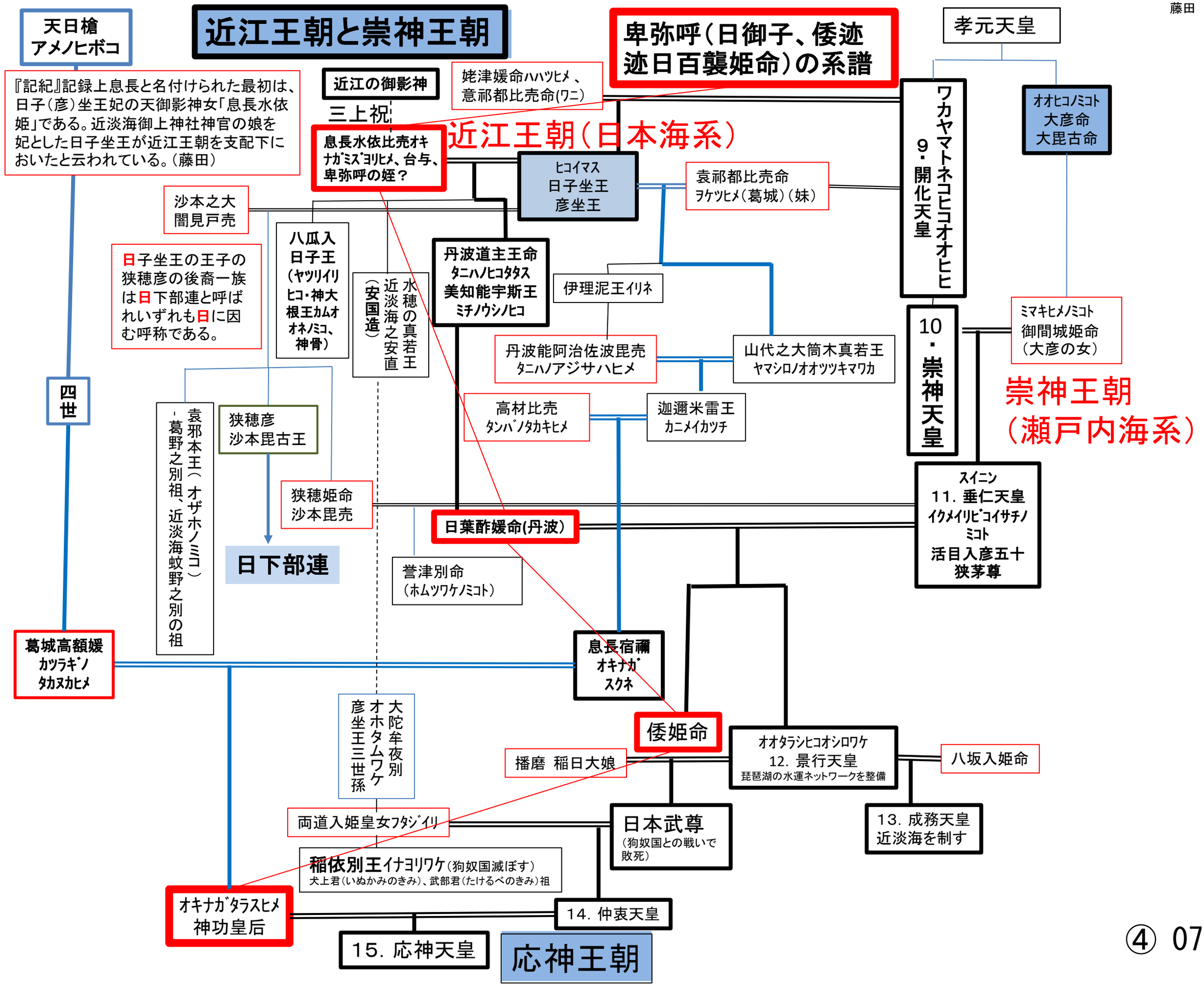
大中比売命

15．応神天皇

香坂王、忍熊王

近江王朝と崇神王朝

卑弥呼（日御子、倭迹迹日百襲姫命）の系譜



古墳時代・前期

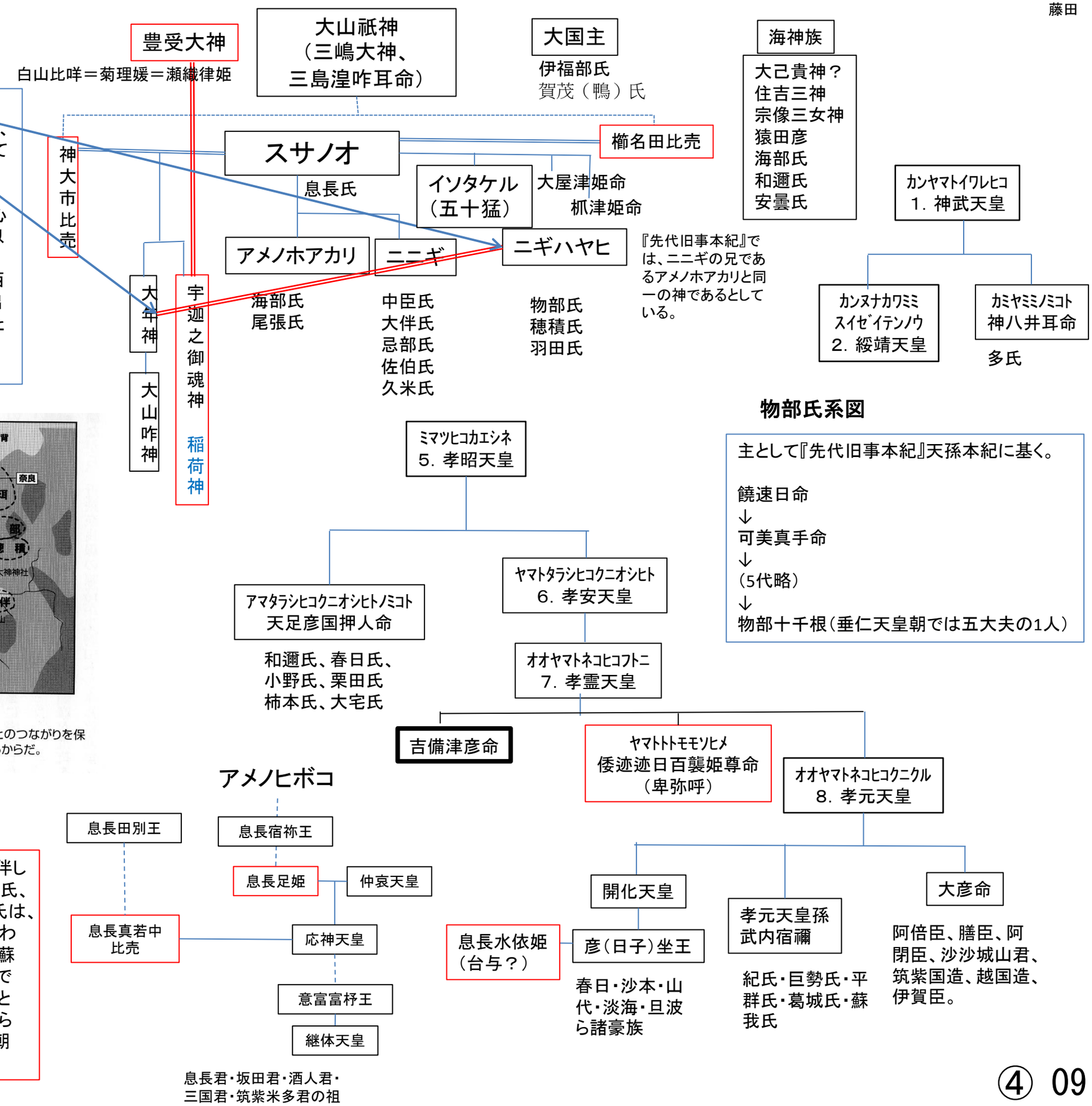
区分	年表	歴代天皇	事項
古墳時代・三輪王朝	・崇神（神武）東征　（崇神即位315年） 317　西晋滅ぶ ・武埴安彦と吾田媛の反乱 ・出雲神宝事件 **五胡一六国時代**	10 崇神	・1世紀半ばのニニギ降臨（3世紀末の崇神東征も）の折、同伴したのは、天児屋命（中臣氏祖、製鉄神）、天太玉命（忌部氏祖）、天忍日命（大伴氏、佐伯氏祖）、天久米命（久米氏の祖）。中臣氏、大伴氏と忌部氏は南朝鮮の出自か。崇神東征の中核は、中臣氏、大伴氏と久米氏であろう。 ・葛城勢の武埴安彦（タケルハニヤスヒコ）王と妻の吾田媛（アタヒメ）が謀反を起こした。吉備津彦が吾田媛を破り、一方、大彦と彦国葺（ヒコクニブク）は武埴安彦を破った。この争いの結果、崇神天皇と大彦は安定した政権基盤を築いた。 ・四道将軍の大彦を北陸に、武渟川別を東海に、吉備津彦を西海に、丹波道主を丹波に派遣した『日本書記』。『古事記』では孝霊朝のとき、吉備津彦を吉備に派遣したとある。また丹波には日子坐王を派遣した。 ・崇神天皇のとき,出雲の神宝を天皇に献上した弟の飯入根(いいいりね)を兄の振根がだまし討ちにする。振根は朝廷の派遣した吉備津彦と武渟川別に殺された。 ・大田田根子を祭主として大物主神を祀り、長尾市を祭主として倭大国魂神を祀ることで、疫病は収まり、国内は鎮まった。
	（332年） ・狭穂毘古の反乱 ・伊勢神宮内宮）の創建	11 垂仁	・五大夫（垂仁朝）：彦国葺（和邇氏の祖）、武渟川別(阿倍氏の祖)、大鹿嶋(中臣氏の祖)、十千根(物部氏の祖)、武日(大伴氏の祖) ・狭穂彦（日子坐王の子）が反乱を起こし、妹の狭穂姫は兄に殉じた。 ・垂仁天皇と狭穂毘売の間の誉津別皇子が物言わぬは、太占で出雲大神の祟りとわかった。天皇は皇子を曙立王、菟上王とともに出雲に遣わし、大神に拝させると皇子はしゃべれるようになった。出雲大社を創建した。 ・垂仁天皇の皇女倭姫命は、天照大神の御杖代として大和国から伊賀・近江・美濃・尾張の諸国を経て伊勢の国に入り、神託により皇大神宮（伊勢神宮内宮）を創建した。
	・倭建尊（日本武尊）の東征・西征　（342年） ・倭建尊、伊吹山（狗奴国の最後の砦？）で敗死 346 百済建国（正式） 357 新羅建国（正式）	12 景行	・日本武尊のみならず景行天皇自身も美濃・九州に遠征したと伝えられている。 **日本武尊西征**　・日本武尊（倭建尊）、九州の熊襲建兄弟の討伐を命じられる。九州に入った小碓命は、熊襲建の宴に美少女に変装して忍び込み、宴たけなわの頃にまず兄建を斬り、続いて弟建に刃を突き立てた。その後、倭建命は出雲に入り、出雲建の太刀を偽物と交換して太刀あわせを申し込み、殺してしまう。（『日本書記』の出雲神宝事件と重なる。） **日本武尊東征**　・西方の蛮族の討伐から帰るとすぐに、景行天皇は重ねて東方の蛮族の討伐を命じる。倭比売命は倭建命に伊勢神宮にあった神剣、草那芸剣と袋とを与える。倭建命はまず尾張国造家に入り、美夜受比売（宮簀媛）と婚約をして東国へ赴く。相模の国で、野中で火攻めに遭う。草那芸剣で草を刈り掃い、袋の火打石で迎え火を点けて逆に敵を焼き尽くす。相模から上総に渡る際、走水の海の神が波を起こして倭建命の船は進退窮まった。そこで、后の弟橘比売が自ら命に替わって入水すると、波は自ずから凪いだ。倭建命は東国を平定して、長野県を経て、倭建命は尾張に入る。尾張に入った倭建命は美夜受比売と結婚する。 ・伊勢の神剣をもたず、伊吹山の神を素手で討ち取ろうと、出立する。素手で伊吹の神と対決した倭建命の前に、白い大猪が現れる。神の化身で、大氷雨を降らされ、命は失神する。弱った体で大和を目指したが、三重県亀山市で亡くなる。倭建尊は白鳥となって、大和を指して飛んだ。白鳥は伊勢を出て、河内の国に留まり、やがて天に翔った。 ・伊吹山の神は八岐大蛇ともいわれ、大国主のことと思われる。したがって、倭建命は大国主の狗奴国の最後の砦の伊吹山で戦い敗死したか。
	・狗奴国の滅亡、倭国平定　（357年） 372　百済王世子奇生、倭王旨のために七支刀を作る（石上神宮所蔵） ・百済の太子、礼成江右岸を占領	13 成務	・「境を定め邦を開きて、近淡海に制したまいき」（古事記）とは、「伊吹山（狗奴国の最後の砦か）を制し、近江をヤマト政権の支配下に置くことにより、全国統一をほぼ果たし諸国の境を定めた」のことと思う。
	三韓征伐　（377年） ・百済、倭国と共に高句麗を破る ・倭国は第16代の新羅王訖解尼師に国書を送り国交断絶、首都金城を包囲攻撃 382　葛城襲津彦を遣わして新羅を撃たせる	14 仲衷 神功 皇后	・神功皇后はアメノヒボコ、ヒコイマス、臺与、葛城氏、息長氏の血を引き実質的に倭国を平定した。 ・三韓征伐は、神功皇后が新羅出兵を行い、朝鮮半島の広い地域を服属下においたとされる戦争を指すと思われる。 ・三韓征伐後、応神天皇を掲げ東征する神功皇后軍に対抗して、応神天皇の異母兄の香坂皇子と忍熊皇子が畿内で反乱を起こしたが、武内宿禰や武振熊命の働きによりこの反乱を平定した。かくて、神功皇后がヤマト王権を掌握し、応神王朝への道を開いた。

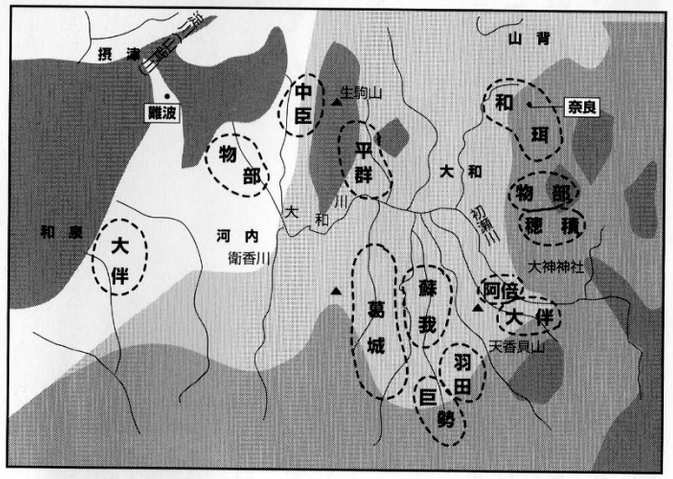
藤田

ヤマト王権を支えた豪族の系図

ニギハヤヒは大年神か

原田常治氏の『古代日本正史』よれば、「饒速日＝大歳神」という説が唱えられています。そのほか、根拠は不明ですが「大歳神は饒速日の若い頃の名前である」という俗説があり、出雲や播磨を中心に大歳神を祀る神社が多く、逆に大和以東にはそれが少ないという指摘もあります。なお、大歳神を祀る神社は島根県西部に集中しており、大歳神は石見から出雲を経由して大和方面へ東征していったという説もある。（饒速日（ニギハヤヒ）とは？Net）





ヤマト地方の豪族勢力図
物部氏はヤマトよりも河内を重視していた。なぜなら、吉備とのつながりを保ち、いざとなれば海上封鎖でヤマトを孤立させることもできるからだ。
（物部氏の正体、関）

物部氏系図

主として『先代旧事本紀』天孫本紀に基く。

饒速日命
↓
可美真手命
↓
（5代略）
↓
物部十千根（垂仁天皇朝では五大夫の1人）

豪族の系図、雑考

瓊瓊杵尊の伊都国への天孫降臨に同伴した氏族は、中臣氏（後の藤原氏）、大伴氏、佐伯氏、忌部氏、久米氏である。大伴氏は、倭人である新羅の昔氏が改称したと思われる。多氏は葛城の古族で、阿部氏や蘇我氏の祖は邪馬台国時代の孝元天皇であるが、蘇我氏に関しては新羅の金氏との関係が指摘されてはいる。秦氏は明らかに中国系であるが、その多くは応神朝以降に渡来した。

孝元天皇とその子孫

孝元天皇

・父は第7代孝霊天皇、母は皇后で磯城県主（または十市県主）大目の娘の細媛命（細比売命）。
・同母兄弟はいないが、異母兄弟に倭迹迹日百襲姫命・彦五十狭芹彦命（吉備津彦命）・稚武彦命らがいる。
・孝元天皇は、海部氏勘注系図では彦火明命の9世孫、乙国彦に当たる。

子 →

大彦命

四道将軍の一人。第8代孝元天皇と皇后鬱色謎命（うつしこめのみこと、内色許売命）との間に生まれた第1皇子である。同母兄弟として開化天皇（第9代）、少彦男心命（すくなひこをこころのみこと、少名日子建猪心命<すくなひこたけゐこころのみこと）、倭迹迹姫命（やまとととひめのみこと）がいる。
子として『日本書紀』では御間城姫（みまきひめ、御真津比売命：第10代崇神天皇皇后）、武渟川別（たけぬなかわわけ、建沼河別命）の名が、『古事記』では加えて比古伊那許志別命（ひこいなごしわけのみこと）の名が見える。御間城姫は垂仁天皇（第11代）の生母であり、大彦命はその外祖父になる。
阿倍臣を始め、膳臣（かしわでのおみ）、阿閉臣（あへのおみ、阿敢臣）、沙沙城山君、筑紫国造、越国造、伊賀臣ら7氏の始祖。

三世孫 ↘

武内宿禰（たけのうちのすくね/たけうちのすくね、景行天皇14年－ 没年不詳）は、『記紀』に伝わる古代日本の人物。
・『日本書紀』では「武内宿禰」、『古事記』では「建内宿禰」。「宿禰」は尊称。
・景行・成務・仲哀・応神・仁徳の5代（第12代から第16代）の各天皇に仕えたという伝説上の忠臣である。紀氏・巨勢氏・平群氏・葛城氏・蘇我氏など中央有力豪族の祖ともされる。

『日本書紀』景行天皇紀では、屋主忍男武雄心命と、菟道彦（紀直遠祖）の女の影媛との間に生まれたとする。孝元天皇紀では、孝元天皇（第8代）皇子の彦太忍信命を武内宿禰の祖父とすることから、武内宿禰は孝元天皇三世孫にあたる。なお、応神天皇紀では弟（母は不明）として甘美内宿禰の名が見える。
『古事記』では、孝元天皇皇子の比古布都押之信命（彦太忍信命）と、宇豆比古（木国造）の妹の山下影日売との間に生まれたのが建内宿禰（武内宿禰）であるとし、孝元天皇孫にあてる。同書においては、異母兄弟（長幼不詳）として味師内宿禰（甘美内宿禰）の名が見える。

武内宿禰（菊池容斎『前賢故実』、明治時代）

孫 ↓

日子坐王、彦坐王（ひこいますのおう）

『日本書紀』開化天皇紀によれば、第9代開化天皇と、和邇臣（和珥氏）遠祖の姥津命の妹の姥津媛命（ははつひめのみこと）との間に生まれた皇子である。同書における子女に関する記載は、垂仁天皇紀において丹波道主命が子である旨のみである（ただし丹波道主命は彦湯産隅王の子という異伝も併記）。『古事記』では、息長水依比売を妻とし丹波道主命をもうけたとある。
『古事記』では、開化天皇と丸邇臣（和珥臣に同じ）祖の日子国意祁都命の妹の意祁都比売命（おけつひめのみこと）との間に生まれた第三皇子とする。
『古事記』に見えるように、彦坐王は春日・沙本・山代・淡海・旦波ら諸豪族を血縁で結ぶ地位に位置づけられている。このことから、彦坐王の系譜は和邇氏や息長氏を中心とする畿内北部豪族らにより伝えられたとする説があるほか、そうした畿内北部における広域的な連合政権の存在の暗示が指摘されている。なお、垂仁天皇朝に見える狭穂彦王（沙本毘古王）の反乱伝承から、「崇神 - 垂仁」に対立する「彦坐王 - 狭穂彦」の皇統があったとする説もある。（Wikipedia抜粋）

天皇の皇子を「命(みこと)」とせずに「王」としたのは、『記紀』ともに日子坐王の条が初めて。また、『新撰姓氏録』によると、「日下（草香）部氏は、彦坐王の子、狭穂彦王の後（すえ）なり」とある。日下部氏は次の皇妃を出した。
・雄略天皇皇后：仁徳天皇の皇子、大草香皇子の妹、草香幡梭姫。
・継体天皇の元妃：尾張連草香の女、目子媛、安閑天皇と宣化天皇の母。
（藤田）

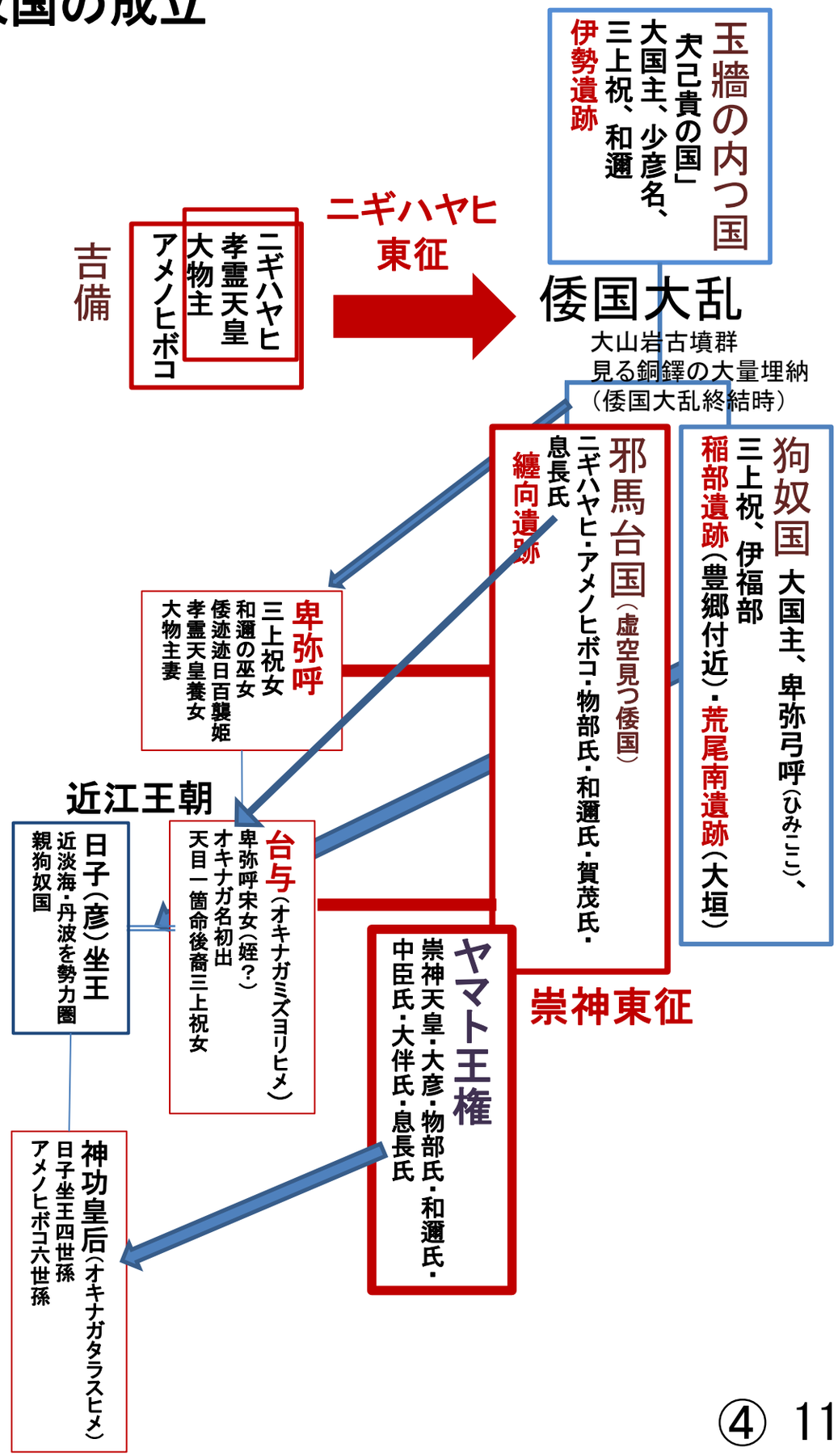
竹内宿禰の子（下線）
●百済の辰斯王が天皇に礼を失したので、石川宿禰（蘇我氏の祖）は紀角宿禰（紀氏の祖）・羽田矢代宿禰（波多氏の祖）・木菟宿禰（平郡氏の祖）とともに遣わされ、その無礼を責めた。これに対して百済は辰斯王を殺して謝罪した。そして紀角宿禰らは阿花王を立てて帰国したという。尚、平郡氏は王権の馬の管理に携わる。
●天皇は弓月の民を連れ帰るため襲津彦（葛城氏の祖）を加羅に遣わしたが、3年経っても襲津彦が帰ってくることはなかった。天皇は襲津彦が帰国しないのは新羅が妨げるせいだとし、平群木菟宿禰（へぐりのつく）と的戸田宿禰（いくはのとだ）（的(いくは)氏の祖）に精兵を授けて加羅に派遣した。新羅王は愕然として罪に服し、弓月の民を率いて襲津彦と共に日本に来た。襲津彦は履中天皇（第16代）・反正天皇（第17代）・允恭天皇（第18代）の外祖父でもある。
（主にWikipediaから）

藤田

卑弥呼と台与（臺与）の出自　邪馬台国と狗奴国の成立

（卑弥呼と台与は共に三上祝の一族であり、和邇氏と深い繋がりがある）

❶ 1、2世紀、大国主を盟主とした、中日本（近畿、山陰、北陸、東海と東山（美濃、信濃））の国家連合（大己貴の国、玉牆の内つ国）があり、その都は近江湖南の伊勢遺跡と思われる。この国は大国主と少彦名が創り上げたものである。
❷ 和邇が筑前の奴国より、若狭(経由で近江に入る。湖西を勢力下におき、さらに琵琶湖から木津川経由で大和・葛城に至る。
❸ 2世紀半ば、アメノヒボコが山陰を侵し、但馬から播磨へと吉備勢力（ニギハヤヒ）の助けを得て南下する。倭国大乱が始まる。
❹ ニギハヤヒは大山祇神勢力を加え、アメノヒボコと共に大和への侵攻する。大国主と少彦名の国（大己貴の国、玉牆の内つ国）と抗争状態に入る。
❺ 後漢より「中平」と紀年銘の鉄剣を賜った和邇も倭国大乱でニギハヤヒ側に加わり、ニギハヤヒ軍団は、近江東南部や美濃にまで侵攻した。この時少彦名を敗死させたか。
❻ 卑弥呼は三上祝の一族で、三上祝は大国主と多紀理毘売との娘、下照姫の後裔である。また、卑弥呼は和邇の血を引く巫女である。ニギハヤヒと大国主は伊勢遺跡にいた卑弥呼を共立し、大乱を鎮める（倭国大乱の終結（2世紀末））。卑弥呼は伊勢遺跡から纏向遺跡に遷る。ここにニギハヤヒが実権をもつ『日本書記』記載の「虚空見つ日本（倭、ヤマトの国」（すなわち狭義の邪馬台国）が成立する。狭義の邪馬台国とは瀬戸内沿岸諸国、因幡、但馬、丹波、播磨、摂津、近江（湖北、湖東を除く）および大和と紀伊を含む。大国主勢力は、狗奴国（近江湖北と湖東）から美濃さらに東山道、東海道や北陸道に広がり、葛城や紀伊にも勢力残存）を建てる。尚、広義の邪馬台国は、任那・伊都国連合と狭義の邪馬台国から成る。
❼ ニギハヤヒは『記紀』の孝霊天皇に当たり、その皇女（養女？）、倭迹迹日百襲姫が卑弥呼に当たる。また、大神神社の祭神は大物主であるが、この大物主もニギハヤヒに当たり、大乱に敗れた大国主から大神神社を乗っ取ったものであろう。
❽ 239年　卑弥呼、魏に使い（難升米・都市牛利ら）を送り、親魏倭王に任じられ銅鏡百枚などを賜る。
❾ 3世紀は半ば卑弥呼が亡くなり、箸墓古墳に葬られるが、瀬戸内海勢力である狭義の邪馬台国勢力と近江（湖北・湖東）と美濃を核とする狗奴国連合との抗争が始まる。そこで、三上祝の血を引く、卑弥呼の宗族（姪か）の臺（台）与を立て抗争をおさめた。台与は当時、淀川流域、さらに近江へと急速に勢力を拡大させていた息長氏の血を引く、息長水依姫と思われ、狗奴国の都と思われる稲部遺跡近傍の豊郷（とよさと、台与の里）から纏向遺跡に遷ったと考える。従って、台与は、卑弥呼、和邇氏、息長氏、三上祝、日子坐王の後ろ盾があり、かつ狗奴国との関係も深く、邪馬台国の卑弥呼の後継者として絶大な権勢を誇ったのであろう。
❿『魏志倭人伝』によると、台与は掖邪狗（和邇日子押人命？）らを随行させた上で張政らを帰還させた。その際、男女生口三十人を献上すると共に白珠五千孔、青大勾珠二枚および異文雑錦二十匹を貢いだ。台与は開化天皇と和爾氏の女との間の子、日子坐王と結ばれる。日子坐王は近江、山城、丹後、但馬、美濃に勢力を伸ばし（近江王朝と呼ばれる）、狗奴国とも協調して一時期ヤマト王権を支えた。台与と日子坐王との子が丹波道主王命とされる。神功皇后（オキナガタラスヒメ）はアメノヒボコと日子坐王の後裔である。
⓫ 4世紀初め、任那・伊都国連合の崇神天皇は、南九州の緒勢力と共に邪馬台国に侵攻する。ニギハヤヒの子、ウマシマジと天香山は、崇神天皇らを唯々諾々と迎い入れ、大和、葛城や紀伊の大国主勢力（ナガスネヒコら）を圧倒した。尚、崇神天皇の即位は315年と思われる。
⓬ヤマト王権の侵攻により、狗奴国は圧迫され伊吹山一帯を最後の拠点とした。景行天皇の御代、ヤマトタケルの狗奴国侵攻には耐え、ヤマトタケルを敗死させた。成務天皇の御代に狗奴国は完全に滅んだと思われる。ここにヤマト王権の倭国支配が完遂した。
（藤田）



日子坐王の系譜

1

日子坐王（ひこいますのおう）は、第9代開化天皇と和珥氏遠祖の姥津命（ははつのみこと）の妹の姥津媛命（ははつひめのみこと）との間に生まれた皇子で、第10代崇神（すじん）天皇の異母弟である。但馬・丹波一円を征定するため崇神天皇より四道将軍（しどうしょうぐん）のひとりとして遣わされた。四道将軍とは、『日本書紀』に登場する皇族の将軍で、大彦命（おおびこのみこと）は北陸へ、武渟川別命（たけぬなかわわけのみこと）は東海へ、吉備津彦命（きびつひこのみこと）は西道へ、日子坐王は但馬・丹波へ遣わされた4人の将軍のことである。有名な昔話「桃太郎」は吉備（岡山）へ派遣された吉備津彦がモデルで「浦嶋太郎」は日子坐王を祖とする浦嶋子がモデルである。

日子坐王の妃は、息長水依比売（おきながのみずよりひめ・滋賀県野洲市三上にある御上神社（みかみじんじゃ）に祀られている天之御影命（あめのみかげのみこと）（その6世孫の国忍富命））の娘である。天之御影命は、天照大御神の三男で多度大社に祀られている天津彦根の御子なので、天照大御神のひ孫ということになる。日子坐王と息長水依比売の王子は、丹波道主命（彦多都彦命）、八瓜入日子王（やつりいりひこのみこ・別名神大根王（かむおおねのみこ）、神骨）、水之穂真若王（みずのほまわかのみこ）（近淡海之安直の祖）である。日子坐王は、崇神天皇の勅命により、息子の丹波道主命（彦多都彦命）を連れて、丹波に遠征、玖賀耳の御笠（くがみみのみかさ）を退治した後、さらに美濃国各務郡岩田に下り、息子の八瓜入日子王ともに一帯を開発し、この地で亡くなったとされる。日子坐王の墓は、宮内庁により岐阜県岐阜市岩田西にある日子坐命墓に治定されている。

日子坐王は、若狭の闇見神社（くらみ）に祀られている沙本之大闇見戸売（さほのおおくらみとめ）との間に、狭穂彦王（日下部連・甲斐国造の祖）と狭穂姫命および袁邪本王（おざほのみこ）（葛野之別祖、近淡海蚊野之別の祖）を生んでいる。一方、丹波道主命は、丹波国久美浜の豪族・川上摩須の娘である川上摩須郎女（かわかみますのいらつめ）を娶り日葉酢媛命（ひばすひめのみこと）が生まれる。川上摩須郎女は、美濃でなくなり岐阜市内の方県津神社（かたがたつじんじゃ）に祀られている。

狭穂姫は、第11代垂仁天皇の皇后となったが、垂仁天皇の暗殺に失敗し、兄の沙穂彦とともに殺されている。それでも、垂仁天皇は、祖父の日子坐王の力や祖母の息長水依姫(台与）の血脈を必要としたと思われ、丹波道主命と川上摩須郎女の娘・日葉酢媛命を皇后に迎え、五十瓊敷入彦命、大足彦（第12代景行天皇）、倭姫命（やまとひめのこと）他を生んでいる。すなわち、五十瓊敷入彦と景行天皇は、日子坐王の曾孫である。景行天皇は、即位2年、播磨稲日大郎姫（はりまのいなびのおおいらつめ）を皇后とし、大碓皇子（おおうすのみこ）及び小碓尊（（おうすのみこと、後の日本武尊）の双子をもうけている。即位4年、美濃国に行幸、八坂入媛命を妃として稚足彦尊（成務天皇）、五百城入彦皇子らを得た。

2

日子坐王の妃は、上述の息長水依比売、沙本之大闇見戸売の他に、山代之荏名津比売（やましろのえなつひめ、苅幡戸辨）および袁祁都比売命（おけつひめのみこと、日子坐王の母の意祁都比売命の妹）である。袁祁都比売命との子が山代之大筒木真若王（やましろのおおつつきまわかのみこ）で、孫に迦邇米雷王 いる。その子に息長宿禰王、孫に息長帯比売命（神功皇后）がいる。この日子坐王の系譜より、日子坐王の勢力圏（近江王朝か）は、山城、近江、若狭、丹後、丹波、但馬、美濃で、北東近江と西美濃を核とする狗奴国勢力と協調関係を築いたことが分かる。息長氏は成務朝に滅ぼされた狗奴国の旧領の近江湖東・湖北さらに越前に進出して角鹿（敦賀）に達している。

日子坐王の4世孫である神功皇后は、越前、若狭、丹後、但馬の軍船を率い日本海を西行、三韓征伐の後に応神天皇（八幡神）を掲げ、住吉神を伴い畿内へ東征した。武内宿禰や武振熊命（和邇、彦国葺命の孫）の働きにより仲哀天皇の皇子、香坂王・忍熊王の反乱を平定し、ヤマト王権を息長氏の支配下に置き、応神王朝を樹立した。

（歴史勉強メモ：岐阜の覇者は日子坐王！、Net ＋ 西賀真紀、FB情報 ＋ 藤田）

日子坐王と息長水依比売ー息長水依姫は台与か

日子坐王は、第9代開化天皇と和珥氏遠祖の姥津媛命（ははつひめのみこと）との間に生まれた皇子である。『古事記』では、息長水依姫（おきながみずよりひめ）を妻とし丹波道主命をもうけたとある。丹波道主命の娘、日葉酢媛命は垂仁天皇の皇后で景行天皇の母である。

息長水依比売は、近江の三上祝が信奉する天之御影神（アメノミカゲ神）の女である。卑弥呼もまた三上祝の出自と考えられている。また、息長水依比売は『古事記』に見えるオキナガを冠する最初の人格である。息長氏はスサノオの嫡流で大王を輩出した氏族である。

卑弥呼の後を継いだ台与は卑弥呼の宗族で、卑弥呼の姪ではないかと考える識者もいる。さらに卑弥呼も台与も大国主の流れ（下照姫）を汲む三上祝の出自で、卑弥呼は和邇氏の巫女ともいわれ、台与は息長氏の血筋を引くと思われる。従って邪馬台国の末期には息長氏の先遣隊が摂津から近江に達していたことを示唆する。さらに息長水依姫は開化天皇の皇子の日子坐王の妻となったのであるから、卑弥呼の後を継いだ台与に当たると考えても時代的になんら問題ない。

（藤田）

日子坐王と台与：近江王朝説の周辺

近江王朝説

昭和49年、近江王朝説を打ち出したのは、京都大学教授の林屋辰三郎氏である。『魏志倭人伝』によれば、国中が服さないほどの混乱をまねいた開化天皇の子孫が、大和国を脱出して、南 山城へ、ついで近江国にいたって、そこで近江王朝建てたという主張である。開化天皇の皇子、日子坐王、がその創始者に擬される。和邇・息長といった有力な豪族と連携して、崇神王朝と並立する近江王朝が出来上がった。

この王朝は、琵琶湖水運を中軸として、日本海・瀬戸内海につながる交通動脈をおさえて政治・経済に君臨し、さらには鉄生産を掌握し、くわえて渡来人たちの先進的な文化・文明を手中におさめた。そして、大和国へのまきかえしをはかり、崇神王朝の勢力を吸収して、応神天皇が応神王朝と呼ばれる新王朝を打ち立てることになったという。

（図説 滋賀県の歴史、木村至宏）

近江王朝説考

林屋氏の近江王朝説は日子坐王を中核に据える王朝と考えられる。日子坐王は天皇（大王と呼ばれた）の皇子で王と呼ばれる唯一の人格であり、近江王朝を担ったのではないかと考えても不思議ではない。さらに台与と考えられる息長水依姫を妻としたのであるからその権勢は甚大なものであったと考えられる。日子坐王の側についた氏族・豪族は和爾氏と息長氏を核に大国主系およびホアカリ系（丹後）の豪族であり、これらの氏族・豪族は概ね日本海系の北近畿勢力が結集したと考える。さらに台与は狗奴国に含まれる近江の豊郷（稲部遺跡か）にいたと考えられる。台与を擁立し邪馬台国と狗奴国の抗争をおさめたのであるから、狗奴国勢力もまたこの王朝に協力したのではないか。この日本海系勢力に対抗したのが邪馬台国を建てたニギハヤヒ直系の物部氏を中核とする瀬戸内海系勢力であろう。この勢力の中心にいたのが開化天皇と同じく孝元天皇の皇子である大彦であろう。瀬戸内海系勢力は3世紀末に任那・伊都国連合の王、崇神天皇の東征を促し、大和の日本海系勢力を圧倒した。この東征が神武東征譚の主要部分である。持論では崇神東征により日本海系勢力は後退したが、垂仁朝に日子坐王の子の狭穂彦が叛乱を起こし敗死するまでは日本海系勢力は尚かなりの力を維持していたと思われる。垂仁天皇の後の景行天皇の御代、皇子の日本武尊が西征後の東征の終わりに狗奴国の最後の砦のと思われる伊吹山で敗死させられたと考えられる。その後景行天皇は狗奴国の拠点の近江・美濃に進出し、次の成務天皇の時代に狗奴国は滅び、ヤマト王権の倭国制圧が完了した。

（藤田）

日子坐王の薨去地ー岐阜市、大津市、朝来市

伊波乃西神社（岐阜市岩田）

祭神　日子坐命

日子坐命の薨去にあたり、この美濃地方開拓の祖神として北山中腹に手厚く葬り崇めたてまつった。古来この墓所には社殿があり、ここを伊波乃西神社と称していたが、明治8年宮内省より御陵墓と認定されたため現地に遷宮し奉った。

（伊波乃西神社、Net）

石坐神社（大津市西の庄）

祭神：八大龍王宮　豊玉比古神（海津見神）<u>彦坐王命</u>

瀬田に設けられた近江国府の初代国造・治田連がその四代前の租・彦坐王命を茶臼山に葬り、その背後の御霊殿山を神体山（神奈備）として祀ったのが創祀。

（石坐神社（大津市）、Net）

粟鹿（あわが）**神社**（兵庫県朝来市山東町粟鹿）

但馬國一宮（出石神社も一宮）

祭神：彦火々出見命、<u>日子坐王</u>、阿米美佐利命 - 大国主の子

粟鹿山麓粟鹿郷は、日子坐王 薨去終焉の地で、粟鹿神社裏二重溝堀、現存する本殿後方の円墳は王埋処の史跡である。

（Wikipedia抜粋）

息長氏考

息長（おきなが）の『記紀』での初出は、邪馬台国最後の大王（開化天皇）皇子の日子坐王妃の息長水依姫である。応神王朝の創始者の神功皇后（息長帯姫）と応神天皇、さらに古墳時代後期最初の天皇の継体天皇もまた息長氏の出自である。このように、息長氏は天皇系譜の嫡流と云える。

1

❶ 山津照神社の伝によれば、息長氏祖は国之常立神（神世一代）とされている。息長氏族は天津彦根命の出自である。本来、スサノオ神（五十猛神）（八幡神）の後裔であり、宇佐国造支流の出であって、当初は九州北部にあった。息長氏の嫡系は、讃岐から吉備東部を経て播磨西部に遷り、さらに東方に向かい畿内の摂津・河内さらに大和に入って、前王統から大王位を簒奪した応神を出した。応神その人と母の神功皇后が息長氏の出である。

息長の意義としては、製鉄など金属精錬の折に鞴（ふいご）（蹈鞴（たたら）を用いて空気を送り火を起こすときの息を長く引く状態からつけられたものとする説が妥当である。

❷ 大山祇神は、伊予の大三島神社や摂津の鴨三島神社の祭神である、イザナギ・イザナミの神生みによって生まれた“山の神”である“大山津見神”を指す『古事記』。伊予国風土記逸文・大山祇の神・御島条によれば、「乎知郡（ヲチ）の御島（現愛媛県越智郡大三島）においでになる神の御名は大山祇（オオヤマツミ）の神。又の名は“和多志（ワタシ：渡し）の大神”である。この神は百済から渡っておいでになり、摂津国の御島（三島）においでになった神である」とある。

大山祇神と息長氏とは関連があると考える。摂津・三島の溝咋神社の主神の一人である五十鈴媛命は神武天皇の皇后になられた方である。その祖父は三島湟咋耳命(みしまみぞくいみみのみこと)で、広くこの地域を治めていた。皇統の嫡流とも考えられる息長氏が江北に遷る前、息長水依比売、息長帯日売（神功皇后）と応神天皇を出したころは淀川水系の摂津・三島を根拠地にしていたと思われる。さらに、息長氏の出自と思われる継体天皇の御陵は今城塚古墳（いましろづかこふん）（大阪府高槻市郡家新町（ぐんげしんまち）は摂津国三島郡に属していた）と考えられている。前方後円墳の今城塚古墳は6世紀前半では最大級の古墳である。

2

❸「息長」の語が史料に最初に見えるのは、天目１箇命（天御影命）後裔からでて彦坐王の妻となった「息長水依比売」（丹波道主命の母）とされる。この女性は『古事記』に見えており、これが史料のなかで「息長」名乗りの最古とされる。卑弥呼は、三上祝（大国主系）からでており、同じ宗族の息長水依比売が台与に当たると考える。

❹ 神功皇后こと息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）の父は開化天皇玄孫・息長宿禰王（おきながのすくねのみこ）で、母は天日矛裔・葛城高顙媛（かずらきのたかぬかひめ）である。神功皇后と仲哀天皇との皇子の応神天皇の出生には謎が多い。異常に出産が遅れたことに加え、父として「是に皇后、大神と密事あり」（住吉大社の『神代記』）とある住吉大神や、あるいはまた武内宿禰とする考える異説もある。このような出生の神秘性が、本来応神天皇が前王朝との血統上のつながりを持たず、新王朝の開祖であるとされたことを物語っている。すなわち、応神天皇は息長氏の出で、九州から東進してきた誉田別（応神）は河内の豪族の品陀真若王の家に婿として入り、品陀（誉田）の地名を関するようになった。この応神が前王統から大王位を簒奪した。

❺ 応神天皇の皇子若野毛二俣王の子、意富富杼王の時に息長氏の嫡流は近江・江北に遷ったと見られる。しかし、息長水依比売は3世紀の後半の邪馬台国終焉時の比売と考えられるので、この時期に息長氏の先遣族は既に近江に達していたのではないか。息長氏の最終的な根拠地であった江北の坂田郡は、美濃・尾張や越方面への交通の要衝であり、水路では天野川（息長川）の河口にある琵琶湖水運の良港・朝妻津（米原市朝妻筑摩に湊跡）を押え、そこから湖南の大津や琵琶湖北岸の塩津、さらに若狭・越前ともつながることから、交易活動の中心であった。江北は鉄などの鉱物資源が豊富で、それを活用した鍛冶氏族であり、農業生産はともかくもしても、多くの古墳を含む息長・坂田古墳群を残したから、相当の力をもった古代豪族であった。継体天皇を出したのも、この強大な経済力が基盤となっていると思われる。尚、継体天皇は応神天皇の5世孫とされる。

息長氏考

3

❻『古事記』・『日本書紀』によると継体天皇は応神天皇の5世孫であり、父は彦主人王である。近江国高嶋郷三尾野（現在の滋賀県高島市あたり）で誕生したが、幼い時に父を亡くしたため、母の故郷である越前国高向（たかむく、現在の福井県坂井市丸岡町高椋）で育てられて、男大迹王として5世紀末の越前地方（近江地方説もある）を統治していた。『日本書紀』によれば、506年に武烈天皇が後嗣を定めずに崩御したため、大連・大伴金村、物部麁鹿火、大臣・巨勢男人らが協議して、越前にいた応神天皇の5世孫の男大迹王にお迎えを出した。男大迹王は心の中で疑いを抱き、河内馬飼首荒籠（かわちのうまかいのおびとあらこ）に使いを出し、大連大臣らの本意を確かめて即位の決心をした。翌年58歳にして河内国樟葉宮（くすばのみや）において即位し、武烈天皇の姉（妹との説もある）にあたる手白香皇女を皇后とした。継体は、ようやく即位19年後の526年、大倭（後の大和国）に都を定めることができたが、その直後に百済から請われて救援の軍を九州北部に送った。しかし新羅と結んだ磐井によって九州北部で磐井の乱が勃発して、その平定に苦心している。『日本書紀』の記述では継体が507年に即位してから大和に都をおくまで約20年もかかったのは、皇室（実態はヤマト王権）内部もしくは地域国家間との大王位をめぐる混乱があったこと、また、継体政権（ヤマト王権）は九州北部の地域国家の豪族を掌握できていなかったことに起因しているとの示唆がある。

❼ 531年、継体天皇は皇子の勾大兄（安閑天皇）に譲位（記録上最初の譲位例）し、その即位と同日に崩御した。『日本書紀』では、『百済本記』を引用して、天皇及び太子と皇子が同時に亡くなったとし、政変で継体以下が殺害された可能性（辛亥の変説）を示唆している

❽ 舒明天皇の和号諡号は、息長足日広額天皇（ｵｷﾅｶﾞﾀﾗｼﾋﾋﾛﾇｶﾉｽﾒﾗﾐｺﾄ）である。その意味は、息長氏が養育した額の広い（聡明な）天皇とある。息長山田公が舒明天皇の殯において弔辞を担当したので、舒明天皇の「壬生」（養育係）であった可能性が高い。

❾ 息長氏は敏達天皇から天武天皇の時代には政治の前面に現れたことはないが、天皇の身内（養育係等）で、隠然たる実力を有していたと思われる。これが、天武天皇の御世に完成した『記紀』に息長氏が皇統とし頻繁に登場する一つの理由であるとも思われる。

（古代氏族の研究⑥　息長氏、　宝賀　＋　藤田）

息長氏出自の天皇

応神天皇　(Wikipedia)

足羽山の継体天皇像（福井県福井市）(Wikipedia)

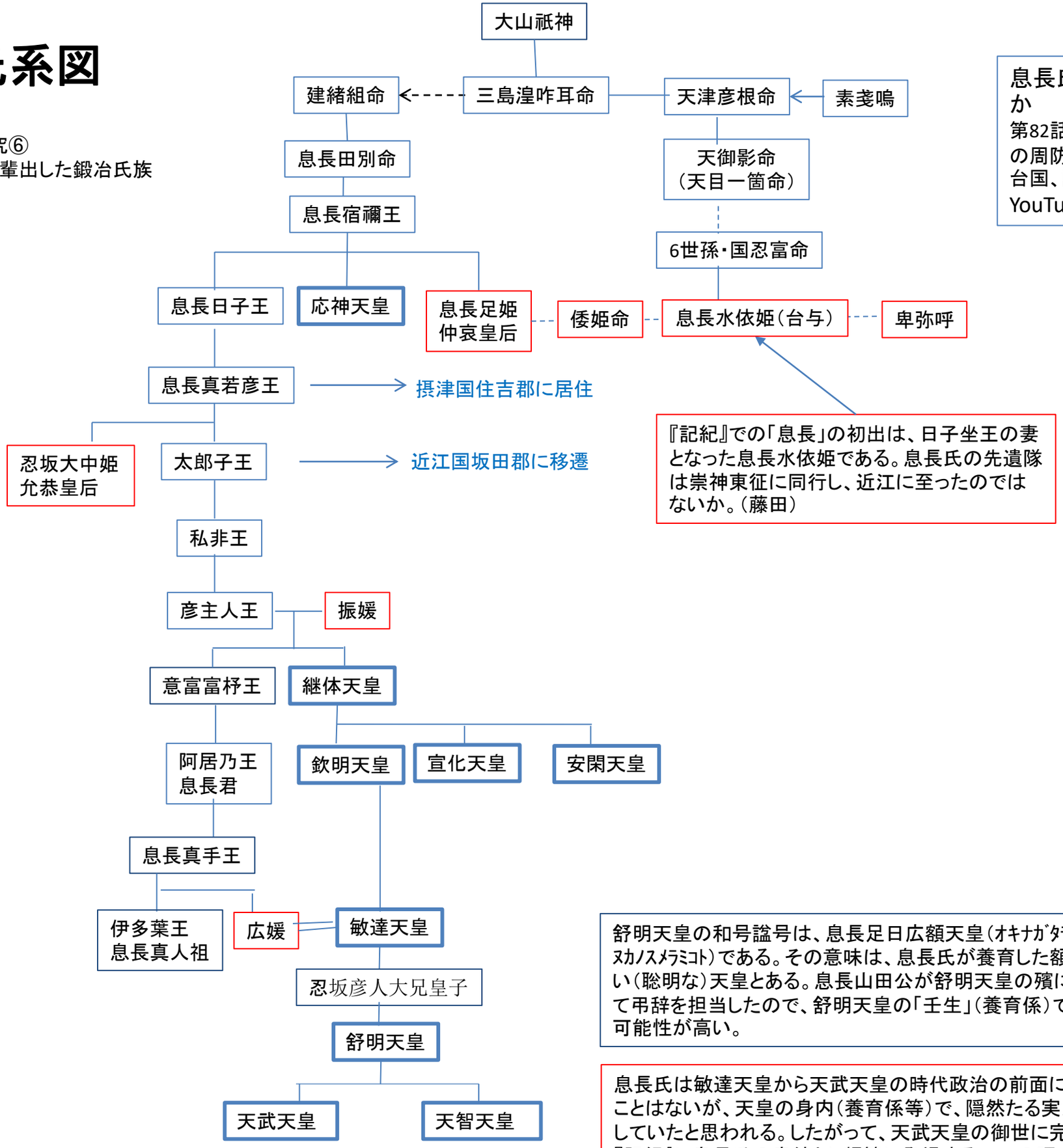
息長氏と大山祇（積）神

伊予の大三島神社や摂津の鴨三島神社の祭神である。イザナギ・イザナミの神生みによって生まれた“山の神”である“大山津見神”を指す『古事記』。『伊予国風土記』逸文・大山積の神・御島条によれば、「乎知郡（ヲチ）の御島（現愛媛県越智郡大三島）においでになる神の御名はオオヤマツミの神。又の名は“和多志（ワタシ：渡し）の大神”である。この神は仁徳天皇の御代に顕現なされた。この神は百済から渡っておいでになり、摂津国の御島（三島）においでになった神である」とある。

大山祇神と息長氏とは関連があるのではないかと考える。摂津・三島の湟咋神社の主神の一人である五十鈴媛命は、わが国初代天皇である神武(じんむ)天皇の皇后になられた人と記されている。また、玉櫛媛命は五十鈴媛命の母であり、父は三島湟咋耳命(みしまみぞくいみみのみこと)で、広くこの地域を治めていた人である。皇統の嫡流とも考えられる息長氏が江北に遷る前、息長水依比売、息長帯日売（神功皇后）と応神天皇を出したころは淀川水系の摂津・三島を根拠地にしていたと思われる。さらに、息長氏の出自と思われる継体天皇の御陵は今城塚古墳（いましろづかこふん）（大阪府高槻市郡家新町（ぐんげしんまち）は摂津国三島郡に属していた）と考えられている。前方後円墳の今城塚古墳は6世紀前半では最大級の古墳である。（藤田）

息長氏系図

古代氏族の研究⑥
息長氏　大王を輩出した鍛冶氏族
宝賀寿男



息長氏は伽耶の多羅の出自か
第82話「大多羅彦（おおたらしひこ）の周防国（山口県）への進出」【邪馬台国、誕生】
YouTube 神尾正武

『記紀』での「息長」の初出は、日子坐王の妻となった息長水依姫である。息長氏の先遣隊は崇神東征に同行し、近江に至ったのではないか。（藤田）

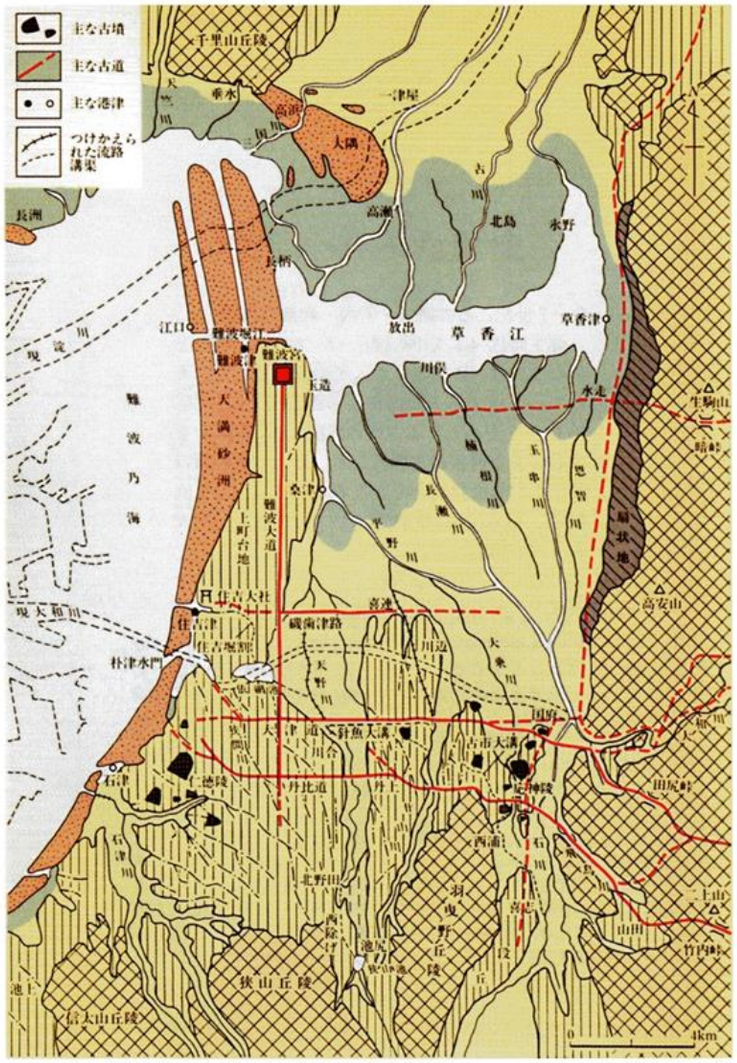
舒明天皇の和号諡号は、息長足日広額天皇（オキナガタラシヒヒロヌカノスメラミコト）である。その意味は、息長氏が養育した額の広い（聡明な）天皇とある。息長山田公が舒明天皇の殯において弔辞を担当したので、舒明天皇の「壬生」（養育係）であった可能性が高い。

息長氏は敏達天皇から天武天皇の時代政治の前面に現れたことはないが、天皇の身内（養育係等）で、隠然たる実力を有していたと思われる。したがって、天武天皇の御世に完成した『記紀』に息長氏の皇統とし頻繁に登場する一つの理由であるとも思われる。（藤田）

淀川水系の宮（息長氏と関わりか）

●志賀高穴穂宮（滋賀県大津市穴太）
景行天皇
晩年、近江国に行幸して、志賀高穴穂宮（しがのたかあなほのみや、現在の滋賀県大津市穴太か）に3年間滞在した後崩御。
成務天皇
元年に即位、3年に武内宿禰を大臣とした。5年9月、諸国に令して、行政区画として国 郡（くにこおり）・県邑（あがたむら）を定め、それぞれに造長（くにのみやつこ）・稲置（いなぎ）等を任命して、山河を隔にして国県を分かち、阡陌（南北東西の道）に随って邑里（むら）を定め、地方行政機構の整備を図った。ここにおいて、人民は安住し、天下太平であったという。60年に崩御。『先代旧事本紀』の「国造本紀」に載せる国造の半数がその設置時期を成務朝と伝えていることも注目される。（Wikipedia抜粋）
成務朝に伊吹山（狗奴国最後の砦か）の八岐大蛇（大国主か）を倒し、近江を制し、琵琶湖の水運を掌握した。（藤田）
●近江大津宮（滋賀県大津市錦織）
天智天皇
近江宮（おうみのみや）は、飛鳥時代に天智天皇が近江国滋賀郡に営んだ都。天智天皇6年（667年）飛鳥から近江に遷都した天皇はこの宮で正式に即位し、近江令や庚午年籍など律令制の基礎となる施策を実行。天皇崩後に朝廷の首班となった大友皇子（弘文天皇）は天武天皇元年（672年）の壬申の乱で大海人皇子に敗れたため、5年余りで廃都となった。

●難波大隅宮（大阪市東淀川区大桐）
応神天皇
倭軽島の明宮から難波の大隅宮への遷都は佐紀政権から河内政権への移行を意味する。（応神天皇と軽島の明宮・難波の大隅宮、Net）。大隅宮は、河内湖に淀川、大和川の土砂が堆積し「難波の八十島」と呼ばれるように多くの島がつくられ、その中の一つ大隅島に大隅宮があったとされています。大隅島は現在の大隅神社のあたりと推定。（難波大隅宮、Net ）
●難波高津宮（大阪市中央区高津）
仁徳天皇
仁徳天皇が堀江（現在の大川）の開削を命じた。（しかし、実際に堀江の開削が行われたのは5世紀後半から6世紀の初めころと推察されている。）この開削により、河内湖の水が大川を通って西の海に流れ出す。その結果、大川の開削部付近から北方の河内湖の水域は、穏やかな安定した水域になり、船舶の良い停泊地となった。所謂、長柄の船瀬。また、難波の堀江の開削に伴って、現在の大川に面した中央区高麗橋付近に難波津が開かれ、当時の物流の一大拠点となった。（国民のための日本建国史、長浜浩明； 前期難波宮、Net）
●難波宮（大阪市中央区法円坂）
孝徳天皇
乙巳の変ののち、645年に孝徳天皇は難波（難波長柄豊崎宮）に遷都し、宮殿は652年に完成した。元号の始まりである大化の改新とよばれる革新政治はこの宮でおこなわれた。この宮は建物がすべて掘立柱建物から成り、草葺屋根であった。『日本書紀』には「その宮殿の状、殫（ことごとくに）諭（い）ふべからず」と記されており、ことばでは言い尽くせないほどの偉容をほこる宮殿であった。
（難波宮−Wikipedia）



6～7世紀頃の景観
（地形から見た歴史、日下雅義）

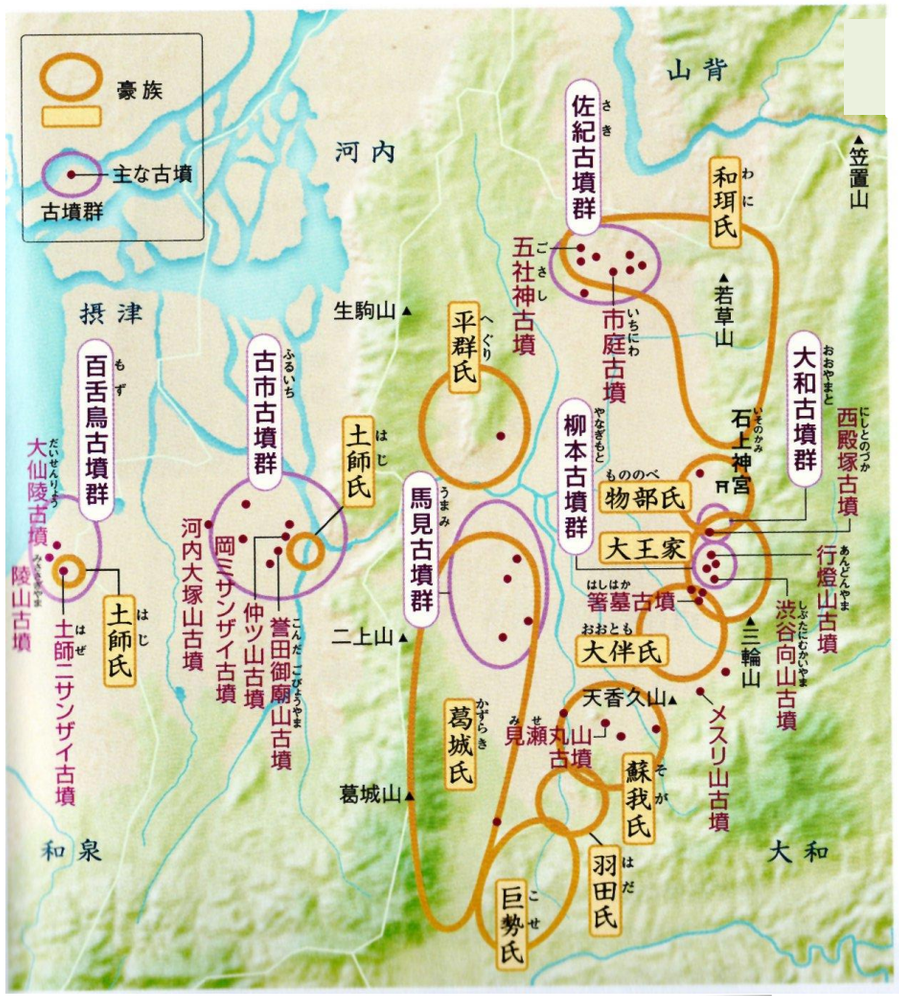
継体天皇
●河内楠葉（くずは）宮（枚方市楠葉野田）
武烈天皇の死後、大連大伴金村らによって越前の三国から、応神天皇５世の孫、男大迩王（おおど）を迎え、河内楠葉宮で即位した。
●山背国筒城（くにつつき）宮（京田辺市多々羅）
●山背弟国（おとくに）宮（長岡京市今里）
即位の５年後、楠葉宮から筒城宮に遷り、さらに、１２年後に弟国宮に遷っており、 大和の国に入ったのは２０年後のこととされる。
（楠葉宮跡（枚方市）、Net）

藤田

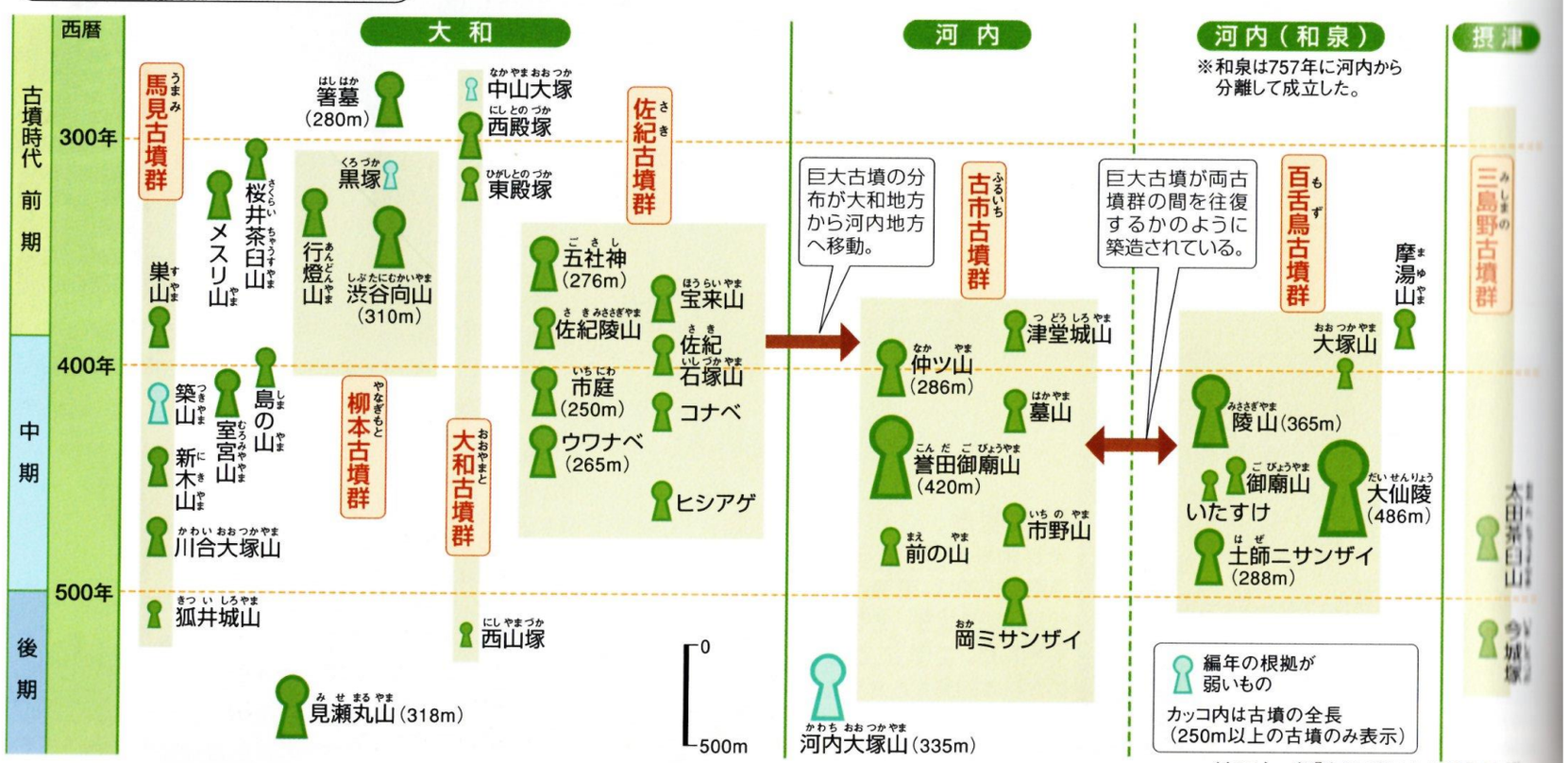
巨大古墳とヤマト王権

（崇神王朝、応神王朝）

（図解　古代史、成美堂出版）



近畿地方の主な前方後円墳



（白石太一郎『古墳の造られた時代』など）

藤田

古墳の変遷；種類と構造

弥生時代後期、盛り土をもつ首長墓「墳丘墓」が各地で築かれたが、3世紀後半に入ると、西日本ではさらに大規模な墳丘をもつ「古墳」が築造されるようになった。なかでも大和地方（奈良県）の三輪山山麓に築かれた箸墓古墳は最古の大型前方後円墳であり、この地を中心に首長（豪族）たちの政治連合「ヤマト王権」が成立していたと考えられる。以後、古墳は、4世紀中頃までに、北は東北中部から南は九州南部まで分布を広げ、全盛期を迎える。

古墳の形状は地域によって異なるが、前方後円墳はヤマト王権の首長の権威を示すものとして重視され、政権の勢威の高まりとともに各地へ波及していった。古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）、中期（4世紀末～5世紀）の地位の上位者の古墳は総じて大規模であったが、埋葬施設である石室が竪穴式から横穴式へ変わった。後期（6世紀）には縮小へと向かった。
（図解　古代史　成美堂出版）

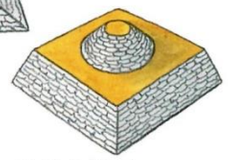
前方後円墳は邪馬台国からヤマト王権へと継承された首長墓として築造された。一方、前方後方墳は狗奴国の首長墓として造成された。（藤田）

前方後円墳
日本独自の墳形で、岩手県から鹿児島県まで各地の首長墓として築造された。

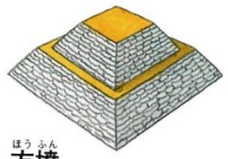
墳形が示す身分差

古墳の種類

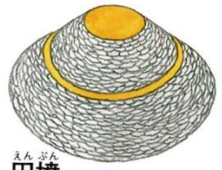
古墳は、四角と円、それらを組み合わせた形状により、数種類に分類される。墳形と身分には深いかかわりがあり、最上位が前方後円墳、次いで前方後方墳、円墳、方墳の順であったといわれる。



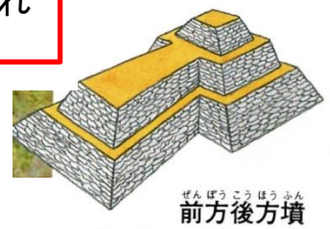
上円下方墳
方墳の上に円墳がのった形状。畿内以外ではほとんどみられない。



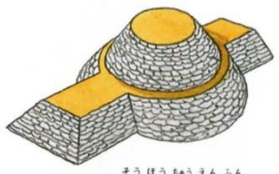
方墳
平面が方形の古墳。古墳時代終末期には、大王墓に採用された。



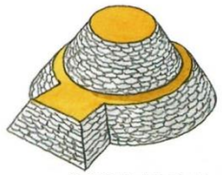
円墳
最も多くみられる墳形。平面は円形で、頂部を水平に切り取った形状。



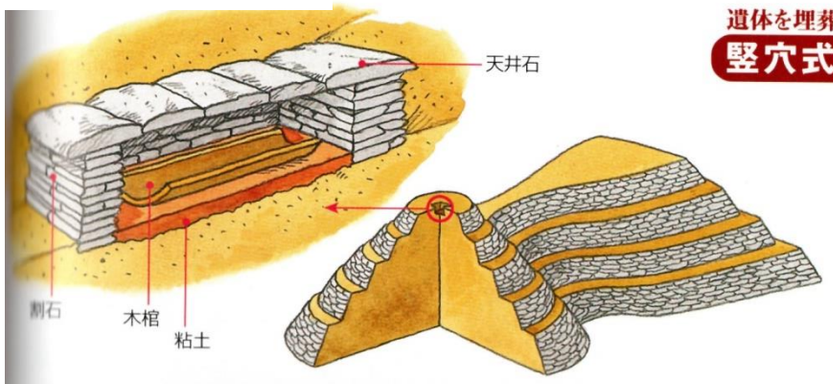
前方後方墳
前方後円墳の後円部を方形にした墳形。栃木県から北陸、山陰に多い。



双方中円墳
円墳に、相対する方墳を付設した古墳。奈良県櫛山古墳など。



帆立貝式古墳
前方後円墳の前方部が短縮された墳形。中期に各地で築造された。

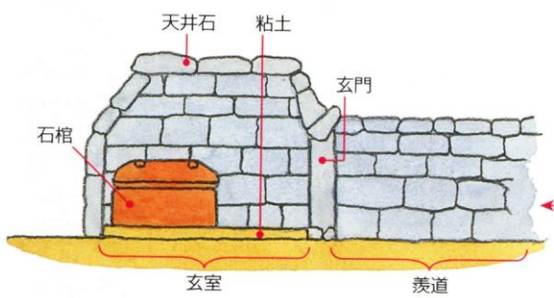


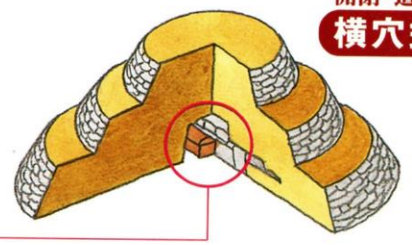
遺体を埋葬したのち密閉

竪穴式石室の構造

竪穴式石室は前期から中期の古墳にみられる。墳丘の頂上に長方形の竪穴を掘り、穴の床を粘土で覆い、壁に石を積む。棺・遺体を入れ、天井を石と粘土でふさぎ、さらにその上を盛り土で覆うため、追葬が不可能であった。

＊政治史の上では飛鳥時代にあたる7世紀を古墳時代後期に含めることもある。





開閉・追葬が可能な石室

横穴式石室の構造

横穴式石室は朝鮮半島の影響を受けて中期に導入され、後期には竪穴式に代わり広まった。棺・遺体を安置する玄室と、外に通じる通路（羨道）からなる。竪穴式と違い、通路のふた石を外すと、追葬が可能である。

埴輪は吉備の特殊器台が発展したものか？

埴輪は、3世紀後半から6世紀後半にかけて造られ、前方後円墳とともに消滅した。基本的に中空である。造り方は粘土で紐を作り、それを積み上げていきながら形を整えた。時には、別に焼いたものを組み合わせたりしている。また、いろいろな埴輪の骨格を先に作っておき、それに粘土を貼り付けるなどした。型を用いて作ったものはない。中心的な埴輪には、表面にベンガラなどの赤色顔料を塗布した。畿内では赤以外の色はほとんど用いられなかったが、関東地方では、形象埴輪にいろいろな彩色が施されている。

埴輪は、古墳の墳丘や造り出しなどに立て並べられ、大きく円筒埴輪と形象埴輪の2種類に区分される。さらに、形象埴輪を大きく分けると家形埴輪、器財埴輪、動物埴輪、人物埴輪の四種がある。形象埴輪からは、古墳時代当時の衣服・髪型・武具・農具・建築様式などの復元が可能である。

起源

埴輪の起源は、弥生時代後期後葉の吉備地方の首長の墓であると考えられている弥生墳丘墓（例えば、楯築墳丘墓）から出土する特殊器台・特殊壺（特殊器台型土器・特殊壺型土器とも呼称される）であるといわれている。3世紀中葉～後葉になると、前方後円墳（岡山市都月坂1号墳、桜井市箸墓古墳、兵庫県たつの市御津町権現山51号墳）から最古の円筒埴輪である都月型円筒埴輪が出土している。この埴輪の分布は備中から近江までに及んでいる。 最古の埴輪である都月形円筒埴輪と最古の前方後円墳の副葬品とされる大陸製の三角縁神獣鏡とが、同じ墓からは出土せず、一方が出るともう一方は出ないことが知られていた。しかし、ただ一例、兵庫県たつの市御津町の前方後円墳権現山51号墳では後方部石槨から三角縁神獣鏡が5面、石槨そばで都月型円筒埴輪が発見されている。なお、前方後円墳の出現は、ヤマト王権の成立を表すと考えられており、前方後円墳に宮山型の特殊器台・特殊壺が採用されていることは、吉備地方の首長がヤマト王権の成立に深く参画したことの現れだとされている。吉備勢力の東遷説もある。

『日本書紀』垂仁紀には、野見宿禰（のみのすくね）が日葉酢媛命の陵墓へ殉死者を埋める代わりに土で作った人馬を立てることを提案したとあり、これを埴輪の起源とする。しかし、考古学的に上記のような変遷過程が明らかとなっており、この説話は否定されている。

意義

元々、吉備地方に発生した特殊器台形土器・特殊壺形土器は、墳墓上で行われた葬送儀礼に用いられたものであるが、古墳に継承された円筒埴輪は、墳丘や重要な区画を囲い込むというその樹立方法からして、聖域を区画するという役割を有していたと考えられる。家形埴輪については、死者の霊が生活するための依代（よりしろ）という説と死者が生前に居住していた居館を表したものという説がある。古墳の埋葬施設の真上やその周辺の墳丘上に置かれる例が多い。器財埴輪では、蓋が高貴な身分を表象するものであることから、蓋形埴輪も同様な役割と考えられているほか、盾や甲冑などの武具や武器形のものは、その防御や攻撃といった役割から、悪霊や災いの侵入を防ぐ役割を持っていると考えられている。

人物埴輪や動物埴輪などは、行列や群像で並べられており、葬送儀礼を表現したとする説、生前の祭政の様子を再現したとする説などが唱えられている。このような埴輪の変遷は、古墳時代の祭祀観・死生観を反映しているとする見方もある。

（Wikipedia抜粋）

産経新聞　令和3年10月5日　夕刊
「埴輪の考案者は相撲の神様」

埴輪の製造と、日本の国技といわれる相撲は、同一人物によって始められたという説話がある。『日本書紀』に登場する出雲のの野見宿禰がその人だが、作り話にすぎないとみなされてきた。状況証拠は複数あるものの、決め手に欠けるからだ。そんな中、奈良市埋蔵文化財調査センター調査員らの研究チームが今夏、説話の舞台と考えられる埴輪製造拠点が奈良（平城京西）にあったとする論文を発表、伝説の裏付けへと前進した。
（川西健士郎）

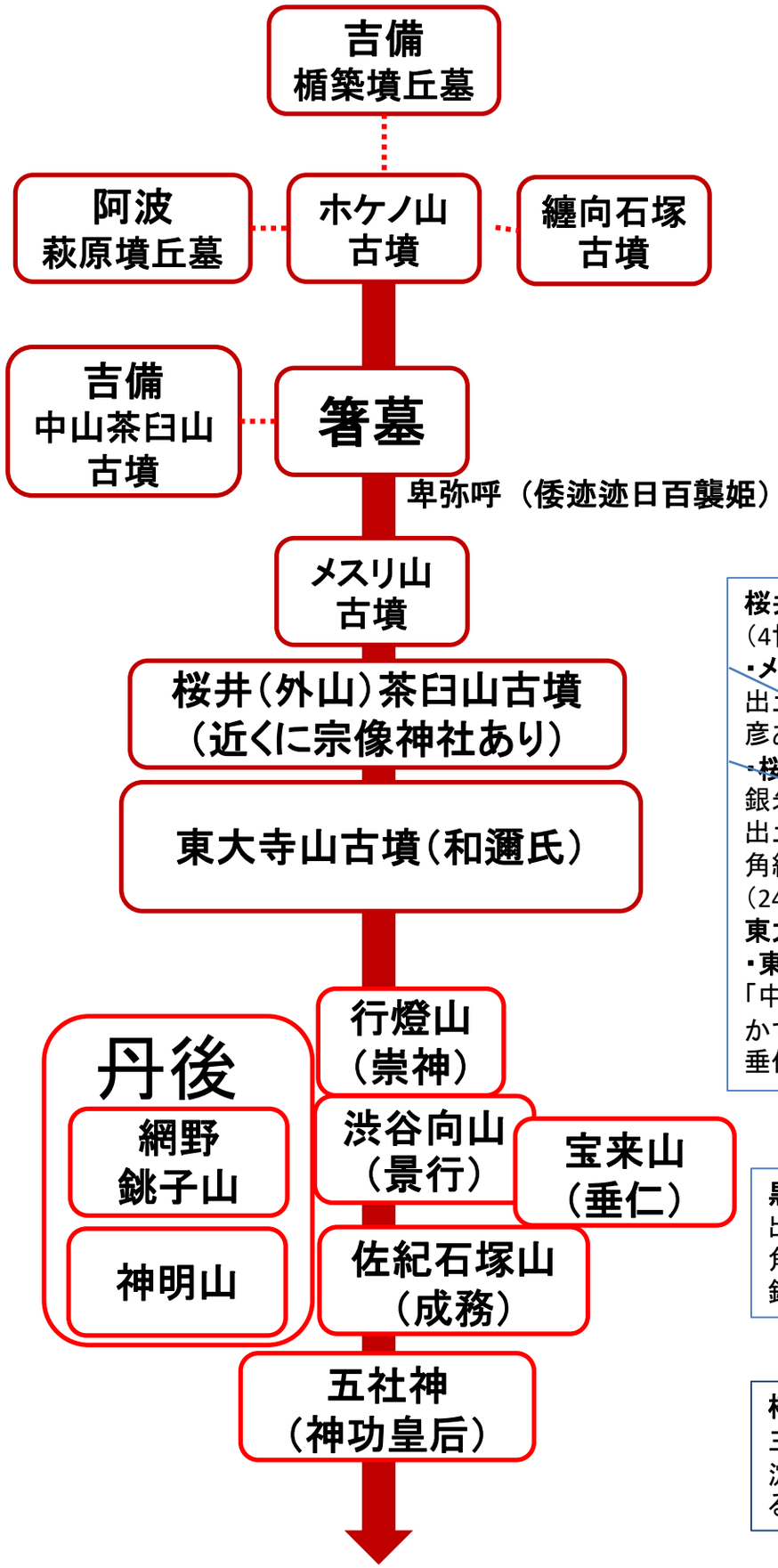
武装男子立像（群馬県太田市出土）
東京国立博物館蔵、国宝

馬形埴輪
（東京国立博物館）

千葉県芝山古墳群（殿塚・姫塚）出土埴輪
ユダヤ人を模った埴輪と思われ、スサノオなど天津神の一部はユダヤ系であるとのことと関連か

藤田

前方後円墳の変遷（1）

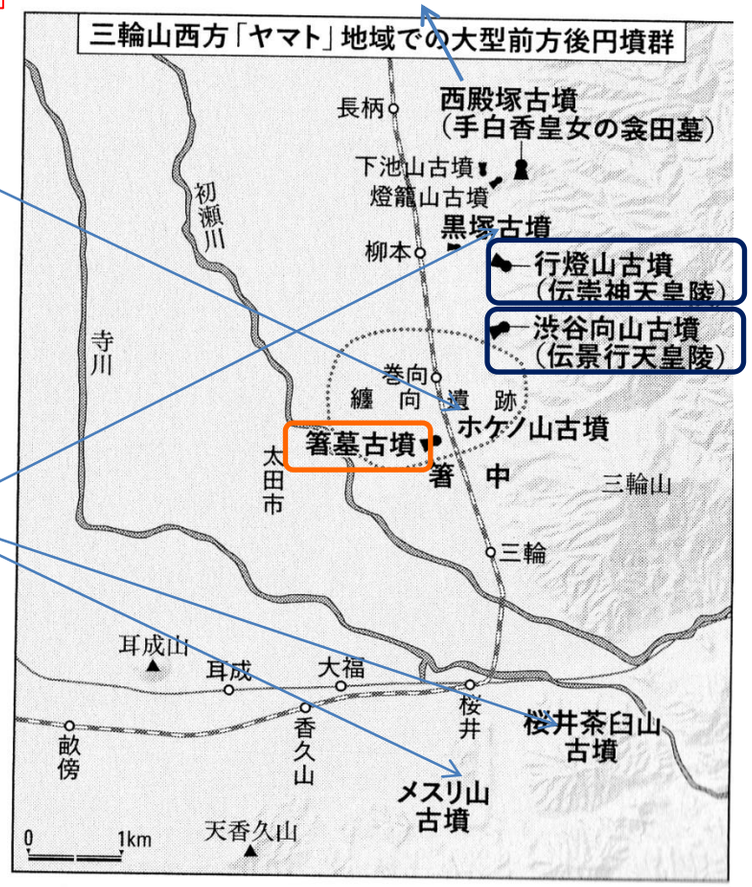


ホケノ山古墳
周濠のあるホタテ貝型前方後円墳（葺石あり、築造年代三世紀前半～中葉、全長80m）、出土遺物：石囲い木槨、画文帯神獣鏡一面、内行花文鏡や画文帯神獣鏡の破片若干、素環頭大刀を含む鉄製の刀剣類10前後、銅鏃約60本、鉄鏃60本、尖突武器（への字形鉄器）若干、工具類等。（画文帯神獣鏡は公孫氏からもたらされたものか。）
（ニギハヤヒの墓？藤田）
ホケノ山古墳と同じ埋葬施設：鳴門市の萩原1・2号墓、たつの市綾部山39号墓、京都府南丹市の黒田古墳、総社市の宮山古墳、加古川市の西条52号墳等。さらに、市原市 惣社の神門5号墳で、関東地方最古の前方後円墳（出現期型）。3世紀半ばの造営。当時は邪馬台国時代で、邪馬台国勢力が南関東に進出していた証拠か。邪馬台国の船団が東海沖を水行して南関東に至ったか。因みに、南関東の土器が纏向遺跡から出土している。

ホケノ山古墳（HiCE002: 考古学概説）

桜井市外山の鳥見山周辺のメスリ山古墳と桜井茶臼山古墳
（4世紀初頭から前半）
・メスリ山古墳
出土品：鉄製武器多数、槍200本、巨大な埴輪。被葬者は大彦あるいは武淳川別と考えられる。
・桜井（外山）茶臼山古墳（石室の内部の石材と天井石に水銀朱）（神武（崇神）陵説あり）
出土品：銅鏡片384点（破壊と推定された鏡は81面、うち三角縁神獣鏡26面）。三角縁神獣鏡の1破片には正始元年（240）銘、魏の梯儁が倭国に詣でた年。
東大寺山古墳群
・東大寺山古墳（4世紀前半ないし半ば）
「中平」（184-190)紀年銘の鉄刀出土。東大寺山古墳群のなかでは最古。メスリ山古墳とほぼ同時期と推定され、崇神・垂仁朝の和邇氏の族長（彦国葺命か）の墳墓とみられる。

台与の墓？



（私の日本古代史、上田）

黒塚古墳（4世紀初頭、主体部未盗掘）
出土品：画文帯神獣鏡1面（被葬者の頭あたり）、三角縁の鏡33面（神獣鏡32面と盤竜鏡1面）、刀剣類・鉄鏃・槍、土器・甲冑の小札・工具、鉄製品、水銀朱

椿井大塚山古墳（木津市山城町）
三角縁神獣鏡36面以上と大量に出土した。（この古墳の所在地が木津川と淀川を利用する通路の要地であったことから、被葬者はヤマト王権の協力する有力者であると類推できる。）

藤田

前方後円墳の変遷（2）

前方後円墳（中期）

土師器と須恵器
土師器（埴輪を含む）とは明瞭に区別できる、須恵器（ろくろを使う）、伽耶より伝わる。

東大寺山古墳（和邇氏）
「中平」（184-190)紀年銘の鉄刀出土
建振熊（新羅征伐）埋葬？

神功皇后が三韓征伐の後に畿内に帰るとき、自分の皇子（応神天皇）には異母兄にあたる香坂皇子、忍熊皇子が畿内にて反乱を起こして戦いを挑んだが、神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命の働きによりこれを平定したという。

荒田別、鹿我別
上毛野君の祖

西都原古墳群

吉備武彦
・ヤマトタケルの東征に同伴
・娘は、ヤマトタケルの妃
・子の鴨別（かもわけ）は、仲哀天皇の熊襲征討に功績
・兄媛は応神天皇の妃、黒媛は仁徳天皇の妃

吉備
造山
作山
両宮山

誉田御廟山（応神）

大仙陵（仁徳）

上石津ミンザイ（履中）

毛野
神明山
浅間山

葛城氏の襲津彦、秦氏の帰化
応神天皇に、百済の弓月君（ゆつきのきみ）（秦氏の祖）が百済の民人を連れて帰化したいけれども新羅が邪魔をして加羅から海を渡ってくることができないことを告げる。天皇は襲津彦を加羅に遣わして百済の民を連れ帰ろうとするが、新羅が邪魔する。天皇は加羅に兵を派遣した。新羅の王はその軍勢に怖気づくいて逃げ帰った。そして襲津彦はやっと弓月氏の民を連れて帰国した。弓月君は融通王で始皇帝の末裔？

オオヒコノミコト

6代

九州北部豪族

朝鮮半島古墳群（栄山江流域）

前方後円墳

葛城氏の滅亡
葛城氏の特徴として、5世紀の大王家との継続的な婚姻関係が挙げられる。だがこのような関係には、一度両者間の協調関係に亀裂が生じると、次第に崩壊してしまうという脆弱性を内在していた。416年7月に地震があったが、玉田宿禰は先に先帝反正の殯宮大夫に任じられていたにもかかわらず、職務を怠って葛城で酒宴を開いていたことが露顕した。玉田は武内宿禰の墓に逃げたものの、允恭天皇に召し出されて武装したまま参上。これに激怒した天皇は兵卒を発し、玉田を捕えて誅殺させたのである。允恭天皇の崩御後は、王位継承をめぐって履中系王統・允恭系王統の対立が激化したと推測される。この過程で葛城氏の円大臣は血縁的に近い市辺押磐皇子らの履中系と結ぶこととなり、允恭系との対立をますます深めたのであろう。允恭系の安康天皇の即位によって劣勢に立たされた円大臣は勢力を回復すべく、次期大王として押磐皇子の擁立を画策したらしい。ところが安康天皇が暗殺され、円大臣がその下手人である眉輪王を自宅に匿う事件が起きた。大泊瀬皇子（後の雄略）の軍によって宅を包囲された大臣は、王の引き渡しを拒否し、娘と葛城の宅七区）とを献上して贖罪を請うたが、皇子はこれを許さず、宅に火を放って円大臣・眉輪王らを焼殺した（眉輪王の変）。大王家とも比肩し得る雄であった葛城氏は、雄略とその配下の軍事力の前に、完全に潰え去ることとなったのである。

稲荷山古墳（埼玉県）
金錯銘鉄剣出土

オワケ
雄略天皇に仕える

岡ミサンザイ（雄略）

高島の鴨稲荷山
（継体天皇の父、
彦主人王、あるいは長
子大郎子を埋葬？）

高槻の今城塚（継体）
（石棺に阿蘇ピンク石）

広帯二山式冠・
捩じり環頭太刀出土
（雄略・継体期威信財）

滋賀県立安土考古博物館蔵

東京国立博物館蔵

箸墓など出現期の古墳

畿内地域における出現期古墳の分布

右図にみられるように、奈良盆地東北部の大和川流域の本来の「やまと」の地域には、箸墓古墳（卑弥呼、倭迹迹日百襲姫の墓）、西殿塚古墳（台与の墓？）などの巨大古墳や中山大塚（同120メートル）、黒塚古墳（同130メートル）などの出現期古墳が集中している。これに対し、北部の淀川流域では、山城南部の相楽地域に椿井大塚山古墳が、山城北部の乙訓地域には前方後方墳である元稲荷古墳が、摂津の三島野地域の三島野古墳群には弁天山A一号墳（墳丘120メートル）などが、さらに北河内の交野市の交野古墳群には森一号墳（同106メートル）など、いずれも出現期に遡る有力な前方後円墳あるいは前方後方墳がみられる。

これに対し　奈良盆地西南部の葛城地方や大阪平野中部の河内中・南部には、いまのところ出現期の顕著な古墳はまったく見つかっていない。これらの地域に古墳が出現するのは、葛城では馬見古墳群の奈良県広陵町の前方後方墳の新山古墳（同130メートル）、南河内では大阪府柏原市の玉手山9号墳（同65メートル）など前期でもその第2段階をまたねばならない。

弥生時代から、北の淀川流域と南の大和川流域とで弥生土器の様相が大きく異なることは、佐原眞氏が指摘していた（大和川と淀川の日本、角川、1970年）。北の淀川流域では各地に出現期古墳が点々とみられるのに対して、南の大和川流域では上流の奈良盆地東南部の「やまと」の地に限られ、しかもこの地に他の地域との古墳と隔絶した規模のものが見られる事は、この時期大和川流域では「やまと」の覇権が確立しており、それ以外の地域の勢力の古墳造営が規制されていたためではなかろうか。すなわち、この大和川流域こそが邪馬台国、ひいては初期ヤマト政権の本来的領域にほかならない。
（古墳とヤマト政権　古代国家はいかに形成されたか、白石太一郎）

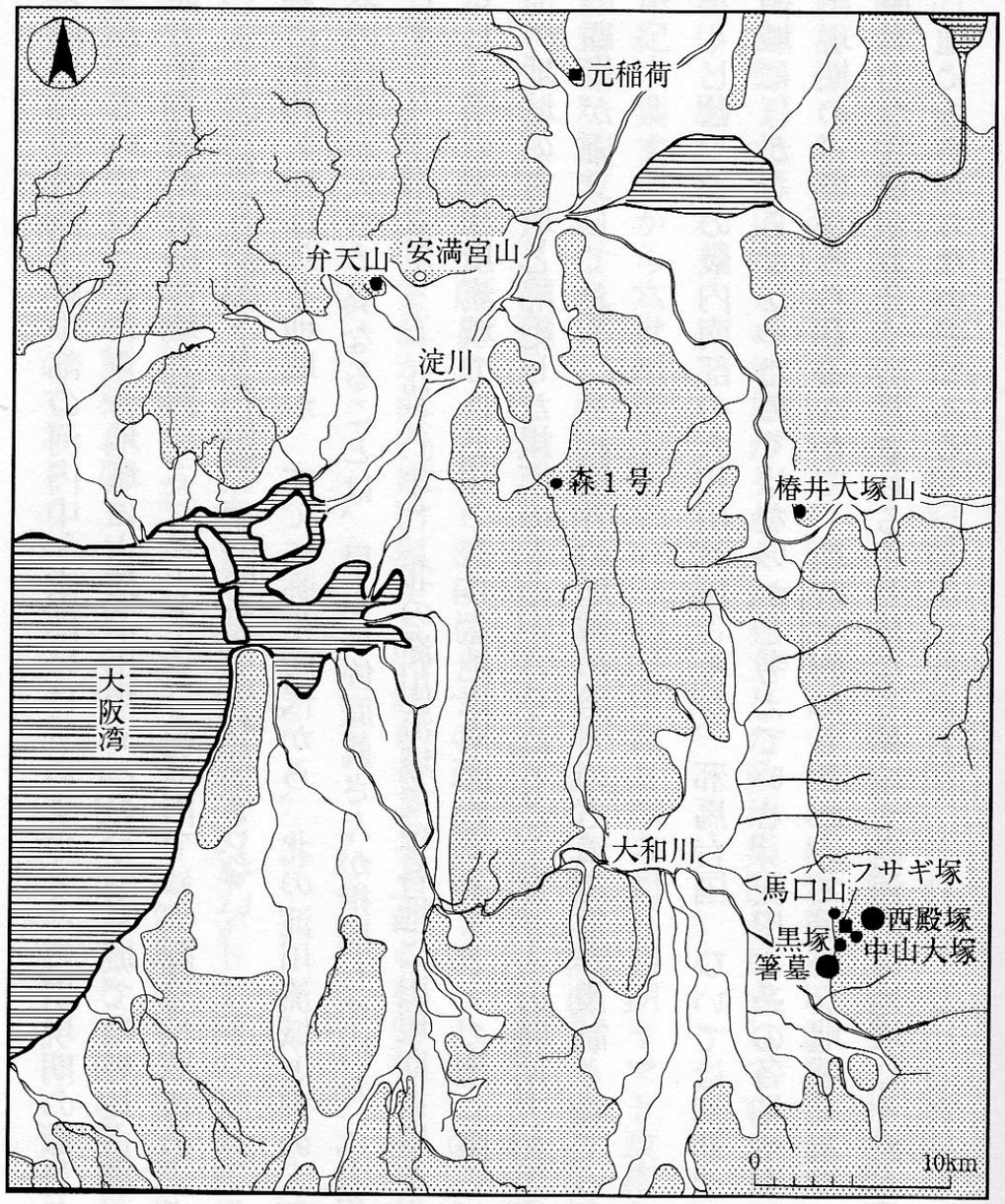


図7　近畿中央部における出現期古墳の分布

●前方後円墳
■前方後方墳
○墳丘墓

藤田

古墳群の変遷

柳本古墳群（天理市柳本町）
・行燈山古墳（崇神天皇陵）

⬇ **政権交代**

佐紀盾列古墳群（4世紀後半～）
・北西端（山陵町）　五社神古墳（神功皇后陵）
・西（山陵町・佐紀町）　佐紀石塚山古墳（成務天皇陵）、
佐紀陵山古墳（垂仁天皇妃・日葉酢媛陵）
・東（佐紀町・法華寺町）
ヒシアゲ古墳（磐之媛陵）
・関連古墳（尼ヶ辻町）　宝来山古墳（垂仁天皇陵）

富雄丸山古墳
国内最大の鏡と剣出土「金工の最高傑作」
狭穂姫陵（？）

内乱

百舌鳥古墳群（大阪府堺市）
1．大仙陵古墳（仁徳天皇陵）
2．上石津ミサンザイ古墳（履中天皇陵）
3．田出井山古墳（反正天皇陵）

古市古墳群（羽曳野市・藤井寺市）
1．誉田御廟山古墳（応神天皇陵）
2．仲津山古墳（応神天皇皇后仲姫陵）
3．岡ミサンザイ古墳（仲哀天皇陵）
4．市野山古墳（允恭天皇陵）
5．軽里大塚古墳（日本武尊陵）
6．野中ボケ山古墳（仁賢天皇陵）
7．高屋城山古墳（安閑天皇陵）
8．白髪山古墳（清寧天皇陵）

丹後の3大古墳
・蛭子山古墳（京都市謝野郡謝野町）
・網野銚子山古墳（京丹後市網野町）
・神明山古墳（京丹後市丹後町）

墳形が酷似

五色塚古墳（神戸市垂水区）
香坂王・忍熊王築造か

→ 忍熊王は福井県の剱神社の祭神であり、淀川系から日本海側まで大きな勢力をもっていたのではないか？

柳本古墳群（天理市柳本町）
・渋谷向山古墳（景行天皇陵）

成務天皇（稚足彦尊（わかたらしひこのみこと）
1．成務天皇は「境を定め邦を開きて、近淡海に制したまいき」『古事記』
2．都は志賀高穴穂宮（しがのたかあなほのみや、現在の滋賀県大津市穴太）。『古事記』に「若帯日子天皇、近つ淡海の志賀の高穴穂宮に坐しまして、天の下治らしめしき」とある。
3．武内宿禰を大臣とした。
4．諸国に令して、行政区画として国 郡（くにこおり）・県邑（あがたむら）を定め、それぞれに造長（くにのみやつこ）・稲置（いなぎ）等を任命して、山河を隔にして国県を分かち、阡陌（南北東西の道）に随って邑里（むら）を定め、地方行政機構の整備を図った。

大仙陵古墳（仁徳天皇陵）

図 3-6　大阪と奈良の前方後円墳分布図（白石太一郎『考古学と古代史の間』より，一部改変）

（ヤマト王権、吉村）

藤田

国内最大の鏡と剣出土「金工の最高傑作」 富雄丸山古墳

日本経済新聞　2023年1月25日 18:05 (2023年1月25日)

奈良市にある日本最大の円墳・富雄丸山古墳（4世紀後半、直径約109メートル）の造り出し部にある粘土槨（ねんどかく、埋葬施設）から、例のない盾形銅鏡（長さ約64センチ、幅約31センチ）と、蛇のように曲がった蛇行剣（長さ約2.3メートル、幅約6センチ）が見つかり、奈良市教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所が25日発表した。ともに国内で出土した青銅鏡、蛇行剣の中で最大。

会見した県立橿原考古学研究所の岡林孝作副所長は「古墳時代の技術が想像以上だったことを示しており、同時代における金工品の最高傑作」と評価した。鏡は盾形で出土例がなく、鏡、剣ともに古墳研究史上の画期的な発見という。

文面は国産の鼉龍鏡（だりゅうきょう）2枚を配置したデザインで、鼉龍文盾形銅鏡と名付けられた。鼉龍は空想上の怪獣。文様面には他にも鋸歯文（きょしもん）もあった。

蛇行剣では最古。柄やさやといった装具の痕跡も残っており、これらを含めた全長は2.6メートル。重さは未計測。これまでの最大の蛇行剣は北原古墳（奈良県宇陀市）の約85センチ。武器として実用性は低いとみられる。鏡も盾も被葬者を悪霊から守る辟邪（へきじゃ）の道具と考えられている。剣も威力を強めるため大型化したとみられる。

古墳は奈良と大阪を結ぶ交通の要衝にあり、大和政権を支えた有力者の墓とされる。粘土槨は木棺を粘土で覆った埋葬施設。古墳墳頂部の粘土槨からも多彩な副葬品が出土していた。墳丘北東側には祭祀（さいし）の場とされる造り出し部があり、新たな粘土槨が見つかり、奈良市が発掘。粘土槨は未盗掘で、鏡と剣は粘土の中から見つかった。今回の粘土槨の被葬者は、最初に埋葬された人物と関わりの深い人物と推定されている。
〔共同〕

蛇行剣　古墳時代中期に多く見られる鉄剣で、剣身が蛇のように波打っているのが特徴。古墳や地下式横穴墓から副葬品として出土し、国内では九州南部や畿内を中心に85例。韓国でも4例あるが、日本が発祥と考えられている。蛇行の回数はさまざま。実戦用の武器ではなく、何らかの祭祀的な儀礼に使われていたとみられている。〔共同〕
鼉龍鏡　古墳時代の国産鏡で西日本から多く出土する。中国の画文帯神獣鏡などの文様をアレンジして造られたと考えられている。鼉龍は空想上の怪獣。鏡は大型、中型、小型があり、柳井茶臼山古墳（山口県柳井市）の鼉龍鏡は直径が約45センチもあり、古墳時代では国内最大の鏡。福岡県糸島市の平原遺跡（弥生時代）でも直径約46センチの内行花文鏡が出土している。〔共同〕

奈良市にある日本最大の円墳・富雄丸山古墳から出土した蛇行剣の実物大エックス線写真（20日、奈良県橿原市）=共同

国内で出土した鏡では最大の青銅鏡。鼉龍文盾形銅鏡と名付けられた（20日、奈良県橿原市）=共同

富雄丸山古墳の所在地は、神武東征（3世紀末の崇神東征がメイン）で、神武に反抗した大国主の末の長髄彦の根拠地であり、また垂仁天皇の直轄地でもあった。この古墳の築造時期は4世紀半ば（若干後か）であり、長髄彦の活躍した時代（3世紀末）より1世紀近くも後なので、被葬者は垂仁朝関連の人物と思われる。垂仁朝の一大事件と言えば、狭穂彦の謀反が挙げられる。狭穂彦の妹の狭穂姫は垂仁天皇の妃であるのに狭穂彦の謀反に加担し兄に殉死した。このことと富雄丸山古墳は垂仁陵の近くあることから大胆に推察して、その被葬者は狭穂彦ではなく狭穂姫ではないかと考える。
　垂仁朝は崇神朝から政変を伴って移行しており、垂仁朝は丹後などの日本海側の勢力の影響を強く受けている。ちなみに、狭穂彦と狭穂姫は日子坐王の子である。

古墳時代前期の関連古墳の築造年代は、2枚後のスライドに示す通りです。崇神陵の行燈山古墳、築造は4世紀半ばの若干前；日葉酢媛命陵の佐紀陵山古墳、4世紀半ば過ぎ（富雄丸山古墳とほぼ同時期）；垂仁陵の宝来山古墳、4世紀後半。この築造時期の順序を鑑みると、富雄丸山古墳の被葬者は狭穂姫である可能性が高いと思う。（沙穂彦は謀反の張本人で垂仁陵近辺に葬られることはないと思われるが、沙穂姫は謀反人の妹であるが垂仁天皇の皇子をもうけているため円墳に葬られたのではないかと推察する。）（藤田、FBコメント）

古墳時代中期

百舌鳥古墳群と古市古墳群

祝　百舌鳥・古市古墳群を世界遺産登録

アゼルバイジャンで開催中の国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産委員会は6日（令和元年7月）、日本が推薦していた「百舌鳥（もず）・古市（ふるいち）古墳群」（大阪府）を世界文化遺産に登録することを決めた。

成務朝の倭国の平定および応神東征により、倭国は隆盛期を迎え、倭国軍が強力な武力を背景に半島南部に進出するとともに、壮大な前方後円墳の建造を含む大土木事業が活発化する。また半島や中国との交流も日本海経路ではなく主に瀬戸内海経路をとるようになる。最大級の前方後円墳は、河内の古市・百舌鳥古墳群の誉田御廟山（応神陵）、大仙（仁徳陵）や上石津ミンザイ（履中陵）で、その当時地方の有力豪族（吉備、日向や毛野）も巨大な前方後円墳を築造した。その後、倭国の勢力下にある半島南部の栄山江流域に前方後円墳群が造られた。また、古墳の石室が竪穴式から横穴式に変遷する。古墳時代後期（6世紀）になると古墳の規模は縮小へと向かった。
（藤田）

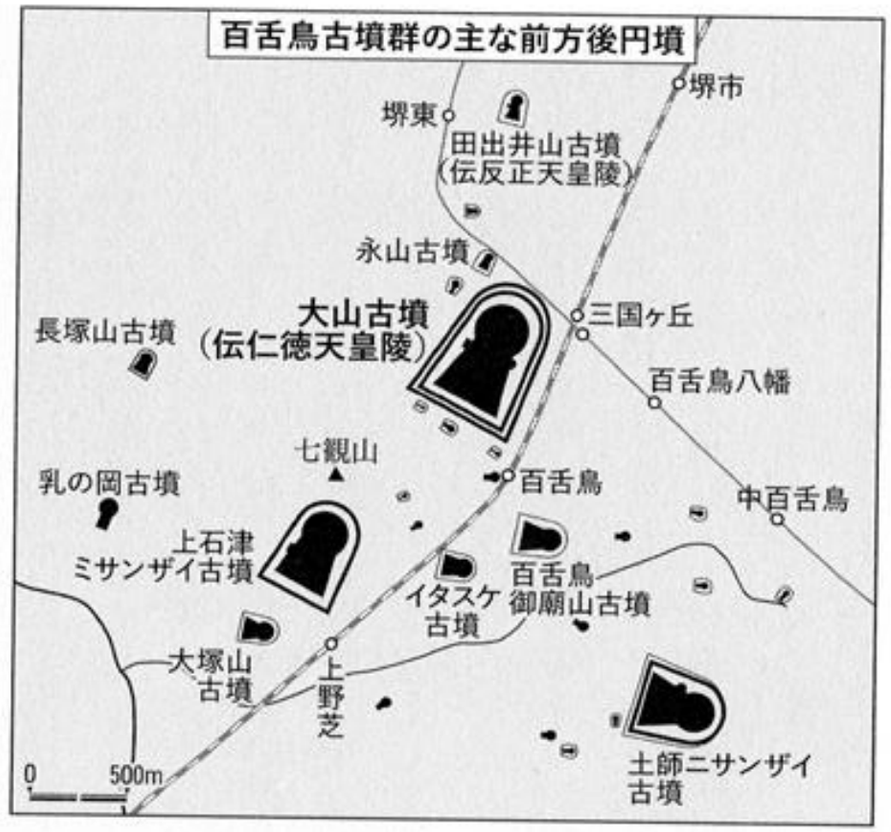
百舌鳥古墳群と古市古墳群

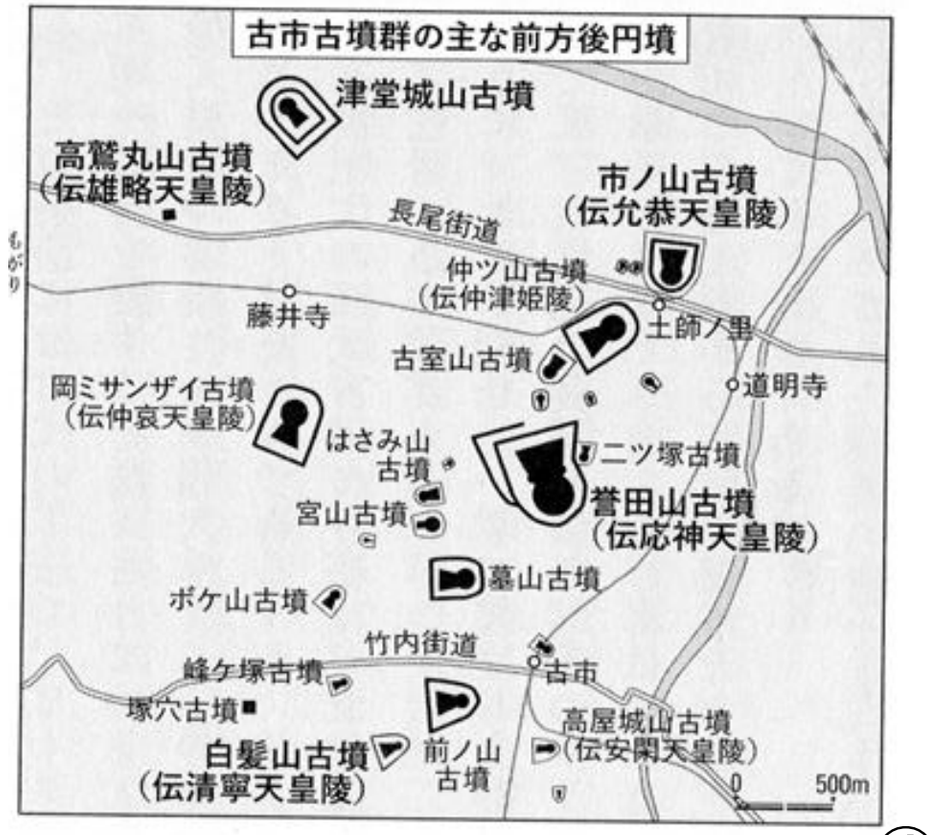
5世紀代の巨大な前方後円墳は河内国（旧河内国は和泉国を含む）に集中している。その巨大古墳の第一位に位置するのが大山古墳（伝仁徳天皇陵、全長487m）で、百舌鳥古墳群に含まれる。第2位に位置するのが誉田山古墳（伝応神天皇陵、430m）で、古市古墳群に含まれる。なぜ、巨大な前方後円墳が河内に集中しているのか。

日本神話の代表的なひとつに国生み神話がある。イザナギとイザナミによる「オノコロ嶋」をはじめとする島生み・国生みの神話である。この神話の原像は淡路島とその周辺の海人集団の島生み神話に由来すると思われるが、それが大阪湾上を起点に展開する国生み神話に昇華した時期は応神王朝の時代がふさわしい。また、大王の宮居伝承は大和に多いが、河内や難波にもある。たとえば、応神天皇、仁徳天皇、反正天皇、顕宗天皇の宮居は河内や難波に展開している。加えるに、ヤマト王権をになう有力氏族の本拠も河内の地域にあった。物部氏や大伴氏の本拠は大和にあったが、物部氏は河内の渋川郡のあたりに、大伴氏は摂津の住吉から河内の南部に勢力を保有していたことは史料で確認できる。また、藤原不比等の出身氏族である中臣氏も北河内から摂津にかけての地域に有力な本拠地があった。この藤原不比等は、『日本書記』や『古事記』の記述内容に大きな影響を与えた。（私の日本古代史、上田）

崇神王朝時代は日本海勢力と瀬戸内海勢力との覇権争いが見られた。神功皇后が三韓征伐の後に畿内に帰還する際、自分の皇子（応神天皇）とは異母兄にあたる香坂皇子・忍熊皇子が畿内で反乱を起こして戦いを挑んだ。神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命（彦国葺命の孫）の働きによりこの反乱を平定した。それ以来瀬戸内海勢力が日本海勢力を圧倒したと思われ、半島と大和の往来は瀬田内海経由になった。大陸や朝鮮からの使節が大和に向かうとき、まず目に入ったのが河内の巨大な前方後円墳であり、倭国の国力を見せつけるのにこれらの古墳群が役立った。（藤田）

河内政権（4世紀末～6世紀末））は、伽耶地域の首長と連携した。古市古墳群の前方後円墳には伽耶地域との技術的関連が伺える甲冑や刀剣などの鉄製品が数多く副葬されている。（邪馬台国から大和政権へ、福永伸哉）





（私の日本古代史、上田）

歴代天皇陵の築造年代

4世紀の歴代の天皇（皇后）は、崇神⇒垂仁⇒景行⇒成務⇒仲哀⇒神功である。仲哀陵は岡ミサンザイとされるが、築造年代からしてあり得ない。また、垂仁陵と景行陵の築造時期が若干逆転している。

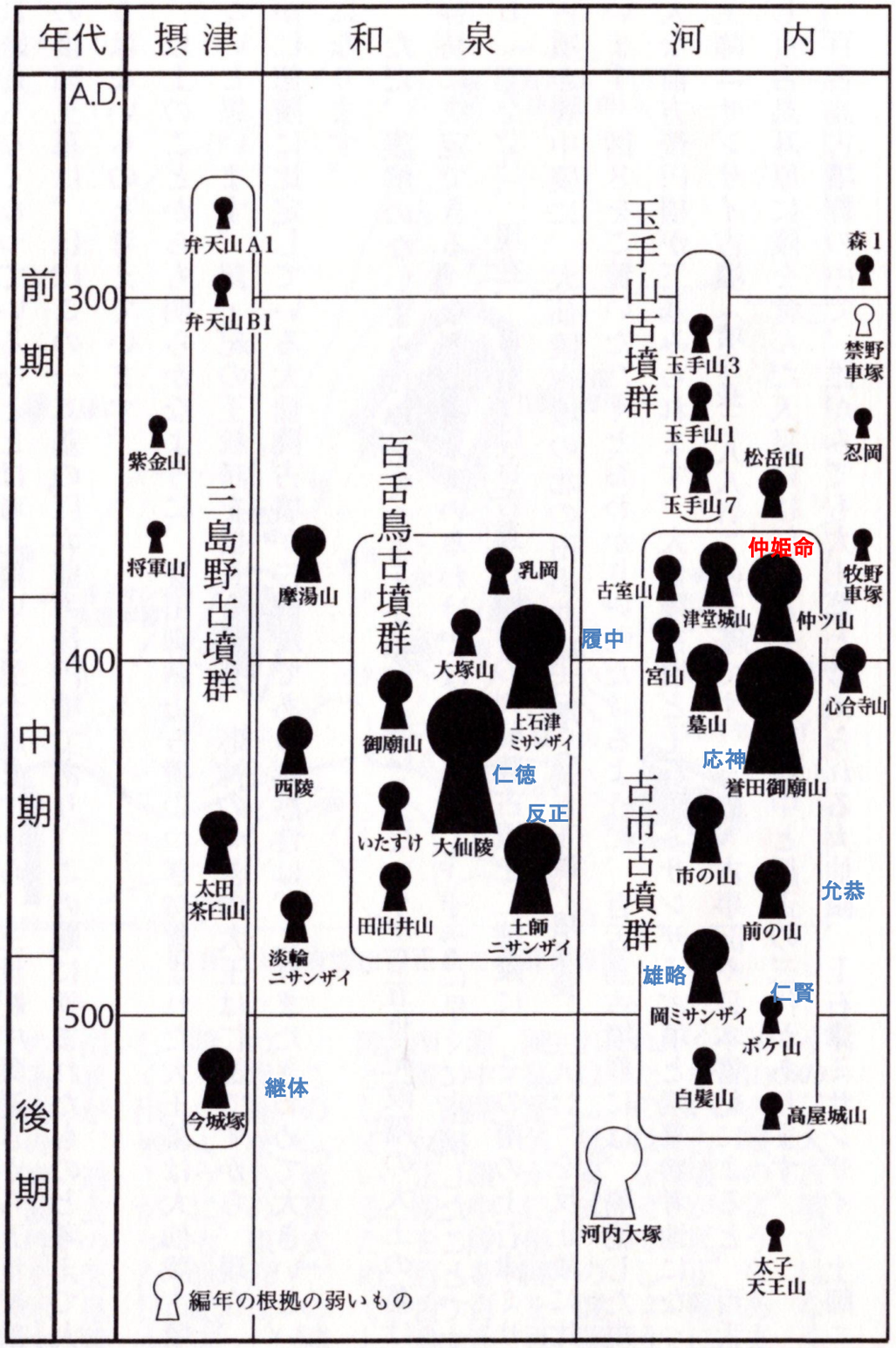
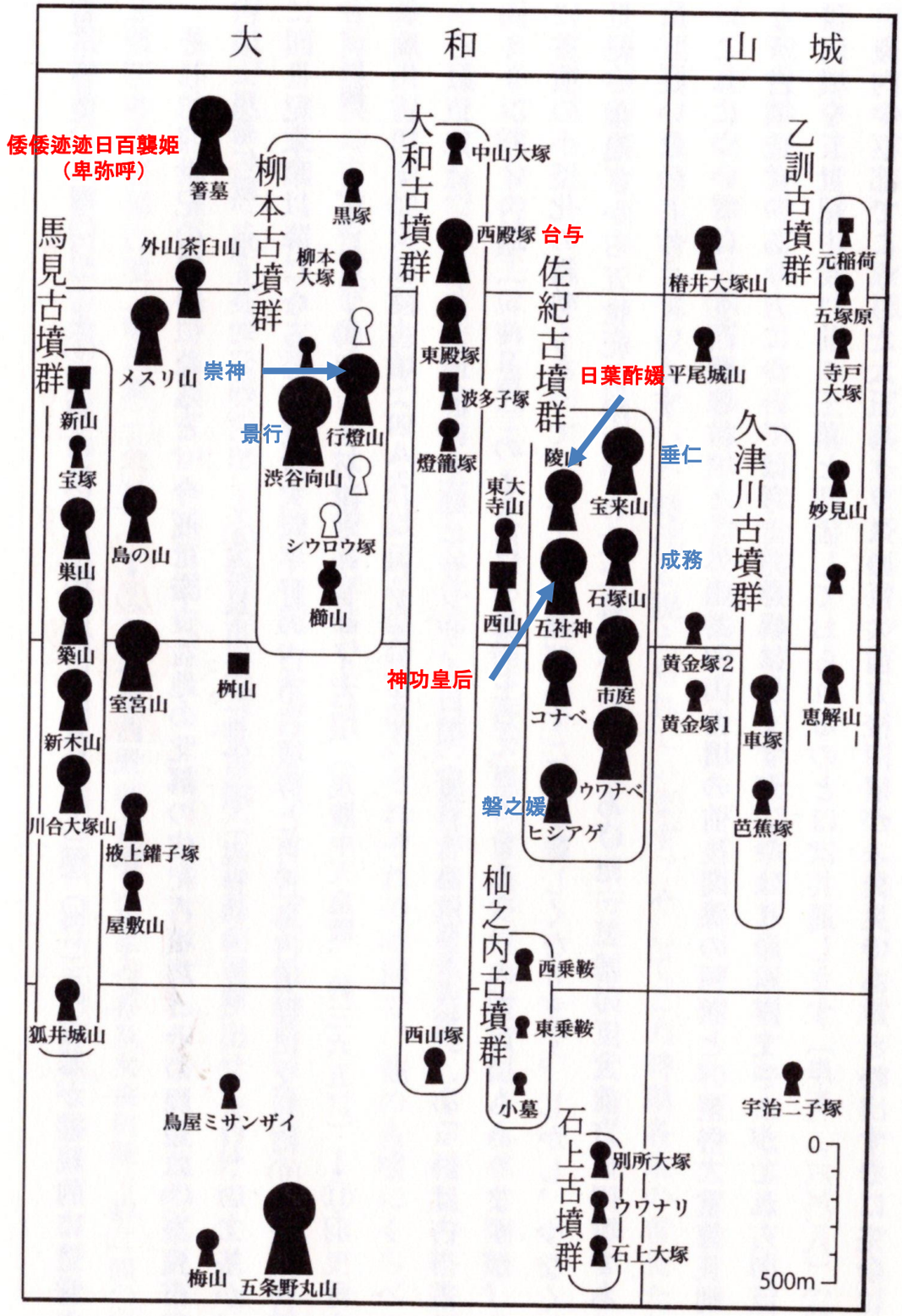


図7　畿内における大型古墳編年図

（天皇陵古墳を考える、白石太一郎他）　p144



藤田

朝鮮半島の前方後円墳

ヤマト政権のシンボルとされる前方後円墳が、韓国南西部に少なくとも12基ある。また、須恵器が前方後円墳分布域に運ばれている。

産経ニュース

2015.1.8

朝鮮半島に前方後円墳12基　奈良・橿考研博の学芸員が報告

ヤマト政権のシンボルとされる前方後円墳が、韓国南西部に少なくとも12基あることがわかり、橿原考古学研究所付属博物館（橿原市）の坂（ばん）靖・総括学芸員が、日韓の考古学者らが出席して同研究所で開かれた研究集会で発表した。12基の築造は5世紀末～6世紀前半。当時、韓国南西部を支配していたのは百済（くだら）だが、中央集権体制は確立されておらず、被葬者は日本列島との関わりを権勢の基盤にした、地域の有力者と考えられるという。

韓国では1980年代ごろから前方後円墳に注目が集まり始めた。研究機関の調査により、光州広域市や全羅南道（ぜんらなんどう）地域（咸平郡や海南郡など）で前方後円墳が確認されている。

研究者によっては判断が分かれる古墳もある中で、坂総括学芸員が前方後円墳と判断した古墳は計12基。うち新徳1号墳（咸平郡）は、全長約51メートル。横穴式石室と周濠、葺石（ふきいし）を持ち、金銅製の冠片や鉄刀、馬具、玉類などの副葬品が出土している。月桂洞1号墳（光州広域市）は全長約45メートル。横穴式石室と周濠、埴輪（はにわ）を持ち、鉄斧や鉄鏃なども見つかった。また、最も大きい長鼓峯古墳（海南郡）は全長77メートルで、横穴式石室と埴輪が確認されている。

前方後円墳はヤマト政権のシンボルとされ、日本国内では北は岩手県から南は鹿児島県まで、数多く点在する。

当時、朝鮮半島の南西部を支配していたのは百済だが、中央集権体制は確立されておらず、その領土も明確ではなかったという。そうした中、朝鮮半島と日本（倭）の間を自由に往来する集団がいたとみられ、前方後円墳の被葬者については倭人将軍説や、亡命倭人説、百済王権内の倭人官僚説など、諸説がある。

5世紀末～6世紀前半

図4-12　韓国栄山江流域の前方後円墳

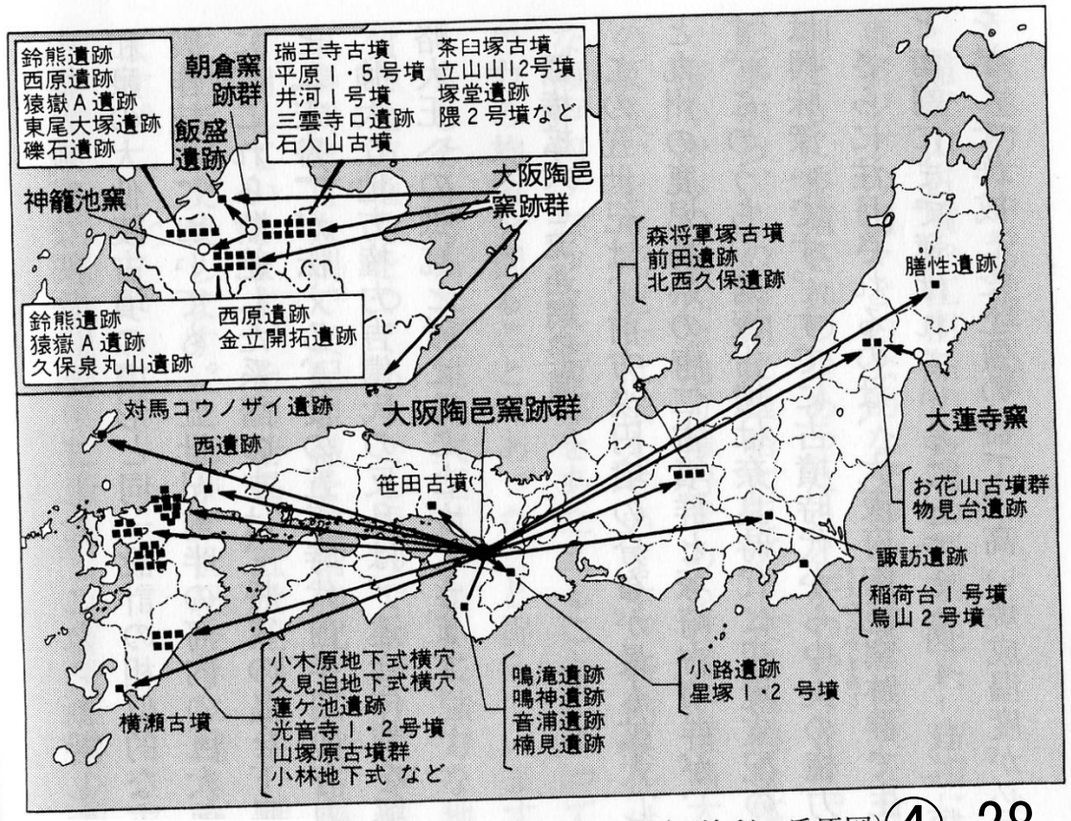
（古代国家はいつ成立したか、都出）

前方後円墳の分布と須恵器の流通

5世紀は前方後円墳の分布が最も拡大した時期でもある。岩手県角塚古墳と鹿児島県の唐仁古墳群が前方後円墳分布域の北端と南端にあたる。大阪府の陶邑窯跡群で生産された須恵器が前方後円墳分布域の北端と南端にまで運ばれている。（古代国家はいつ成立したか、都出）

5世紀に渡来した工人が開いた大阪・陶邑窯跡群（すえむらようせきぐん）出土の須恵器。

（図解　古代史　成美堂出版）



陶邑窯産の須恵器の流通（三辻利一氏原図）

古墳時代前期

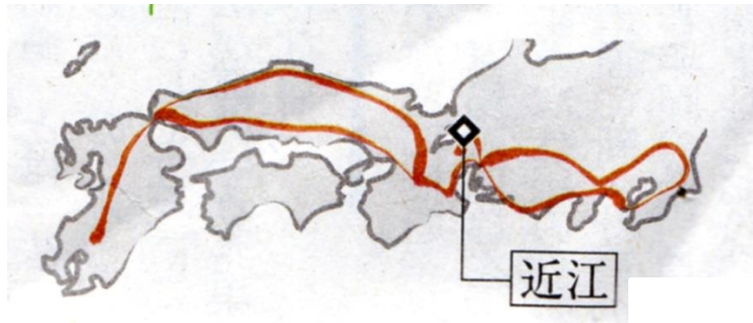
倭国平定

崇神王朝　崇神から仲哀

崇神東征から倭国平定

① 神武東征後の豪族・土豪の抵抗　『日本書記』では、長髄彦との戦いに続けて、大和盆地内の4か所の帰順しない賊を退治する。
② 崇神天皇御代、東征で破れた葛城勢の鎮圧　孝元天皇の皇子で武埴安彦（タケルハニヤスヒコ）王と妻の吾田媛（アタヒメ）が謀反を起こすが、吉備津彦が武埴安彦の妻の吾田媛の軍を河内で破り、一方、大彦命と和邇の祖、彦国葺（ヒコクニブク）の軍は武埴安彦の軍を破った。崇神天皇の政権は安定した基盤を築くことになる。
③ 出雲挟撃　ウマシマジノミコトは、神武天皇のヤマト建国を助けた後、尾張氏の祖の天香山命と共に、尾張、美濃、越国を平定した。ウマシマジノミコトはさらに西に向かい、播磨、丹波を経て石見に入ると、この地に留まった。（『日本書紀』では葦原中国平定 「出雲の国譲り」の段は、この時のことか？）
④ 四道将軍の派遣　大彦命を北陸に、武淳川別を東海に、吉備津彦を西道に、丹波道主を丹波に派遣した『日本書紀』。『古事記』では孝霊朝のとき、吉備津彦を吉備に派遣したとある。
⑤ 出雲神宝事件　崇神天皇のとき,出雲の神宝を天皇に献上した弟の飯入根(いいいりね)を兄の振根がだまし討ちにする。振根は朝廷の派遣した吉備津彦命と武淳川別命に殺された。（倭建命は出雲に入り、出雲建の太刀を偽物と交換して太刀あわせを申し込み、殺してしまう。（『日本書記』の出雲神宝事件と重なるか？）
⑥ 狭穂毘古の反乱　垂仁朝、狭穂毘古（坐王王の子）が反乱を起こし、妹の狭穂毘売は兄に殉じた。
⑦ 倭建尊西征　倭建尊（日本武尊）、九州の熊襲建兄弟の討伐を命じられる。九州に入った倭建尊は、熊襲建の宴に美少女に変装して忍び込み、宴たけなわの頃にまず兄建を斬り、続いて弟建に刃を突き立てた。熊襲討伐後は吉備や難波の邪神を退治した。
⑧ 倭建尊東征　西方の蛮族の討伐から帰るとすぐに、景行天皇は東方の蛮族の討伐を命じ、吉備武彦とともに出発する。伊勢で倭姫命より草薙剣を賜る。駿河にて、草那芸剣で草を掃い、迎え火を点けて敵を焼き尽くす。海路、相模から上総、さらに北上し、北上川流域（宮城県）に至る。陸奥平定後は、甲斐酒折宮へ入り、武蔵、上野を巡って鳥居峠（群馬・長野県境）で、吉備武彦を越（北陸方面）に遣わし、自らは信濃に入る。その信濃の坂の神を殺し、越を周った吉備武彦と合流して、尾張に到る。尾張で美夜受媛と結婚する。そして、草那芸剣を美夜受媛に預けたまま、伊吹山に出立する。山の神の祟りで病身となり、尾津から能褒野へ到る。朝廷には吉備武彦を遣わして報告させ、自らは能褒野の地で亡くなった。また、大伴氏の始祖とされる武日（たけひ）命も倭建命の東征に従軍し、倭建命は伊勢で薨じたが、武日命は無事に大和に帰還した。
（倭建尊は、伊吹山を拠点とする大国主の流れを汲む狗奴国勢力（八岐大蛇）との戦いで敗死か。）
⑨ ヤマト王権の確立　成務朝、「境を定め邦を開きて、近淡海に制したまいき」『古事記』とは、「伊吹山（狗奴国）を制し、近江をヤマト政権の支配下に置くことにより、ほぼ全国統一を果たし諸国の国グニの境を定めた」との意であろう。
⑩ 近淡海（ちかつおうみ）国造の祖の意富多牟和気（おおたむわけ）の娘にヤマトタケルと結婚したフタジヒメがいる。成務朝、二人の子の稲依別（イナヨリワケ）王の忠犬が大蛇（八岐大蛇か）を退治した。稲依別王は、犬上君、建部君等の祖である。狗奴国の滅亡か

（藤田）



倭建命の西征・東征ルート

産経新聞　平成28年12月6日

瀬戸内海航路を開いたか

日本武尊（倭建命）
西征
熊襲討伐後は吉備や難波の邪神を退治
東征
吉備武彦とともに出発する。伊勢で倭姫命より草薙剣を賜る。駿河にて、草那芸剣で草を掃い、迎え火を点けて敵を焼き尽くす。海路、相模から上総、さらに北上し、北上川流域（宮城県）に至る。陸奥平定後は、甲斐酒折宮へ入り、武蔵、上野を巡って鳥居峠（群馬・長野県境）で、吉備武彦を越（北陸方面）に遣わし、自らは信濃に入る。その信濃の坂の神を殺し、越を周った吉備武彦と合流して、尾張に到る。尾張で美夜受媛と結婚する。そして、草那芸剣を美夜受媛に預けたまま、伊吹山に出立する。山の神の祟りで病身となり、尾津から能褒野へ到る。朝廷には吉備武彦を遣わして報告させ、自らは能褒野の地で亡くなった。

吉備武彦
・娘は、ヤマトタケルの妃
・子の鴨別（かもわけ）は、仲哀天皇の熊襲征討に功績
・兄媛は応神天皇の妃、黒媛は仁徳天皇の妃

古墳時代前期

四道将軍

崇神

崇神王朝の成立と諸国平定

宝賀・貝田推論によると 崇神元年は西暦315年

『古事記』

派遣将軍

孝霊朝

吉備津日子命

若建吉備津日子命

吉備

開化朝

日子坐王

丹波

『日本書紀』

四道将軍

崇神朝

大彦命 — 北陸

武渟川別 — 東海

吉備津彦命 — 西道

丹波道主王命（タニハノヒコタタス ミチノウシノヒコ） — 丹波

会津で会う

吉備津彦命は孝霊天皇の皇子で、他の四道将軍とは2世代遡るため訝っていたが、『古事記』の記述は『日本書記』とはことなり、吉備津彦の吉備制圧（反乱か）は孝霊朝の事蹟としている。

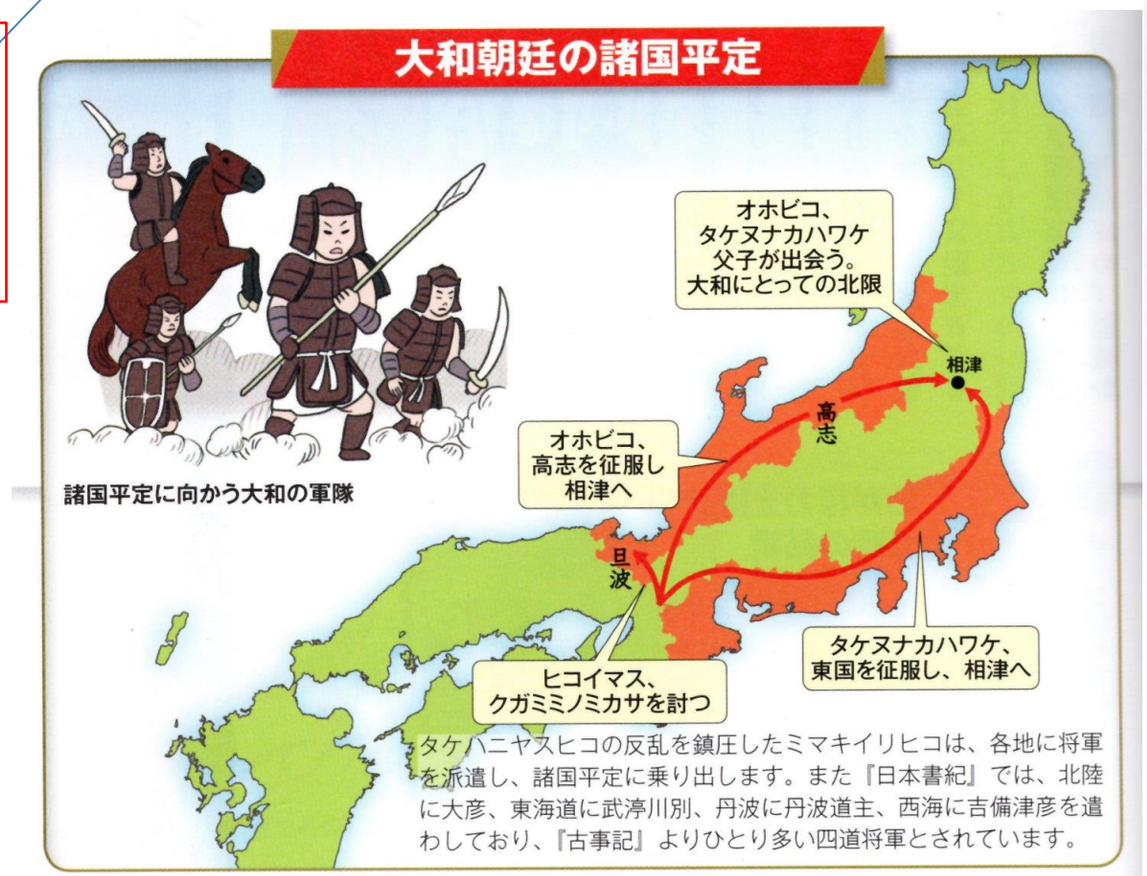
『古事記』によると孝霊朝に吉備津彦が西道に派遣されたという。吉備津彦は吉備を制圧した後、さらに西行し、任那・伊都国連合を邪馬台国の支配下に置いたと考える。この西行に伴って庄内式土器や方形周溝墓が筑紫に伝搬したと思われる。（藤田）

武埴安彦と吾田媛の反乱；アタヒメ、山代の女主勢力の王

神武天皇は九州から遠征し大和の葛城に王朝を開き、崇神天皇は神武の開いた王朝を倒して三輪山の麓に新しい王朝を建てました。その時破れた葛城王朝の中核となった人々は河内（大阪）や山城（京都府南部）に逃れ、再起を窺っていました。葛城勢力の巻き返しを恐れた崇神天皇は、即位の10年後、葛城勢の鎮圧にのり出します。孝元天皇の皇子で、山城、河内を根拠地とする武埴安彦（タケルハニヤスヒコ）王と妻の吾田媛（アタヒメ）が謀反を起こそうとしているとして、配下の武将に討伐を命じます。まず吉備津彦が武埴安彦の妻の吾田媛の軍を河内で破りました。一方、大彦命と和邇の祖、彦国葺（ヒコクニブク）の軍は木津川を隔てて、武埴安彦に戦いを挑みました。戦いは現在の京都府相楽郡の木津町、山城町、精華町から京田辺市を経て大阪府枚方市樟葉まで及びました。結果として武埴安彦の軍は彦国葺の軍に破れ、三輪山麓を根拠地とする崇神天皇の政権は安定した基盤を築くことになります。（崇神が統一国家への歩みを進めた第一歩が山代の併呑!!）

出雲神宝事件

大和は矢田部造の武諸隅（たけもろずみ）（矢田部は物部氏）を出雲に遣わして、出雲神宝「（熊野大社に安置していた熊野大神の神宝、勾玉、八尺瓊勾玉か）、十握剣（下掲）など」の奉献を求める。この時、神宝を管理していた出雲振根（いずもふるね）は筑紫に出掛けて留守だったので、弟の飯入根（いいいりね）が神宝を奉献する。筑紫から帰ってこれを知った出雲振根は怒って飯入根を殺す。飯入根の弟や子らが、このことを大和に訴えたので、大和は吉備津彦と武渟河別（たけぬなかわわけ）を派遣して出雲振根を誅殺する。



タケハニヤスヒコの反乱を鎮圧したミマキイリヒコは、各地に将軍を派遣し、諸国平定に乗り出します。また『日本書紀』では、北陸に大彦、東海道に武渟川別、丹波に丹波道主、西海に吉備津彦を遣わしており、『古事記』よりひとり多い四道将軍とされています。

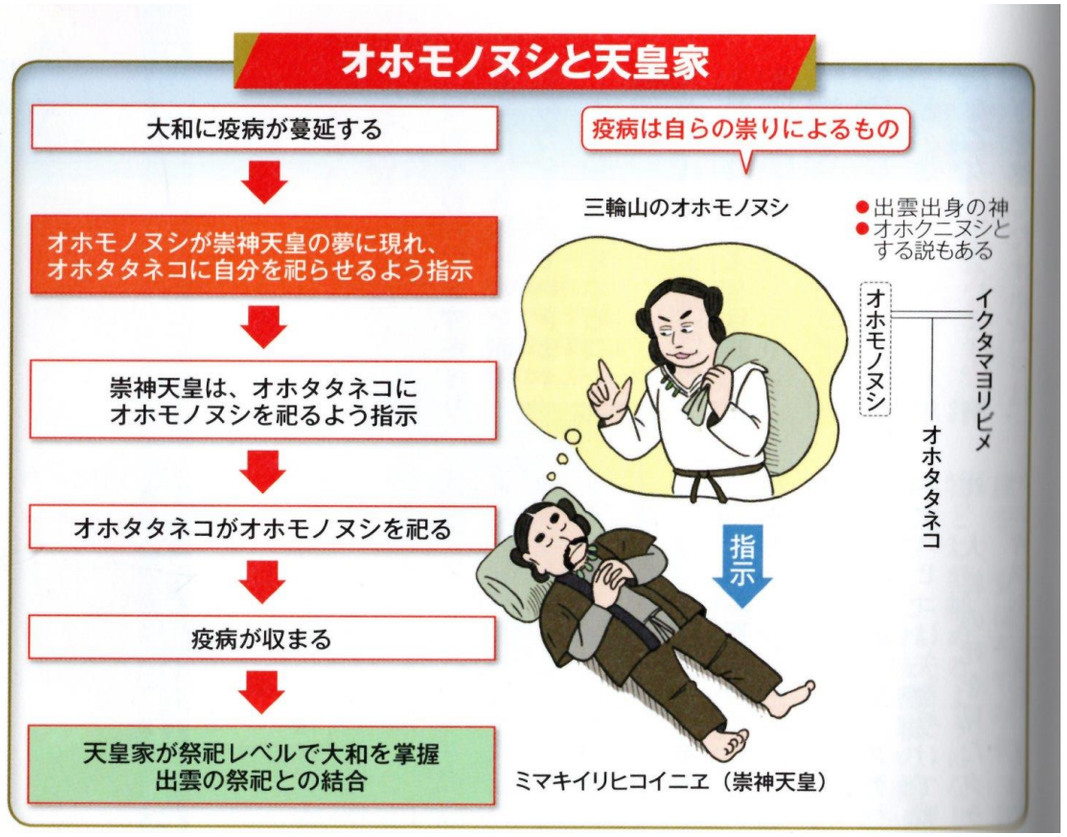
タケハニヤスヒコとオホビコが矛を交えた辺りには、戦の経過にまつわる地名が数多く残っています。

古墳時代前期

鎮花祭

大物主神（ニギハヤヒ）と倭大国魂（大国主）の二神の祀り

崇神記によれば崇神5・6年に疫病が流行り、死亡するものが多く、百姓は流離・反逆し、世情が不安定となった。天皇は御殿に祀っていた天照大神と倭大国魂の二神を、豊鍬入姫命（とよすきいりびめ；崇神の娘）と淳名城入姫（ぬなきいりびめ；崇神の娘）を御杖代として別々に祀ったがうまくいかなかった。神浅茅原で倭迹迹日百襲姫命が神懸かり、大物主神を祀るようにとのお告げを得、さらに、天皇と臣下が「大田田根子命を大物主神を祀る祭主とし、市磯長尾市（いちしのながおち）を倭大国魂神を祀る祭主とすれば、天下は平らぐ」という同じ夢を見たという。天皇は広く探させ、茅渟県の陶邑に大田田根子を見つけた。天皇が素生を聞かれると、大田田根子は「父を大物主大神、母を活玉依姫といいます。陶津耳の女です。」と答えている。また別に「奇日方天日方武茅渟祇の女」とも言われているとある。大田田根子を祭主として大物主神を祀り、長尾市を祭主として倭大国魂神を祀ることで、疫病ははじめて収まり、国内は鎮まった。そして、大田田根子は三輪君らの先祖であるとしている。



大田田根子と大物主一族

大田田根子（オオオタタネコ）は、大物主の子とか4世孫とか言われている。大物主はニギハヤヒで孝霊天皇とも考えられる。ちなみに、大田田根子の和名はオオタタネコ、孝霊天皇の和名はオオヤマトネコフトニで、孝元天皇はオオヤマトネコヒコクルクニで、開化天皇はワカヤマトネコヒコオオヒヒで、ネコを共通にもつ。このことは孝霊天皇はニギハヤヒであるとの傍証とならないか。和邇氏の難波根子武振熊命は大田田根子とともに皇族以外でネコがつく数少ない例である。
（藤田）

鎮花祭（はなしずめまつり）

崇神天皇の御代、大国魂神の祟りによって惹きおこされた疫病流行を、二度とおこさぬようにするため、人々が考え出したのが鎮花祭である。これは大宝令にも定められているから、国家的行事である。『令義解』の「鎮花祭」の条に「大神と狭井の二神の祭りである。春の花の飛散する時、疫神も分散して散り疫神も分散して散り疫病を起こす。その鎮滅のために、必ずこの祭りを行う。故に鎮花という」とある。疫神の鎮滅と、花の飛散をつなぎ合わせて鎮花とした祭りで、毎年3月の吉日か、晦日に行うと定めている。祭神の2神とは、大国主の和魂と大神神社の境内の北側にある狭井坐大神荒魂神社で祭っている大国主神の荒魂の大国魂神である。特にこの荒魂を鎮める祭りなのである。神饌には百合根や忍冬の薬草が献上されて疫神治療の目的から「くすりまつり」ともいわれている。
（天皇家の祖先・息長水依比売を追って、松本昭）

大田田根子の系図『古事記』

陶津耳命（スエツミミノミコト）
｜
大物主神－－－活玉依媛（イクタマヨリヒメ）
｜
櫛御方命（クシミカタノミコト）
｜
飯肩巣見命（イイカタスミノミコト）
｜
武甕槌（タケミカヅチ）
｜
大田田根子

大田田根子は大物主の4世孫で、大物主を孝霊天皇（ニギハヤヒ）と見ると武甕槌は崇神天皇のころとなり、崇神と神武を同一人物とする見解と年代的に合致する。（藤田）

垂仁

五大夫が垂仁朝を支える。日子坐王の王子の狭穂彦王の叛乱を鎮め、崇神王朝を盤石なものにする。

五大夫（垂仁朝）

彦国葺命（和邇氏の祖、和邇氏系図参照）、武淳川別(阿倍氏の祖)、大鹿嶋(中臣氏の祖)、十千根(物部氏の祖)、武日(大伴氏の祖)

出雲神宝事件（2）

出雲の神宝については、垂仁二十六年条にも、物部十千根（もののべのとうちね、垂仁朝の5大夫の一人）に、神宝を調査させる話が出てくる。

狭穂彦王の叛乱

『古事記』の伝承。狭穂毘売は垂仁天皇の皇后となっていた。ところがある日、兄の狭穂毘古（彦）に「お前は夫と私どちらが愛おしいか」と尋ねられて「兄のほうが愛おしい」と答えたところ、短刀を渡され天皇を暗殺するように言われる。妻を心から愛している天皇は何の疑問も抱かず姫の膝枕で眠りにつき、姫は三度短刀を振りかざすが夫不憫さに耐えられず涙をこぼしてしまう。目が覚めた天皇から、夢の中で「錦色の小蛇が私の首に巻きつき、佐保の方角から雨雲が起こり私の頬に雨がかかった。」これはどういう意味だろうと言われ、狭穂毘売は暗殺未遂の顛末を述べた後兄の元へ逃れてしまった。

反逆者は討伐せねばならないが、天皇は姫を深く愛しており、姫の腹には天皇の子がすくすくと育っていた。姫も息子を道連れにするのが忍びなく天皇に息子を引き取るように頼んだ。天皇は敏捷な兵士を差し向けて息子を渡しに来た姫を奪還させようとするが、姫の決意は固かった。髪は剃りあげて鬘にし腕輪の糸は切り目を入れてあり衣装も酒で腐らせて兵士が触れるそばから破けてしまったため姫の奪還は叶わない。天皇が「この子の名はどうしたらよいか」と尋ねると、姫は「火の中で産んだのですから、名は本牟智和気御子とつけたらよいでしょう」と申し上げた。また天皇が「お前が結んだ下紐は、誰が解いてくれるのか」と尋ねると、姫は「旦波比古多多須美知能宇斯王に兄比売と弟比売という姉妹がいます。彼女らは忠誠な民です。故に二人をお召しになるのがよいでしょう」と申し上げた。そうして炎に包まれた稲城の中で、狭穂毘売は兄に殉じてしまった。

大伴氏の始祖とされる武日（たけひ）命は、垂仁朝の五大夫の一人である。武日命は次の景行朝ではその40年（現在の年数に換算すると景行即位後10年）に倭建命の東征に従軍し、その帰路に甲斐国酒折宮で「靫（大伴）部（ゆげいのとも）」を賜ったと『日本書記』にある。倭建命は伊勢で薨じたが、武日命は無事に大和に帰還したと思われる。
武日命の弟に乎多底命も倭建命の東征に従いて、遠征先の陸奥国に留まって蝦夷に引き続きあたり、靫大伴部などの祖とされる。武日命の子孫に陸奥方面に大伴氏の一族と称するものが多い。
（古代氏族の研究④　大伴氏　宝賀寿男）

誉津別命（本牟智和気（ほむつわけ）のみこと）－言葉を発するまで

『古事記』では、垂仁天皇の誉津別皇子についてより詳しい伝承が述べられている。天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師池、軽池に浮かべて、皇子とともに戯れた。あるとき皇子は天を往く鵠を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠は紀伊、播磨、因幡、丹波、但馬、近江、美濃、尾張、信濃、越を飛んだ末に捕らえられた。しかし皇子は鵠を得てもまだ物言わなかった。ある晩、天皇の夢に何者かが現れて「我が宮を天皇の宮のごとく造り直したなら、皇子はしゃべれるようになるだろう」と述べた。そこで天皇は太占で夢に現れたのが何者であるか占わせると、言語（物言わぬ）は出雲大神の祟りとわかった。天皇は皇子を曙立王、菟上王とともに出雲(現：島根県東部)に遣わし、大神を拝させると皇子はしゃべれるようになったという。その帰り、皇子は肥長比売と婚姻したが、垣間見ると肥長比売が蛇体であったため、畏れて逃げた。すると肥長比売は海原を照らしながら追いかけてきたので、皇子はますます畏れて、船を山に引き上げて大和に逃げ帰った。天皇は皇子が話せるようになったことを知って喜び、菟上王を出雲に返して大神の宮を造らせた。

藤田

出雲大社は、垂仁天皇の時が第1回目、斉明天皇の時が第2回目の造営とされている。スサノオによって殺された八岐大蛇（大穴持、大国主の別称）を鎮魂するために造営された。

出雲大社（明治まで杵築大社）

正式名称は「いづもおおやしろ」であるが、一般には主に「いづもたいしゃ」と読まれる。祭神は大国主大神である。二拝四拍手一拝の作法で拝礼する。明治維新に伴う近代社格制度下において唯一「大社」を名乗る神社であった。創建以来、天照大神の子の天穂日命を祖とする出雲国造家が祭祀を担ってきた。

出雲大社の創建については、日本神話などにその伝承が語られている。以下はその主なものである。

大国主神は国譲りに応じる条件として「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておりましょう」と述べ、これに従って出雲の「多芸志（たぎし）の浜」に「天之御舎（あめのみあらか）」を造った。（『古事記』）

高皇産霊尊は国譲りに応じた大己貴神に、「汝の住処となる「天日隅宮（あめのひすみのみや）」を、千尋もある縄を使い、柱を高く太く、板を厚く広くして造り、天穂日命に祀らせよう」と述べた。（『日本書紀』）

所造天下大神（＝大国主神）の宮を奉る為、皇神らが集って宮を築いた。（『出雲国風土記』出雲郡杵築郷）

神魂命が「天日栖宮（あめのひすみのみや）」を高天原の宮の尺度をもって、所造天下大神の宮として造れ」と述べた。（『出雲国風土記』楯縫郡）

崇神天皇60年7月、天皇が「武日照命『日本書紀』（建比良鳥命『古事記』）（天穂日命の子）が天から持って来た神宝が出雲大社に納められているから、それを見たい」と言って献上を命じ、武諸隅（タケモロスミ）を遣わしたところ、飯入根（いいいりね）が、当時の当主で兄の出雲振根に無断で出雲の神宝を献上。出雲振根は飯入根を謀殺するが、朝廷に誅殺されている。（『日本書紀』）

垂仁天皇の皇子本牟智和気（ほむちわけ）は生まれながらに唖であったが、占いによってそれは出雲の大神の祟りであることが分かり、曙立王と菟上王を連れて出雲に遣わして大神を拝ませると、本牟智和気はしゃべれるようになった。奏上をうけた天皇は大変喜び、菟上王を再び出雲に遣わして、「神宮」を造らせた。

（『古事記』）

659年（斉明天皇5年）、出雲国造に命じて「神之宮」を修造させた。（『日本書紀』）

伝承の内容や大社の呼び名は様々であるが、共通して言えることは、天津神（または天皇）の命によって、国津神である大国主神の宮が建てられたということであり、その創建が単なる在地の信仰によるものではなく、古代における国家的な事業として行われたものであることがうかがえる。

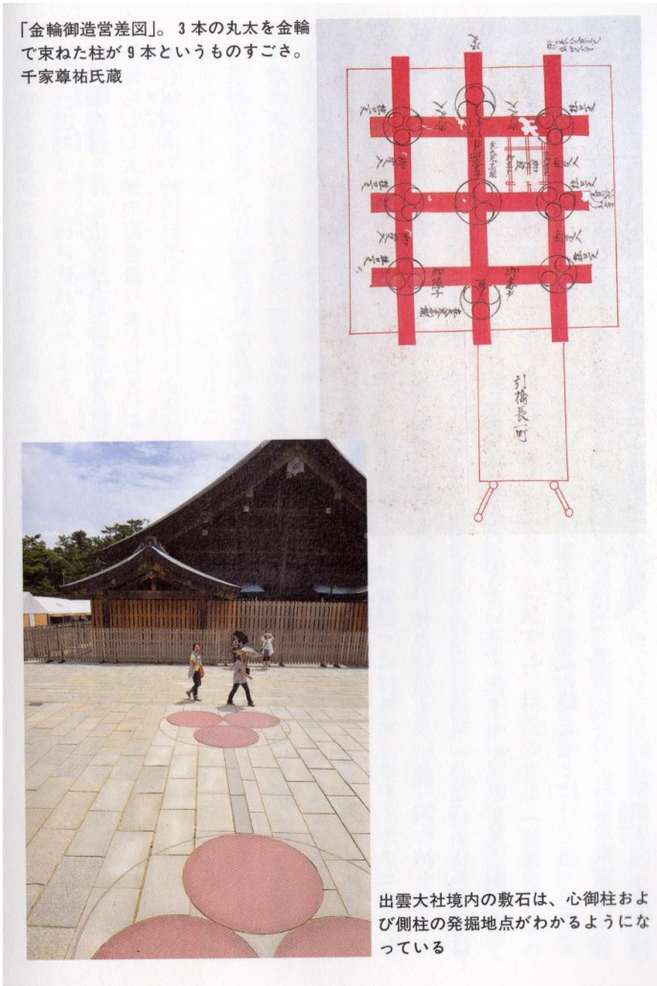
尚」、出雲大社の社伝においては、垂仁天皇の時が第1回、斉明天皇の時が第2回の造営とされている。

（出雲大社－Wikipedia抜粋）

出雲大社はスサノオによって殺された八岐大蛇（大穴持、大国主の別称）を鎮魂するために造営されたと考える。藤田

境内（千木のある建物が本殿）（光一郎撮影）

古代の御本殿の模型（Wikipedia）



葬られた王朝（新潮社、梅原 猛）

藤田

元出雲 （出雲大神宮の別称）

出雲大社（明治まで杵築大社）の祭神の大国主は 出雲大神宮から分霊された

出雲大神宮（別称元伊勢）

主祭神大国主命（おおくにぬしのみこと） 出雲大神宮では、別名を「三穂津彦大神」や「御蔭大神」とする。三穂津姫命（みほつひめのみこと）は 高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の后となったと伝える。

亀岡盆地東部に立つ御蔭山（みかげやま、御陰山、御影山、千年山とも）の山麓に鎮座。古くは御蔭山を神体山として祀る信仰があったとされ、社殿は和銅2年（709年）に創建されたと伝える。御蔭山から湧き出た水は幸運を呼ぶ御神水（真名井の水）とされている。

「元出雲」の別称は、出雲大社が出雲大神宮からの分霊とする社伝（後述）に由来する。いわゆる出雲大社は明治時代に至るまで「杵築大社」を称していたため、江戸時代末までは「出雲の神」と言えば出雲大神宮を指していたとされる。

（Wikipedia抜粋）

丹波の出雲人

丹波地域の式内社の中にも出雲系の神々をまつる社の多いことが注目される。出雲大神宮は丹波の一宮として崇敬を集めている。出雲大神宮の社殿によれば、三輪との関係が深いことがわかるが、丹波に四道将軍派遣された日子坐王や丹波道主自体が系譜上においては大和の三輪の北側に勢力をもった和邇氏の娘が開化天皇との間にもうけた子であり孫であったと位置づけられている。

（私の日本古代史（上）上田正昭）

出雲はスサノオの侵攻にあい、大国主（あるいはアジスキタカヒコネ）は東に逃れ、丹波および近江に遷り住んだ。その一部は伊賀や葛城にはいった。崇神東征により、大和と葛城の出雲勢力が敗退し北に向かうが、山城に至ったのが出雲族と考えられる賀茂氏で、その氏神が賀茂神社でありアジスキタカヒコネを祭神とする。賀茂氏は後背地に出雲勢力の強い丹波をひかえていたため山城に踏みとどまったと考える。

（藤田）

拝　殿　（Wikipedia）

御陰山（Wikipedia）

藤田

熊野大社　祭神の櫛御気野命は素戔嗚命とされているが、実際は大国主か（出雲国一宮、出雲では出雲大社より格上）

熊野大社（松江市八雲町熊野）（出雲大社と共に出雲国一宮、火の発祥の神社として「日本火出初之社」（ひのもとひでぞめのやしろ）とも呼ばれ、意宇六社の一つ。紀伊国の熊野三山も有名だが、社伝によると熊野村の住人が紀伊国に移住したときに分霊を勧請したのが熊野本宮大社の元であるとしている。

祭神[は伊邪那伎日真名子 加夫呂伎熊野大神 櫛御気野命で素戔嗚尊の別名であるとする。「伊邪那伎日真名子（いざなぎのひまなご）」は「イザナギが可愛がる御子」の意、「加夫呂伎（かぶろぎ）」は「神聖な祖神」の意としている。「熊野大神（くまののおおかみ）」は鎮座地名・社名に大神をつけたものであり、実際の神名は「櫛御気野命（くしみけぬのみこと）」ということになる。「クシ」は「奇」、「ミケ」は「御食」の意で、食物神と解する説が通説である。これは『出雲国造神賀詞』に出てくる神名を採用したものであり、『出雲国風土記』には「伊佐奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命（いざなひのまなご くまのにます かむろのみこと）」とある。現代では櫛御気野命と素戔嗚尊とは本来は無関係であったとみる説も出ているが、『先代旧事本紀』「神代本紀」にも「出雲国熊野に坐す建速素盞嗚尊」とあり、少なくとも現存する伝承が成立した時にはすでに櫛御気野命が素戔嗚尊とは同一神と考えられていたことがわかる。
（Wikipedia抜粋）

熊野大社本殿

出雲神宝事件とは日本書紀崇神六十年条に記されている。吉備津彦命と武淳川別が出雲振根を誅殺し、出雲神宝「（熊野大社に安置していた熊野大神の神宝、勾玉、八尺瓊勾玉か）、十握剣（下掲）など」を奪う事件である。出雲神宝は熊野大社に安置されていたのであるから、出雲では後世に造成された出雲大社より神格が上と考えられていた。

このことわかるように、大国主の治めていた古代出雲の征服者である天孫族のスサノオが熊野大社の祭神であるとは思えず、櫛御気野命とは大国主ではないかと思う。また、熊野は鉄鍛冶に通じるとの説があり、大国主もまた製鉄に関係していたとの説もある。また、大国主がスサノオとの抗争に敗れ、紀伊に逃れたとの神話があるように、出雲の熊野大社と紀伊の熊野三山との結びつきを暗示するのではないか？
（藤田）

出雲国造

天穂日命を祖とする出雲国造（いずものくにのみやつこ）は、出雲国（現在の島根県東部地方）を上古に支配した国造。その氏族の出雲氏の長が代々熊野大社と出雲大社の祭祀と出雲国造の称号を受け継いだ。律令制度以前の国造の多くは直（あたい）の姓（かばね）を与えられていたが、出雲氏は吉備氏とともに、直より格の高い臣（おみ）の姓をもっていた。他に臣の姓が与えられたのは、葛城氏、蘇我氏、阿部氏などの中央の有力豪族だけである。そして、出雲氏は新たな国造がたつたびに官邸におもむき、自家が大和朝廷に従ったいきさつを伝える「出雲国神賀詞（いずものくにのみやつこかんよごと）を奏上していた。

熊野は湯屋である

金屋がたたら炉の覆い屋根とするとたたら炉の中にあるのは溶けた鉄である。それを湯という。したがって金屋は湯屋（ゆや）となる。ゆやは熊野とも書かれる。熊野大社が火の発祥の神社として考えられているが、熊野神社と名のつく神社に火祭りが多い。熊野が湯屋であればその理由がわかる。

出雲とはいかなる地か。古代以来つい最近（近世）まで、我が国最大の鉄の生産地であった。日本の神々は殆ど例外なく、鉄の生産地出雲を故郷としていたのである。その神々が鉄の生産と流通に関わっていたと考えて何の不思議があろうか。
（邪馬台国と「鉄の道」、小路田泰直）

日本の神々の総元締めが大国主の命である。したがって、出雲一宮の熊野大社の祭神、櫛御気野命（くしみけぬのみこと）はもともと大国主の命で、古代出雲がスサノオに征服され、熊野大社の祭神が入れ替わったのではないか。ちなみに、たたら炉のふいごを吹くことからきているの伊福（いふく）部氏の始祖は大国主である。
（藤田）

古墳時代前期

伊勢神宮

伊勢神宮 —Wikipedia抜粋

出雲大社と同じく垂仁朝に創設

古来「神宮」と呼ばれるのは、伊勢(イセ)神宮と石上(イソノカミ)神宮のみである。さらに、伊勢神宮の古名は「磯宮（イソノミヤ）」であり、イセとイソの繋がりを強く示唆する。

伊勢神宮には、太陽を神格化した天照坐皇大御神（天照大御神）を祀る皇大神宮と、衣食住の守り神である豊受大御神を祀る豊受大神宮の二つの正宮があり、一般に皇大神宮は内宮（ないくう）、豊受大神宮は外宮（げくう）と呼ばれる。内宮と外宮は離れているため、観光で内宮のみ参拝の人が多いが、まず外宮を参拝してから内宮に参拝するのが正しいとされている。

広義には、別宮（べつぐう）、摂社（せっしゃ）、末社（まっしゃ）、所管社（しょかんしゃ）を含めた、合計125の社宮を「神宮」と総称する。この場合、所在地は三重県内の4市2郡に分布する。

伊勢神宮は皇室の氏神である天照坐皇大御神を祀るため、皇室・朝廷の権威との結びつきが強い。

主祭神

・皇大神宮：内宮（ないくう） 天照坐皇大御神 （あまてらしますすめおおみかみ） - 一般には天照大御神として知られる
・豊受大神宮：外宮（げくう） 豊受大御神 （とようけのおおみかみ）

創祀神話

・天孫・邇邇芸命が降臨した際、天照大御神は三種の神器を授け、その一つ八咫鏡に「吾が児、此の宝鏡を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。（『日本書紀』）」として天照大御神自身の神霊を込めたとされる。この鏡は神武天皇に伝えられ、以後、代々の天皇の側に置かれ、天皇自らが観察していた。八咫鏡は第10代崇神天皇の治世に大和笠縫邑に移され、皇女豊鍬入姫がこれを祀ることとされた。
・崇神天皇5年、疫病が流行り、多くの人民が死に絶えた。
・崇神天皇6年、疫病を鎮めるべく、従来宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂神（大和大国魂神、大国主との説あり）を皇居の外に移した。
・崇神天皇7年2月、大物主神、倭迹迹日百襲姫命に乗り移り託宣する。11月、大田田根子（大物主神の子とも子孫ともいう）を大物主神を祭る神主とし（これは現在の大神神社に相当し、三輪山を御神体としている）、市磯長尾市（いちしのながおち）を倭大国魂神を祭る神主としたところ、疫病は終息し、五穀豊穣となる。
・天照大神を豊鍬入姫命に託し、笠縫邑（現在の檜原神社）に祀らせ、その後各地を移動した。
・垂仁天皇25年3月、天照大神の祭祀を皇女の倭姫命に託す（元伊勢伝承）。
・垂仁天皇25年に現在の伊勢神宮内宮に御鎮座した。（詳細記事：元伊勢） 倭大国魂神を渟名城入媛命に託し、長岡岬に祀らせたが（現在の大和神社の初め）、媛は身体が痩せ細って祀ることが出来なかった。
・『日本書紀』垂仁天皇25年3月の条に、「倭姫命、菟田（うだ）の篠幡（ささはた）に祀り、更に還りて近江国に入りて、東の美濃を廻りて、伊勢国に至る。」とあり、皇女倭姫命が天照大御神の神魂（すなわち八咫鏡）を鎮座させる地を求め旅をしたと記されているのが、内宮起源説話である。この話は崇神天皇6年の条から続き、『古事記』には崇神天皇記と垂仁天皇記の分注に伊勢大神の宮を祀ったとのみ記されている。移動中に一時的に鎮座された場所は元伊勢と呼ばれている。
・なお、外宮は平安初期の『止由気神宮儀式帳』（とゆけじんぐうぎしきちょう）によれば、雄略天皇22年7月に丹波国（後に丹後国として分割）の比沼真奈井原（まないはら）から、伊勢山田原へ遷座したことが起源と伝える。
（Wikipedia抜粋）

『古事記』の豊宇気毘売神（とようけひめのかみ）ー豊受大御神
（『日本書紀』には登場しない神様、羽衣伝説の天女）

伊弉冉尊（いざなみ）の尿から生まれた稚産霊（わくむすび）の子とされている。神名の「ウケ」は食物のことで、食物・穀物を司る神である。ゆえに五穀豊穣の神とも言われる。

伊勢神宮外宮の社伝によると、雄略天皇の夢枕に天照大神（=伊勢内宮の神）が現れ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の比沼真奈井（ひぬまのまない）にいる御饌の神、等由気大神（とようけのおおかみ）を近くに呼び寄せなさい」と言われたので、丹波国から伊勢国の度会に遷宮させたとされている。即ち、元々は丹波国の神とされている。実際に丹波地方には、豊受大神を祀る下記神社がある。これらは伊勢神宮内宮・外宮の神様が、現在地へ遷る以前に一時的に祀られたという伝承を持つ神社・場所ということで、総称して「元伊勢」とも言う。
—外宮の神・豊受大神だけのものを記載—

比治真奈井の伝承の神社
・比沼麻奈為神社　京都府京丹後市
・奈具神社　京都府京丹後市
・籠神社摂社　真名井神社
※籠神社（京都府宮津市）は丹波ではなく、丹後の一宮であるが、ここも豊受大神を祀っている。「元伊勢」の一つ。
・豊受大神社　京都府福知山市
その他
・小津神社（豊受大神(別名と考えられるウカノミタマを祀る）　滋賀県守山市の伊勢遺跡の近傍
（伊勢神宮の外宮に祭られている豊受大神とは、どんな神様ですか？）
(YAHOO知恵袋、Net)

倭姫命：天照大神を祀る最初の皇女、後の斎宮

倭姫命（やまとひめのみこと、生没年不詳）は、記紀等に伝わる古代日本の皇族。『日本書紀』では「倭姫命」、『古事記』では「倭比売命」と表記される。
　第11代垂仁天皇の第四皇女で、母は皇后の日葉酢媛命。垂仁天皇25年3月丙申に天照大神を伊勢の地に祀ったとされ（現在の伊勢神宮）、斎宮の伝説上の起源とされる人物である。
経歴：第10代崇神天皇の皇女豊鍬入姫命の跡を継ぎ、天照大神の御杖代として大和国から伊賀・近江・美濃・尾張の諸国を経て伊勢の国に入り、神託により皇大神宮（伊勢神宮内宮）を創建したとされる（御杖代は依代として神に仕える者の意味であるが、ここでは文字通り「杖の代わり」として遷幸を助ける意味も含まれる。ちなみに、豊鍬入姫命と倭姫命が伊勢神宮を創建するまでに天照大神の神体である八咫鏡を順次奉斎した場所は「元伊勢」と呼ばれる）。　後に、東夷の討伐に向かう日本武尊（尊は倭姫命の甥王にあたる）に草薙剣を与えている。伊勢では、伊勢の地に薨じ、尾上御陵（おべごりょう）に埋葬されたと伝える。伊勢の地で天照大神を祀る最初の皇女と位置づけられ、これが制度化されて後の斎宮となった。
　元伊勢と呼ばれる神社は、真名井神社（籠神社摂社）を始め、元伊勢伝承は『皇太神宮儀式帳』・『止由氣元伊勢は、丹後の宮儀式帳』や、『古語拾遺』、『延喜式』などの所伝から派生しているが、詳細な伝承地については不明な点が多く、以前は二十数箇所とされていたものが現在では六十箇所を超える。これらは各地の神社に伝わる伝承が元となっており、中には近隣で伝承地を唱えるものもあるなど、伝承地の真偽のほどについては不明である。
（Wikipedia抜粋　＋　藤田）

倭姫命を祀る倭姫宮（三重県伊勢市）

御巡幸

天照大御神と豊鍬入姫命の御巡幸
　天照大御神はすぐに、三輪山麓の笠縫邑（かさぬいのむら）に「磯堅城（しかたき）の神籬（ひもろぎ）」を築き、神域にしました。
笠縫邑の大神神社の摂社・檜原神社を33年鎮座地とした後、さらなる安息地を求め旅立ちます。
福井の吉佐宮（よさぐう）に4年、戻って笠縫邑の伊豆加志本宮（いつかしもとのみや）に8年、和歌山の奈久佐浜宮（なぐさのはまのみや）に3年、岡山の名方浜宮（なかたのはまのみや）に4年、三輪山麓に戻って弥和乃御室嶺上宮（みわのみむろのみねのうえのみや）に2年と御巡幸を行いました。

倭姫命に託された御巡幸
　三輪山の麓にある大神神社の御室嶺上宮に鎮座していた天照大御神は、それでも御巡幸を求めます。
その頃は第11代垂仁天皇の時代になっており、そのお役目が皇女である倭姫命に引き継がれます。
天照大御神と倭姫命の、長い長い御巡幸が始まります。
1.大和国　宇多秋宮（うたのあきのみや）　阿紀神社　4年　奈良県宇陀市
2.大和国　佐左波多宮（ささはたのみや）　篠畑神社　4年　奈良県宇陀市
3.伊賀国　市守宮（いちもりのみや）　宇流富志禰神社　2年　三重県名張市
4伊賀国　.穴穂宮（あなほのみや）　神戸神社　4年　三重県伊賀市
5.伊賀国　敢都美恵神宮（あえとあえのみや）　都美恵神社　2年　三重県伊賀市
6.近江国　甲可日雲宮（こうかひぐものみや）　垂水頓神社　2年　滋賀県甲賀市
（つづく）

（つづき）
7.近江国　坂田宮（さかたのみや）　坂田神明神　2年　滋賀県米原市
8.美濃国　伊久良河宮（いくらがわのみや）　天神神社　2年　岐阜県瑞穂市
9.尾張国　中島宮（なかじまのみや）　酒見神社　愛知県一宮市
10.伊勢国　桑名野代宮（くわなののしろのみや）　野志里神社　4年　三重県桑名市
11.伊勢国　奈其波志忍山宮（なごわしのおしのやまのみや）　布気皇館太神社　三重県亀山市
12.伊勢国　阿佐加藤方片樋宮（あさかふじかたのかたひのみや）　加良比乃神社　4年　三重県津市
13.伊勢国　飯野高宮（いいのたかのみや）　神山神社　4年　三重県松阪市
14.伊勢国　佐佐牟江宮（ささむえのみや）　竹佐々夫江神社　三重県多気郡
15.伊勢国　伊蘓宮（いそのみや）　磯神社　三重県伊勢市
16.伊勢国　瀧原宮（たきのはらみや）　三重県度会郡
17.伊勢国　矢田宮（やたのみや）　三重県伊勢市
18.伊勢国　家田田上宮（やたのたのうえのみや）　神宮神田　三重県伊勢市
19.伊勢国　奈尾之根宮（なおしねのみや）　那自売神社（内宮末社）　三重県伊勢市
20..伊勢国　五十鈴宮（いすずのみや）　皇大神宮　三重県伊勢市

豊鍬入姫命が御杖代として御巡幸された地と、上掲の地を元伊勢と呼び、皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）が、現在地に還る以前に一時的にせよ祀られたという伝承を持つ神社や場所とされています。
（【倭姫命】天照大御神の御巡幸を引き継ぎ、伊勢神宮の創建に貢献した偉大な皇女｜神社チャンネル、Net）

天照大御神と伊勢神宮

天照大御神（あまてらすおおみかみ）は、日本神話の主神。高天原を統べる主宰神で、皇祖神とされる。『記紀』においては、太陽神の性格と巫女の性格を併せ持つ存在。

天照大神とは、栲幡千千姫、櫛稲田姫、豊受大神、卑弥呼と台与を集合し、さらに持統天皇を反映させ、皇統の最高神として祀り上げられたか

天照大御神とは

京都府宮津市の籠神社の祭神であり、海部氏の祖神彦火明命のまたの名は、天照國照彦火明命、天照御魂命神というから、アマテルというのはもともと男性神格といえる。豊受大御神は籠神社奥宮天真奈井神社で主祭神とされている。この神社にある磐座の主座は豊受大神で、またの名を天御中主神、国常立尊であり、宇宙根源の大元霊神で、五穀農耕の祖神であり、また、水の徳が顕著で生命を守るとある。また、同じく磐座西座には、天照大神、伊邪那岐大神、伊邪那美大神とある。その後、天照大神は豊受大神に因んだ女性神格をもった皇祖神として崇められ、天照大神は伊勢神宮の内宮に、豊受大神は外宮に祭られた。このことと伊勢神宮の外宮先祭という外宮を内宮より重んじるという慣習と関連していると思われる。ちなみに伊邪那岐と伊邪那美（新羅伊西国の男と女を意味するという説がある）は天の橋立を伝って降臨し、のち近江（多賀）に遷ったとされる。多賀大社の祭神は伊邪那岐と伊邪那美である。

卑弥呼とその姪である台与は、彦火明命あるいは豊受大神の血筋および大国主の血筋を引いていると考える。というのは、卑弥呼と台与を習合させているアマテラスを伊勢に祭ったのは丹波道主の孫にあたる丹後に縁の深い倭姫命である。そして、籠神社は元伊勢と呼ばれる。また、卑弥呼が大和の纒向に行く前は、近江の伊勢遺跡にいたと考えられ、台与は近江の豊郷（トヨサト）近傍の稲部遺跡にいたと思われる節がある。

天照大神の弟神はスサノオであり、その妻は櫛稲田姫である。スサノオは新羅から北九州（ないし出雲）への侵攻に際し、ヤマタノオロチ（大国主か）を退治したことになっている。櫛稲田姫は櫛田宮（佐賀県神埼町の吉野ヶ里付近）の女神で、後に伊都国の櫛田神宮に遷ったと考えられ、櫛稲田姫がマナテラスではないかという説もある。またアマテラスの妹姫とされる稚日女命は和歌山県葛城町の丹生都比売神社の祭神の丹生都比売大神であるとの説もある。

ところで、伊勢から紀ノ川河口の間の中央構造線沿いには水銀鉱床群があり水銀朱を産する。大和と伊勢の水銀朱の大産地はそれぞれ伊勢神宮と日前国縣神宮（丹生都比売神社近辺）が中央構造線の東西の端に鎮座している。また、舞鶴市に丹生神社があり、往古よりこの地は水銀の産地として名高い。したがって、アマテラスに関連する豊受大神と稚日女命は水銀朱の産地と関係付けられる。

また、1世紀の伽耶の正見母主には悩窒朱日と悩窒朱日の二人の息子があり、悩窒青裔は金官国の初代首露王になり、悩窒朱日は大伽耶の王（脱解王）となった。首露王が瓊瓊杵で脱解王は天火明と見なされ、正見母主は、高木神の娘の栲幡千千姫（万幡豊秋津師比売命）であるとすると、正見母主（栲幡千千姫）がアマテラスとされたことも充分考えられる。

さらに、『古事記』や『日本書紀』の編纂が、天武天皇の命により行われ、さらに天武天皇の崩御後、即位した持統天皇は、天武天皇の政策を引き継ぎ、完成させたもので、当然、『記紀』の編纂にも持統天皇の意向が影響していると思われる。最高神、天照大神は、女帝の持統天皇の反映ともとることができる。

以上を鑑みると天照大神とは、栲幡千千姫、櫛稲田姫、豊受大神、卑弥呼と台与を集合し、さらに持統天皇を反映させ、皇統の最高神として祀り上げられたものと解する。
（藤田）

伊勢にまつわる話

1．伊勢神宮の伊勢は、イザナギ・イザナミの故国、伽耶の伊西国の伊西に因むものであるとの説がある。イザナギ・イザナミは、まず丹後に渡来したのち近江に入り多賀に落ち着いた。それ故、丹後の籠神社 は元伊勢と呼ばれ、多賀の南の古代遺跡が伊勢遺跡と呼ばれる。

2．海神族ともみなされる大国主は、スサノオの出雲侵攻に敗れ、東遷し丹後・若狭から近江に遷り、伊吹山を神奈備として湖北・湖東・湖南を核とする玉牆の内つ国を建てた。海神族の和邇氏は奴国の嫡流で、奴国が伊都国に圧倒された折、丹後に遷ったと考えられる。猿田彦もまた海神族であった。和邇氏は丹後より若狭さらに近江の湖西に遷り、そこを根拠地とした。猿田彦は湖西の白鬚神社の祭神であり、また伊勢神宮内宮の近くには猿田彦神社（さるたひこじんじゃ）がある。このことから、猿田彦もまた和邇氏および伊勢と関係が考えられる。

3．製鉄集団の和邇氏の勢力が及んだ近江の湖西は、伊勢国の南半から志摩国にかけての伊勢神宮周辺や、元伊勢の所在する丹波地域とともに弥生時代の祭祀遺物とされる銅鐸の非出土地域となっている。

4．大国主を血筋で、和邇氏の巫女と考えられる卑弥呼は近江の伊勢遺跡から大和の纒向遺跡に遷り、和邇氏はニギハヤヒと共に邪馬台国を立てたと思われる。

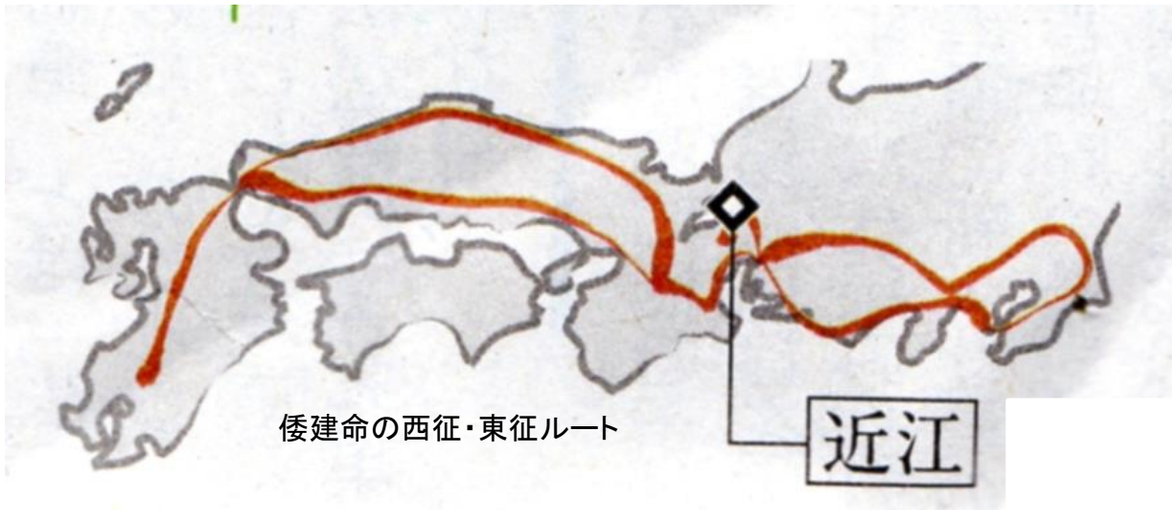
5．伊勢神宮の内宮は卑弥呼と見なされるアマテラスオオミカミを祀り、また外宮には丹後の比治の真奈井（ひじのまない）にいる御饌の神、豊受大神（等由気太神、とゆけおおかみ）を祀っている。

6．伊勢神宮外宮の主祭神の豊受大神は、元伊勢籠神社から遷ったと見なされている。豊受大伸の別名と考えられるウカノミタマを祀る小津神社が滋賀県守山市にあり、同市に弥生時代後期の伊勢遺跡があることとの関連性が注目される。
（藤田）

景行

日本（倭）尊
（やまとたけるのみこと）

第12代景行天皇の皇子で、第14代仲哀天皇の父にあたる。熊襲征討・東国征討を行ったとされる日本古代史上の伝説的英雄である。



倭建命の西征・東征ルート

建部大社　日本武尊は、東国征討ののち伊吹山の悪鬼（狗奴国の大国主か）によって敗死した。日本武尊の死後の景行天皇46年、日本武尊の妃・布多遅比売命が神勅によって、神崎郡建部郷千草嶽の地に日本武尊を「建部大神」として祀ったのが創建とされる。のち、天武朝に近江の守護神として、現在地の栗太郡勢多（瀬田）へ遷座したという。建部大社はもともとヤマト朝廷側の大国主系勢力に対する備えとして、建てられたのではないか。天平勝宝年間に、大己貴命が大神神社から勧請され、権殿に祀られたという。意味深である。
（藤田）

日本武尊を祭る建部大社（たけべたいしゃ）（Wikipedia抜粋）
近江国一宮

主祭神は次の通り。
本殿：日本武尊（やまとたけるのみこと）本殿相殿神：天照皇大神（あまてらすすめおおかみ）
相殿神は、天照皇大神でなく天明玉命（あめのあかるたまのみこと）とする場合も見られる。
権殿：大己貴命（おおなむちのみこと）大神神社（大和国一宮）からの勧請。
社伝では、日本武尊の死後の景行天皇46年、日本武尊の妃・布多遅比売命が神勅によって、御子・建部稲依別命とともに住んでいた神崎郡建部郷千草嶽（現在の東近江市五個荘伊野部町付近の箕作山）の地に日本武尊を「建部大神」として祀ったのが創建とされる。建部郷の「建部」の名は日本武尊をしのんで名代として名付けられたことに因むといい、他にも各地に設けられている。のち、天武天皇4年（675年）に近江の守護神として、現在地の栗太郡勢多（瀬田）へ遷座したという。遷座後、元の千草嶽の麓には神護景雲2年（768年）に聖真大明神と建部大明神が設けられたとされ、現在は建部神社が建てられている。
天平勝宝7年（755年）には、大己貴命が大神神社から勧請され、権殿に祀られたという。

古墳時代前期

草薙剣を祀る熱田神宮

草薙剣

三種の神器の草薙剣は天皇の持つ武力の象徴である。ヤマト王権の大将軍の日本武尊は妻の宮簀媛の元に草薙剣を預けたまま伊吹山の悪神（大国主の流れを汲む狗奴国の末裔か）によって殺された。最期に「剣の太刀、ああその太刀よ」と草薙剣を呼んで亡くなった。

草薙剣を祀る熱田神宮（あつたじんぐう）

愛知県名古屋市熱田区にある神社。式内社（名神大社）、尾張国三宮。

名古屋市南部、熱田台地の南端に鎮座する。古くは伊勢湾に突出した岬上に位置していたが、周辺の干拓が進んだ現在はその面影は見られない。

三種の神器の1つ、草薙剣（くさなぎのつるぎ）を祀る神社として知られる。ただし、剣は壇ノ浦の戦いで遺失したとも熱田神宮に保管されたままともいわれている。また、景行天皇43年創建と伝えられており、同年は西暦に換算した場合に113年とされることから、2013年（平成25年）に創祀1900年を迎えるとされ、同年5月8日に「創祀千九百年大祭」が行われた。

建物は伊勢神宮と同じ神明造であるが、1893年（明治26年）までは尾張造と呼ばれる独特の建築様式だった（境外摂社の氷上姉子神社に尾張造の建築様式が残っている）。

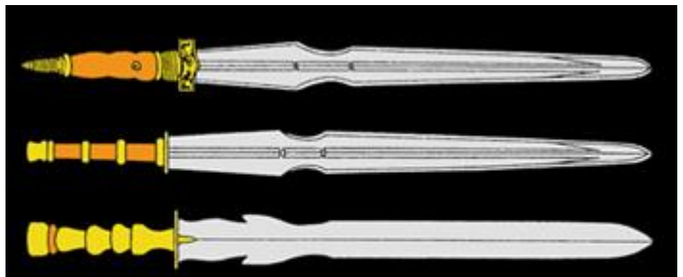
主祭神熱田大神（あつたのおおかみ）。熱田大神とは草薙剣の神霊のこととされるが、明治以降の熱田神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を御霊代・御神体としてよらせられる天照大神のことであるとしている。しかし、創建の経緯などからすると日本武尊と非常にかかわりの深い神社であり、熱田大神は日本武尊のことであるとする説も根強い。

相殿には、天照大神、素盞嗚尊、日本武尊、宮簀媛命、建稲種命と草薙剣に縁のある神が祀られている。素盞嗚尊は、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治の際に、ヤマタノオロチの尾の中から草薙剣を発見し、天照大神に献上した。天照大神は、その草薙剣を天孫降臨の際に迩迩芸命（ににぎのみこと）に授けた。日本武尊は、草薙剣を持って蝦夷征伐を行い活躍したあと、妃の宮簀媛命のもとに預けた。宮簀媛命は、熱田の地を卜定して草薙剣を祀った。建稲種命は宮簀媛命の兄で、日本武尊の蝦夷征伐に副将として従軍した。

創建

第12代景行天皇の時代、日本武尊が東国平定の帰路に尾張へ滞在した際に、尾張国造乎止与命（おとよのみこと）の娘・宮簀媛命と結婚し、草薙剣を妃の手許へ留め置いた。日本武尊が伊勢国能褒野（のぼの）で亡くなると、宮簀媛命は熱田に社地を定め、剣を奉斎鎮守したのが始まりと言われる。そのため、三種の神器のうち草薙剣は熱田に置かれているとされ、伊勢神宮に次いで権威ある神社として栄えることとなった。

（Wikipedia抜粋）



熱田神宮司社家4～5人が禁を犯してこの御神体を覗き見た。その時の印象を絵にしたものが上図である。（古代の舶載刀剣と鋼材）

天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）は、三種の神器の一つ。草薙剣（くさなぎのつるぎ）、草那芸之大刀（くさなぎのたち）の異名である。熱田神宮の神体となっている。三種の神器の中では天皇の持つ武力の象徴であるとされる。

スサノオ（素戔嗚尊）が、出雲国でヤマタノオロチ（八岐大蛇）を倒し、その尾から出てきた剣が、草薙剣である。日本書紀の注には「ある書がいうに、元の名は天叢雲剣。大蛇の居る上に常に雲気が掛かっていたため、かく名づけたか」とある。スサノオは「これは不思議な剣だ。どうして自分の物にできようか」（紀）と言って、高天原の天照大神（アマテラス）に献上した。剣は天孫降臨の際に、天照大神から三種の神器としてニニギ（瓊瓊杵尊）に手渡され、再び葦原中国へと降りた。

ニニギが所有して以降、皇居内に天照大神の神体とされる八咫鏡とともに祀られていたが、崇神天皇の時代に、皇女トヨスキイリヒメ（豊鍬入姫命）により、八咫鏡とともに皇居の外で祀られるようになった。『古語拾遺』によるとこの時、形代の剣（もう一つの草薙剣）が作られ宮中に残された。

垂仁天皇の時代、ヤマトヒメ（倭姫命）に引き継がれ、トヨスキイリヒメから、合わせて約60年をかけて現在の伊勢神宮・内宮に落ち着いた（「60年」以降の部分は『倭姫命世記』に見られる記述である。詳細記事：元伊勢）。

景行天皇の時代、草薙剣は伊勢国のヤマトヒメから、東国の制圧（東征）へ向かうヤマトタケル（日本武尊）に渡された。相模国（記）・駿河国（紀）で、敵の放った野火に囲まれ窮地に陥るが、剣で草を刈り払い（記のみ）、向い火を点け脱出する。日本書紀の注では「一説には、天叢雲剣が自ら抜け出して草を薙ぎ払い、これにより難を逃れたためその剣を草薙剣と名付けた」とある。東征の後、ヤマトタケルは尾張国で結婚したミヤズヒメ（宮簀媛）の元に剣を預けたまま、伊吹山の悪神を討伐しに行く。しかし山の神によって病を得、大和国へ帰る途中で、最期に「剣の太刀、ああその太刀よ」（記）と草薙剣を呼んで亡くなってしまった。ミヤズヒメは剣を祀るために熱田神宮を建てた。

（草薙剣は八岐大蛇の尾から出てきた。その後、スサノオ－ニギハヤヒ－天香語山（高倉下）－天村雲－倭姫－日本武尊－宮簀媛－熱田神宮と渡ったか。天香語山は崇神東征後に尾張に進出した。藤田）

伊吹山の悪鬼とは大国主系か。
狗奴国、尾張国造も大国主と関係が深く。日本武尊は尾張国造の姦計により殺されたのではないか。（藤田）

ヤマト政権の大将軍である景行天皇の皇子の日本武尊は伊吹山の悪神（大国主の流れを汲む狗奴国の末裔か）によって殺された。日本武尊の異母兄弟である成務天皇の治績に「近淡海に制したまいき」とある。これは成務天皇の時代に伊吹山の悪神すなわちk狗奴国を滅ぼし、ヤマト政権を確立し、行政組織に国と郡が設置されたのではないか。（藤田）

三種の神器（八尺瓊勾玉と草薙の剣は天津神が出雲の大国主から奪い取った戦利品で、八咫鏡は天孫族の元々の神器か）

（Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿；2020年5月17日）

日本神話において、天孫降臨の際に天照大神が瓊瓊杵尊に授けたとされる三種類の宝物、八咫鏡・八尺瓊勾玉・草薙剣の総称。この内、八尺瓊勾玉・草薙剣は併せて剣璽と称される。天皇の践祚に際し、これら神器のうち、八尺瓊勾玉ならびに鏡と剣の形代を所持することが皇室の正統たる帝の証しであるとして、皇位継承と同時に継承される。草薙剣は熱田神宮に、八咫鏡は伊勢の神宮の皇大神宮にそれぞれ神体として奉斎されている。八咫鏡の形代は宮中三殿の賢所に、八尺瓊勾玉は草薙剣の形代とともに皇居・吹上御所の「剣璽の間」仁安置されている。しかし同皇居内に皇族らが住みながらその実見は未だになされていない。（藤田泰太郎＋Wikipedia抜粋）・

八咫鏡（やたのかがみ）

『記紀』神話で、天照大神が天の岩戸に隠れた岩戸隠れの際、石凝姥命が作ったという鏡。天照大神が岩戸を細く開けた時、この鏡で天照大神自身を映し、興味を持たせて外に引き出し、再び世は明るくなった。のちにこの鏡は天照大神が瓊瓊杵尊に授けたといわれる。右図は、八咫鏡とサイズが同じ（直径48cm)といわれる伊都国の都と考えられる平原遺跡から出土した内行花文鏡である。スサノオの孫、瓊瓊杵尊は伊都国の王と考えている。（Wikipedia＋　藤田）

八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）（瓊は赤玉を意味する、出雲の花仙山の赤メノウ製か）

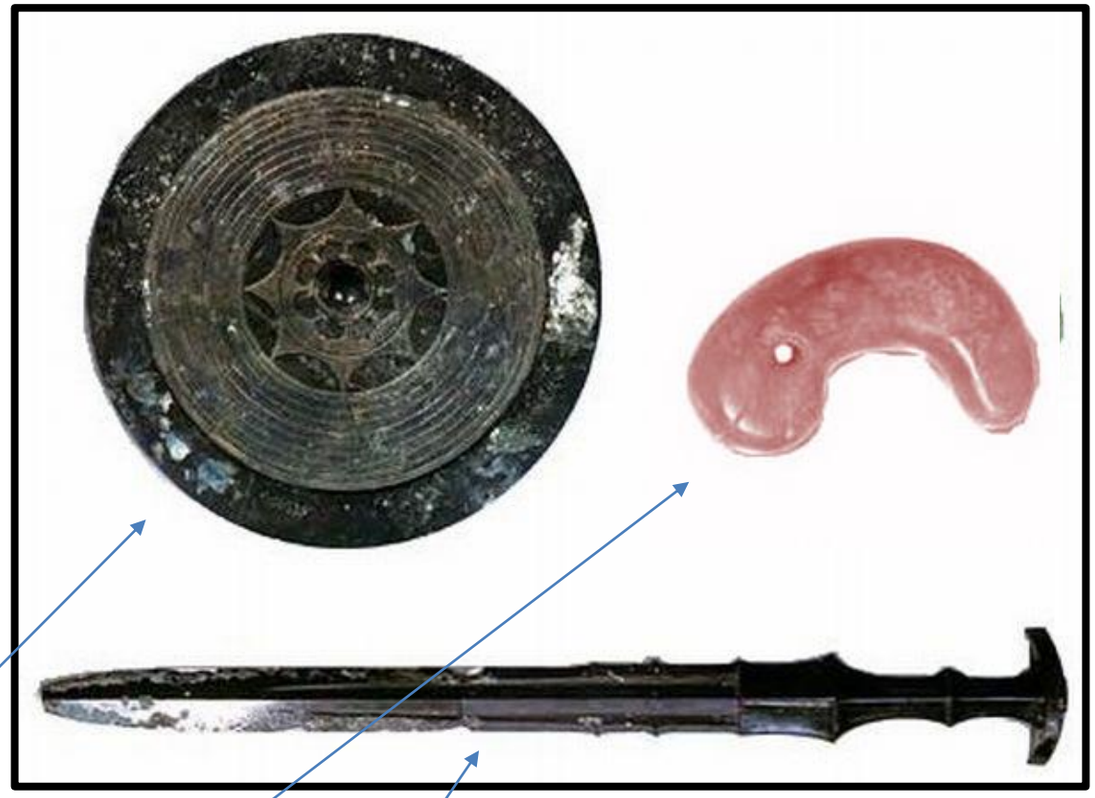
『記紀』神話では、岩戸隠れの際に後に玉造連の祖神となる玉祖命が作り、八咫鏡とともに太玉命が捧げ持つ榊の木に掛けられた。後に天孫降臨に際して瓊瓊杵尊に授けられたとする。（Wikipedia抜粋）

『日本書紀』崇神六十年条に記されている出雲神宝事件とは、熊野大社（出雲）に安置されていた勾玉などの神宝をヤマト王権が奪う事件である。この勾玉が八尺瓊勾玉に当たるのではないか。（藤田）

草薙剣（くさなぎのつるぎ）

草薙剣は天叢雲剣とも言われ、三種の神器の中では天皇の持つ武力の象徴であるとされる。『記紀』神話において、スサノオが出雲国でヤマタノオロチ（八岐大蛇、大国主か）を退治した時に、大蛇の体内（尾）から見つかった神剣である。スサノオは、八岐大蛇由来の神剣を高天原のアマテラスに献上した。続いて天孫降臨に際し他の神器と共にニニギノミコトに託され、地上に降りた。景行天皇の時代、伊勢神宮のヤマトヒメノミコトは、東征に向かうヤマトタケルに草薙剣）託す。ヤマトタケルの死後、草薙剣は神宮に戻ることなくミヤズヒメ（ヤマトタケル妻）と尾張氏が尾張国で祀り続けた。これが熱田神宮の起源であり、現在も同宮の御神体として祀られている。（Wikipedia　抜粋）

草薙剣は八岐大蛇の尾から出てきた。その後、スサノオからニギハヤヒに渡り、さらに天香語山、天叢雲（天村雲）、倭姫、日本武尊、宮簀媛と渡り、熱田神宮御に神体として祀られたか。ちなみに、ヤマトタケルは、天香語山の後裔の尾張国造乎止与命（おとよのみこと）の娘・宮簀媛命と結婚し、草薙剣を妃の手許へ留め置いたので。熱田神宮に祀られるようになったのではないか。（藤田）



（1）天皇と神社（11）三種の神器（蒲生八幡神社）、Net）　三種の神器の想像図

天皇即位の最初の儀式『剣璽等承継の儀』は、宮殿のなかで一番格式の高い正殿『松の間』で行われます。よくテレビのニュース番組などで、ピカピカに光った板張りの大きな部屋でモーニング姿の新首相が天皇陛下から信任を受ける儀式の模様が流れますが、そこで使われている部屋といえば、わかりやすいかもしれません。儀式では新天皇が侍従長より三種の神器と、天皇と日本国家の印鑑である国璽（こくじ）と御璽（ぎょじ）を受け取り、承継されます。三種の神器という言葉はよく使われますが、正式には天皇の継承権を保持される方だけが保有を許される“神物”という意味で、この儀式では三種のうちで八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）と草薙剣（くさなぎのつるぎ）のみが継承されます。ニュースサイトで読む: https://biz-journal.jp/2019/05/post_27747.

三種の神器のなかで八尺瓊勾玉と草薙の剣は、天孫族が出雲の大国主から奪い取ったいわば戦利品である。しかし、八咫鏡は天孫族が初めから所持していた神器である。『剣璽等承継の儀』で、八尺瓊勾玉と草薙剣のみが継承されるのは、これらが大国主から倭国の支配権を譲り受けた証の神器であることによるのではないか。（藤田）

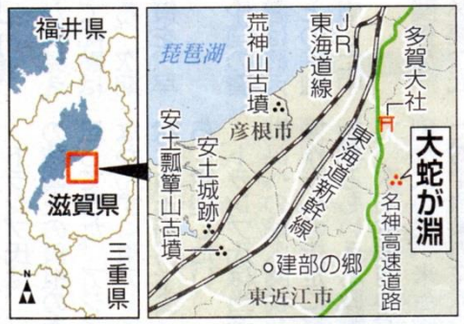
藤田

成務　狗奴国の終焉　ヤマト王権による倭国平定の完了

成務朝、倭（日本）武尊の御子、稲依別により、狗奴国が滅ぼされたか

産経新聞　平成28年12月6日

第12部　天皇への系譜＜1＞　大蛇（大国主か）を退治した忠犬
＜近淡海の安国造が祖、意冨多牟和気（おほたむわけ）が女（むすめ），布多遅比売（ふたじひめ）に娶ひて、生みませる御子、稲依別（イナヨリワケ）王＞
　倭建命の御子6人のなかで、琵琶湖周辺に勢力があったことを示すのがイナヨリワケだ。＜稲依別王は、犬上君、建部君等の祖＞その血筋は多賀神社の社家につながる。
＜川沿いに大蛇が住み、通りかかる村人に危害を加えていた。これを退治するために、稲依別王は猟犬の小石丸をつれてやってきた＞多賀大社の元宮といわれる大瀧神社には、すぐ横を流れる犬上川の急流と奇岩巨岩がつくる「大蛇が淵」を舞台にしたイナヨリワケの伝承が残っている。＜末の下で休息していると、小石丸が吠えかかり、眠ろうとすると、ますます吠えるにで、小石丸の首を切ってしまった。すると首は、松の枝に潜んでいた大蛇の喉にかみつき、大蛇と一緒に落ちた。イナヨリワケは忠犬の首をはねたことを悔やみ、祠を建てた。＞犬上の郡名は、この伝承に由来する犬神、あるいは犬咬みが転じたとされる。『大瀧神社（多賀大社奥宮）縁起』
　イナヨリワケの時代にあたる4世紀中ごろから後半には、琵琶湖畔には墳長100メートルを超える琵琶湖三大古墳が築かれた。安土瓢箪山古墳（近江八幡市）、荒神山古墳（彦根市）、晩年の12代景行天皇が皇居とした高穴穂宮（大津市）に近い膳所茶臼山古墳である。「3つの古墳はいずれも琵琶湖に面しており、大和王権が東国や日本海に繋がる琵琶湖の水運ネットワークを整備したことを示している。



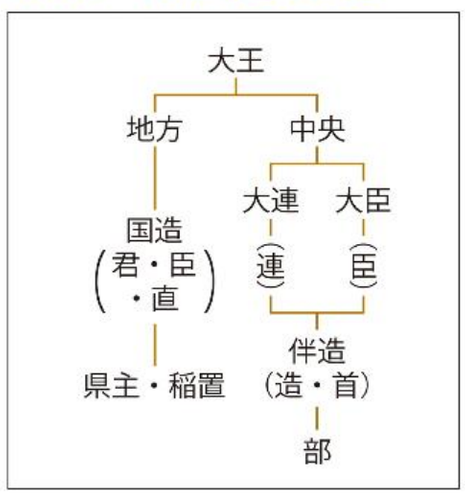
室町時代に描かれた「多賀参詣曼荼羅」の大瀧神社（多賀大社の本宮）の絵の恐竜みたいなのが「火」を噴いています。その首に犬が咬みついたという伝承なんですが、初期の神社は、（大国主の）祟りを鎮める為に建てられたと考えると、結構納得がいきます。（FB情報、澤田順子）

（大国主対物部氏、藤井）

日本武尊の異母兄弟である成務天皇の治績に「近淡海に制したまいき」とある。これは成務天皇の時代に伊吹山の悪神（八岐大蛇）すなわち大国主の直系の狗奴国を滅ぼし、ヤマト政権を確立し、行政組織に国と郡が設置されたことではないのか。稲依別王が成敗した大蛇とは八岐大蛇のことであろう。また、忠犬とは犬祖民族の吐蕃やヤオ族を基層とする隼人のことであるまいか。(藤田)

『古事記』序文に成務天皇は「境を定め邦を開きて、近淡海に制したまいき」とかかれている。成務は『日本書紀』によれば「国群に造長（国造のこと）を立て」たという。つまり列島の地域行政組織に「国」と「県」が設置されたのであり、国土統治にうえで大きな治績と評されたのである。（ヤマト政権、吉村）

No.19　大和朝廷の政治



（いっきに学び直す日本史　古代・中世・近世　教養編、安藤）

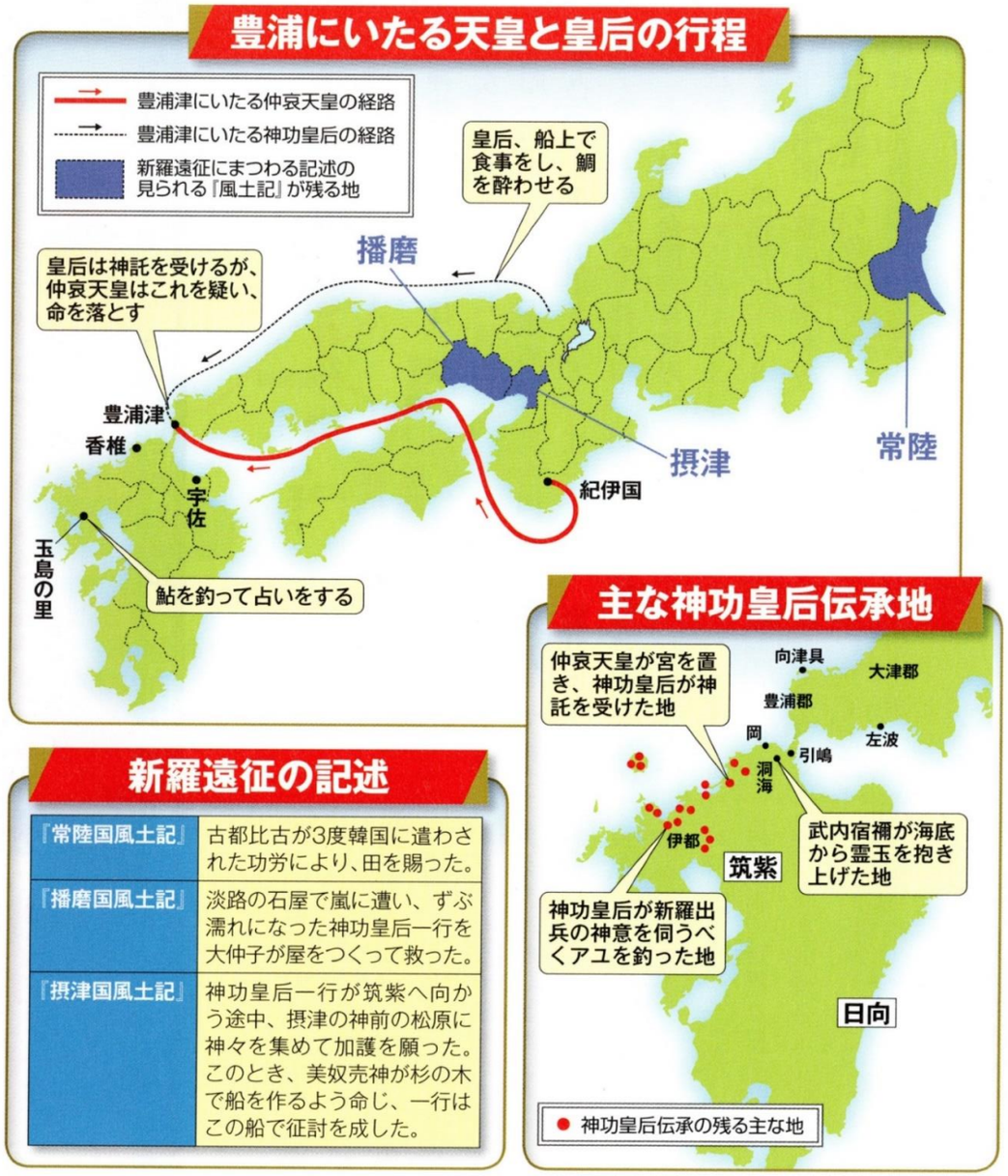
軍事・外交担った犬上君

日本書紀は、15代応神天皇と、異母兄弟の麗坂王・忍熊王の兄弟が皇位を争った時、犬上君の倉見別が麗坂王らの側に付き、東国の兵を興したと記す。クラミワケはイナヨリワケの子とみられ、ヤマトタケルが東征で従えた勢力を子孫が受け継ぎ、軍事を担ったことを示唆する。
　応神期以降はしばらく、犬上君の記事は見えないが、書紀の33代推古天皇の条に、冠位十二階の上から3番目の人物として犬上御田鍬が登場。遣隋使と遣唐使に派遣されており、犬上君は外交にも長じていたことをうかがわせる。

近江の豪族

仲哀　神宮皇后と三韓征伐

藤田



新羅遠征の記述

『常陸国風土記』	古都比古が3度韓国に遣わされた功労により、田を賜った。
『播磨国風土記』	淡路の石屋で嵐に遭い、ずぶ濡れになった神功皇后一行を大仲子が屋をつくって救った。
『摂津国風土記』	神功皇后一行が筑紫へ向かう途中、摂津の神前の松原に神々を集めて加護を願った。このとき、美奴売神が杉の木で船を作るよう命じ、一行はこの船で征討を成した。

（古事記・日本書記、西東社）

神功皇后（三韓征伐）

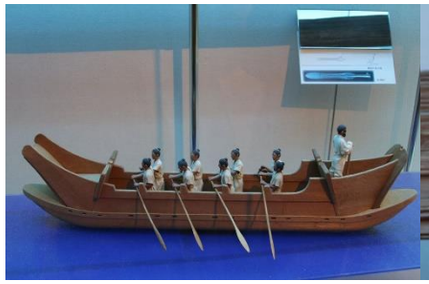
三韓征伐は、神功皇后が新羅出兵を行い、朝鮮半島の広い地域を服属下においたとされる戦争を指す。神功皇后は、仲哀天皇の后で応神天皇の母である。経緯は『古事記』『日本書紀』に記載されているが、朝鮮や中国の歴史書にも関連するかと思われる記事がある。『日本書紀』によれば、仲哀天皇の御代、熊襲、隼人など大和朝廷に反抗する部族が蜂起したとき、神功皇后が神がかりし、「反乱軍の背後には三韓の勢力がある。まず三韓を征討せよ」との神託を得た。神功皇后は、兵を率いて三韓へ出航した。このとき、住吉大神の和魂が神功皇后の身辺を守り、荒魂は突風となり、神功皇后の船団を後押しにより、新羅に侵攻した。新羅が降伏した後、三韓の残り二国（百済、高句麗）も相次いで日本の支配下に入った。ただし三韓とは馬韓・弁韓・辰韓を示し高句麗を含まない朝鮮半島南部のみの征服と考えられることもある。（Wikipedia抜粋）

新羅は殆ど無抵抗で神功皇后の軍門に下った。これは神武皇后を日御子（卑弥呼）と見なしたためではないか。（藤田）

神功皇后が新羅出兵を行い、朝鮮半島の広い地域を服属下においたとされる戦争（三韓征伐、391年）

（古事記・日本書記、西東社）

神功皇后は４世紀末頃、但馬、丹後、若狭の海人族（300艘）を伴い長門の豊浦津に向かった。皇后は豊浦津で各地の海人族が合流した大船団の水軍を引き連れて三韓征伐した。（FB　投稿、西賀真紀（下図））



（三韓征伐に向かう船（想像図）、「いずし古代学習館」（兵庫県出石町袴狭）

（出石町の袴狭遺跡（はかざ）遺跡から出土した木板に、4世紀代のものと思われる船団が線刻されている。）

藤田

七支刀　三韓征伐は391年、七支刀が百済王から倭王に贈られたのは372年か

七支刀（しちしとう）は、古代倭王家に仕えた豪族物部氏の武器庫であったとされる奈良県天理市の石上神宮に伝来した鉄剣。全長74.8cm

七支刀は、石上神宮に伝来した古代の鉄剣である。その由来は早くに忘れられ、神宮ではこれを「六叉の鉾（ろくさのほこ）」と呼び、神田にその年はじめて苗を植える儀式に神を降ろす祭具として用いていたという。1874年（明治7年）に石上神宮大宮司となった菅政友は、水戸藩出身で「大日本史」編纂に参加した経歴のある歴史研究者でもあった。大宮司としてこの社宝をつぶさに観察する機会を得た菅は、刀身に金象嵌銘文が施されていることを発見し、さらに剣の錆を落として、はじめてその銘文の解読を試みた。以来その銘文の解釈・判読を巡って研究が続いている。

銘文
〔表〕
泰■四年■月十六日丙午正陽造百錬■七支刀■辟百兵宜供供（異体字、尸二大）王■■■■作
また
泰■四年十■月十六日丙午正陽造百錬■七支刀■辟百兵宜供供侯王■■■■作
〔裏〕
先世（異体字、口人）来未有此刀百済■世■奇生聖（異体字、音又は晋の上に点）故為（異体字、尸二大）王旨造■■■世
また
先世以来未有此刀百濟■世■奇生聖音故為倭王旨造■■■世

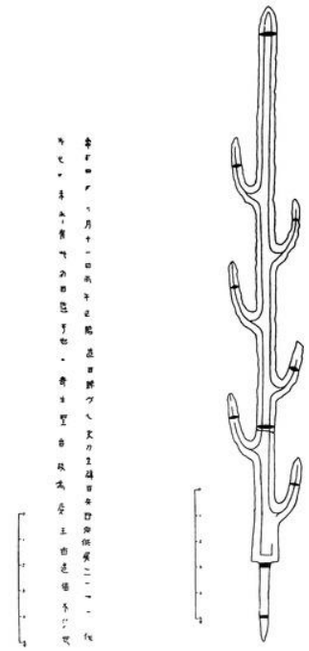
年紀の解釈

銘文の冒頭には「泰■四年」の文字が確認できる。年紀の解釈に関して「太和（泰和）四年」として369年とする説（福山敏男、浜田耕策ら）があり、この場合、東晋の太和4年（369年）とされる。「泰」は「太」と音通するため。

浜田耕策による2005年における研究では、次のとおり発表された。
〔表面〕
泰和四年五月十六日丙午正陽造百練口七支刀出辟百兵宜供供侯王永年大吉祥
<判読>
太和（泰和）四年五月十六日丙午の日の正陽の時刻に百たび練った口の七支刀を造った。この刀は出でては百兵を避けることが出来る。まことに恭恭たる侯王が佩びるに宜しい。永年にわたり大吉祥であれ。
〔裏面〕
先世以来未有此刀百濟王世口奇生聖音（又は晋）故為倭王旨造傳示後世
<判読>
先世以来、未だこのような（形の、また、それ故にも百兵を避けることの出来る呪力が強い）刀は、百済には無かった。百済王と世子は生を聖なる晋の皇帝に寄せることとした。それ故に、東晋皇帝が百済王に賜われた「旨」を倭王とも共有しようとこの刀を「造」った。後世にも永くこの刀（とこれに秘められた東晋皇帝の旨）を伝え示されんことを。

山尾幸久は、裏面では百済王が東晋皇帝を奉じていることから、369年に東晋の朝廷工房で造られた原七支刀があり、百済が372年正月に東晋に朝貢して、同年6月には東晋から百済王に原七支刀が下賜されると、百済では同年にこれを模造して倭王に贈ったとの解釈を行っている。また、当時の東晋では、道教が流行しており、七支刀の形態と、その百兵を避けることができるとする呪術力の思想があったとする。

浜田耕策は山尾幸久の分析を踏まえたうえで、百済王が原七支刀を複製して、刀を倭王に贈るという外交は、当時、百済が高句麗と軍事対立にあったため、まず東晋と冊封関係を結び、次いで倭国と友好関係を構築するためだったとしている。
（Wikipedia抜粋）



372年6月に東晋から百済王に原七支刀が下賜されると百済では同年にこれを模造して倭王に贈ったと思われる。広開土王碑文によると、391年に倭国が三韓を破り、臣民としたとある（三韓征伐か）。即ち、七支刀が百済王から倭王に贈られたのは三韓征伐の19年前となる。

藤田

広開土王陵碑文　4世紀末（391年あるいは392年）に建立

倭軍は鉄で重武装した高句麗軍の騎兵に対抗できなかったのではないか

広開土王碑（こうかいどおうひ）は、高句麗の第19代の王である広開土王（好太王）の業績を称えるために息子の長寿王によって414年（碑文によれば甲寅年九月廿九日乙酉、9月29日 (旧暦)）に建てられた石碑である。好太王碑とも言われ、また付近には広開土王の陵墓と見られる将軍塚・大王陵があり、広開土王陵碑とも言われる。

1880年に中華人民共和国吉林省通化地級市集安市で発見された。高さ約6.3メートル・幅約1.5メートルの角柱状の碑の四面に総計1802文字が刻まれ、純粋な漢文での記述がなされている。風化によって読めなくなっている文字もあるが、辛卯年（391年）条に倭の記事や干支年が『三国史記』などと1年異なるなど4世紀末から5世紀初の朝鮮半島の歴史、古代日朝関係史を知る上での貴重な史料となっている。

碑文は三段から構成され、一段目は高句麗の開国伝承・建碑の由来、二段目に広開土王の業績、三段目に広開土王の墓を守る「守墓人烟戸」の規定が記されている。碑文では広開土王の即位を辛卯年（391年）としており、文献資料（『三国史記』『三国遺事』では壬辰年（392年）とする）の紀年との間に1年のずれがあることが広く知られている。また、この碑文から、広開土王の時代に永楽という元号が用いられたことが確認された。

□辛卯年条の解釈

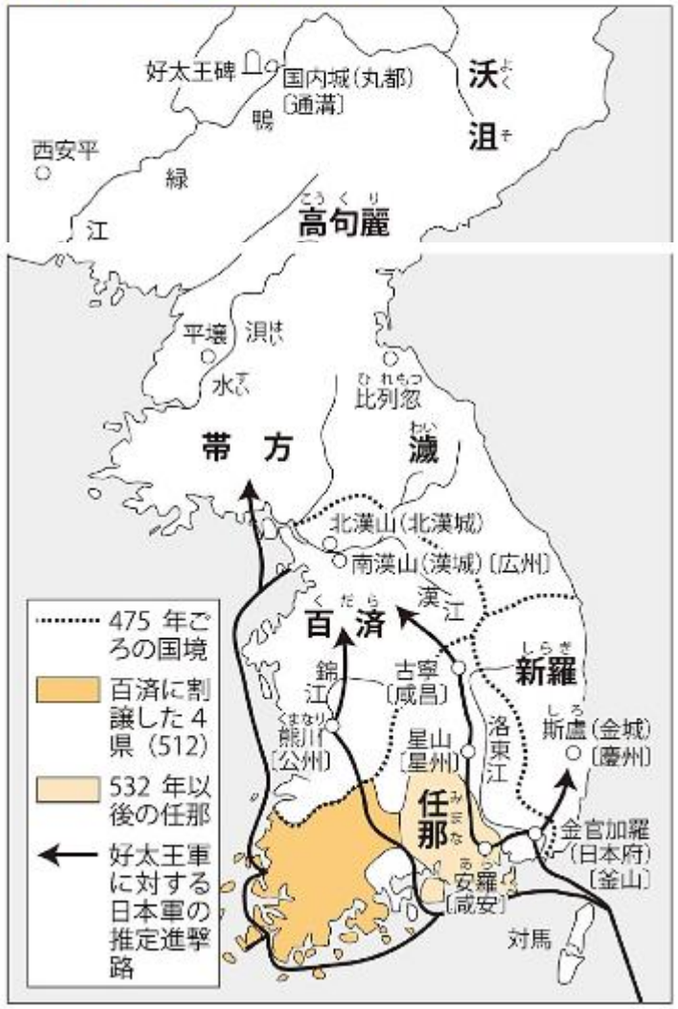
ここでは倭に関する記述のある二段目の部分（「百残新羅舊是屬民由来朝貢而倭□<耒卯年来渡海破百残■■新羅以爲臣民」）について通説により校訂し訳す。

百残新羅舊是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡■破百残■■新羅以為臣民。

そもそも新羅・百残（百済の蔑称か？）は（高句麗の）属民であり、朝貢していた。しかし、倭が辛卯年（391年）に■を渡り百残・■■（「百残を■■し」と訓む説もある）・新羅を破り、臣民となしてしまった。なお、「■を渡り」は残欠の研究から「海を渡り」とされていたが異論もある。
（Wikipedia抜粋）

韓国系および朝鮮系の学者の碑文改竄説があるが、倭国に過去、征服されていたという事実を認めたくないといういわば恣意的に歴史をミスリードさせようとしたものであろう。391年に倭国が、百残・■ ■・新羅を破り、臣民としたとあるが、このことが三韓征伐にあたると考えても年代的な矛盾はない。

No.12　4世紀末の朝鮮



（いっきに学び直す日本史　古代・中世・近世　教養編、安藤）

倭軍の半島への侵攻

4世紀末になると倭が朝鮮半島へ進出を始め、391年に倭が百済□□新羅を破り臣民とした。393年に倭が新羅の都を包囲したのをはじめ、たびたび倭が新羅に攻め込む様子が記録されている。百済はいったん高句麗に従属したが、397年、阿シン王の王子腆支を人質として倭に送って国交を結び、399年に倭に服属した。倭の攻撃を受けた新羅は高句麗に救援を求めると、好太王は新羅救援軍の派遣を決定、400年に高句麗軍が新羅へ軍を進めると新羅の都にいた倭軍は任那・加羅へ退き、高句麗軍はこれを追撃した。これにより新羅は朝貢国となった。402年、新羅もまた倭に奈忽王の子未斯欣を人質に送って属国となった。404年、高句麗領帯方界まで攻め込んだ倭軍を高句麗軍が撃退した。405年、倭の人質となっていた百済王子の腆支が、倭の護衛により帰国し百済王に即位した。5世紀、長寿王の時代には朝鮮半島の大部分から遼河以東まで勢力圏を拡大し、当初高句麗系の高雲を天王に戴く北燕と親善関係を結んだ。この時代には領域を南方にも拡げ、平壌城に遷都した。（Wikipedia抜粋）

倭軍は高句麗軍の騎兵に対抗できなかったのではないか（倭の五王、河内）

年表（古墳時代前期末～古墳時代中期）

古墳時代 前・中期

高句麗・百済、遼西および呉越の地を支配。倭も関与か？（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

369　百済王世子奇生、倭王旨のために七支刀を作る（**石上神宮所蔵**）
百済の太子、礼成江右岸を占領
百済、倭国と共に高句麗を破る

382　新羅からの朝貢がなかったので、襲津彦が新羅討伐に派遣された。

4世紀後半、百済より和邇吉師（王仁）渡来、『論語』と『千字文』をもたらす。書物文首らの祖、もとは楽浪郡出身か。
（漢字公伝）（実際の伝来は紀元前1，2世紀で楽浪郡からか）

390　**応神天皇即位**

391　倭、百済と新羅を臣民化

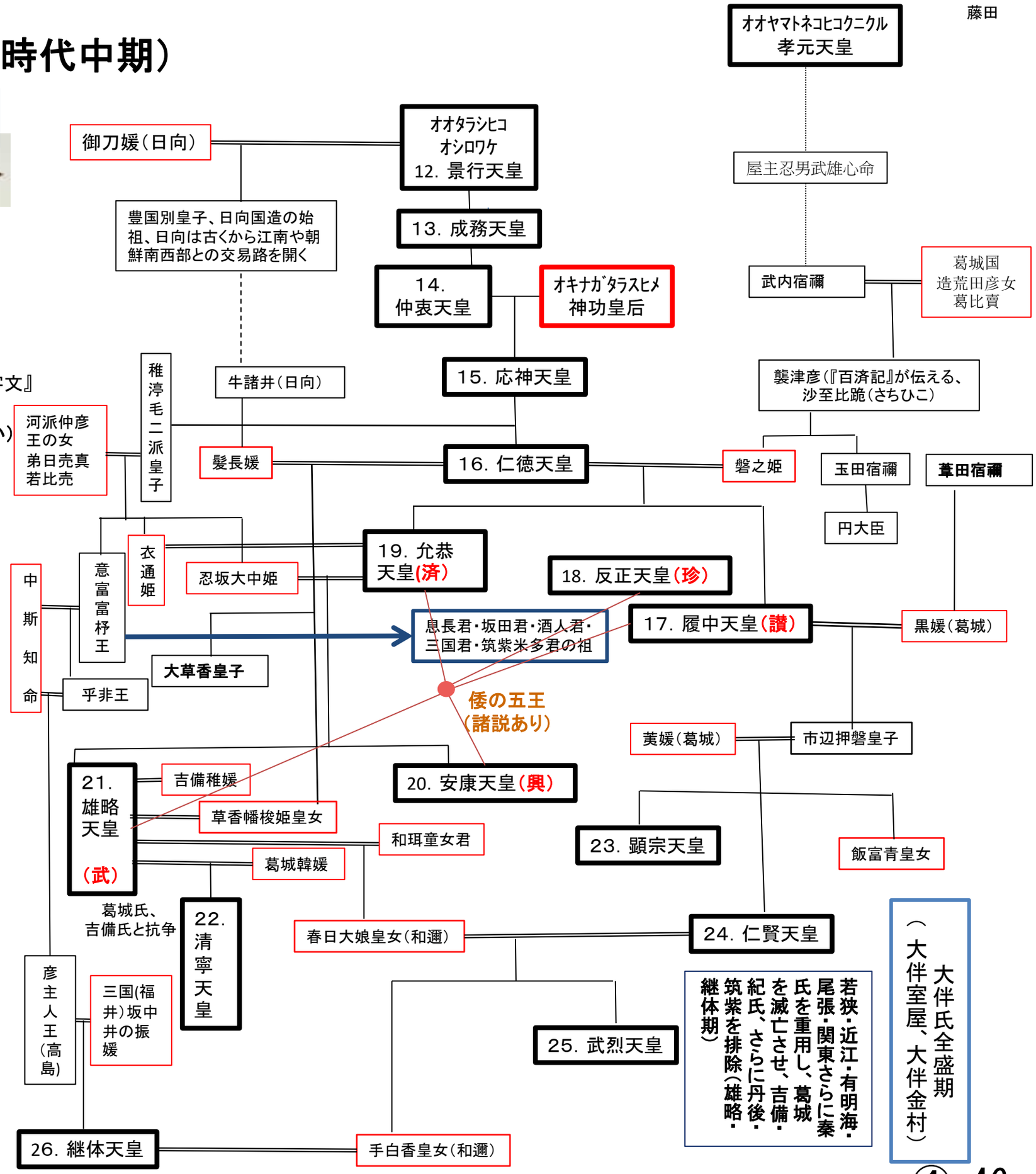
400　）好太王碑

409　倭、好太王に大敗
413　讃、東晋・安帝に貢物を献ずる。
414　高句麗　広開土王碑建立。
420　宋の建国（～479）
425　讃、宋に朝献し、武帝から除綬の詔をうける。おそらく安東将軍倭国王。「宋書」夷蛮伝）
438　珍、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、正式の任命を求める。（『宋書』夷蛮伝）
451　済、宋朝・文帝から「安東将軍」に加え「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。（『宋書』倭国伝）
477　武、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する。（『宋書』夷蛮伝）
479　南斉の高帝、王朝樹立に伴い、倭王の武を鎮東大将軍（征東将軍）に進号。（『南斉書』倭国伝）

500

502　梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を征東大将軍に進号する。（『梁書』武帝紀）
507　**継体天皇即位**

527　筑紫国造磐井の反乱

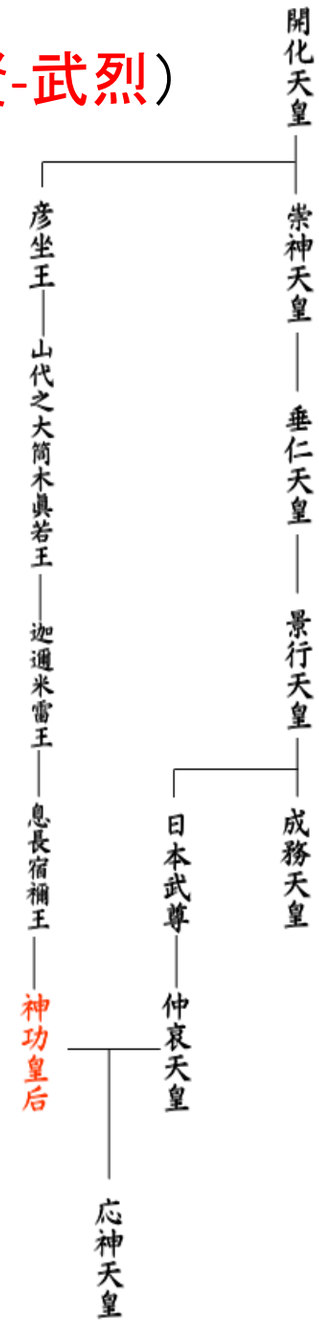


応神王朝 （応神-仁徳-履中-反正-允恭-安康-雄略-清寧-顕宋-仁賢-武烈）

応神　宝賀・貝田推論によると応神元年は西暦390年

応神東征とは、スサノオの嫡流たる息長氏の本隊（皇統の中核）によるヤマト王権の掌握を意図したものである。息長氏の支隊の近江への進出は開化朝のことであり、神宮皇后（息長足姫）は、邪馬台国の台与（息長水依姫）の夫である日子坐王の四世孫である。景行・成務朝には息長氏の近江に至る淀川水系に本格的に進出し、越前の角鹿（敦賀）に達していた。尚、近江穴太に都する成務朝では武内宿禰（葛城の襲津彦や蘇我氏の祖）を大臣にしている。

神功皇后は三韓征伐後の東征において、応神天皇（八幡神）を掲げ、住吉神を伴い、武内宿禰や武振熊命（和邇、彦国葺命の孫）を武将とし、両将の働きにより仲哀天皇の皇子、香坂王・忍熊王の反乱を平定し、ヤマト王権を息長氏の支配下に置いた。さらに、近江に進出し日本海沿岸（敦賀）に達し、日本海航路をも掌握した。ここに丹後の影響を排した皇統によるヤマト王権（応神王朝）が成立した。この応神王朝の成立により、丹波・但馬の勢力は後退し、南朝鮮や中国との交流や交易も日本海経路ではなく、瀬戸内海経路を取るようになる。また、新羅より養蚕などの産業や高度の建築・土木技術を持った秦氏が大挙渡来してきて、応神王朝の興隆に尽くした。
（藤田）



神功皇后

仲哀天皇の皇后。『日本書紀』では気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）・『古事記』では息長帯比売命（おきながたらしひめのみこと）・大帯比売命（おおたらしひめのみこと）・大足姫命皇后。父は開化天皇玄孫・息長宿禰王（おきながのすくねのみこ）で、母は天日矛裔・葛城高顙媛（かずらきのたかぬかひめ）。

『日本書紀』などによれば、神功元年から神功69年まで政事を執り行なった。夫の仲哀天皇が香椎宮にて急死（『天書紀』では熊襲の矢が当たったという）。その後に熊襲を討伐した。それから住吉大神の神託により、お腹に子供（のちの応神天皇）を妊娠したまま筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻めた。新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗・百済も朝貢を約したという（三韓征伐）。

渡海の際は、お腹に月延石や鎮懐石と呼ばれる石を当ててさらしを巻き、冷やすことによって出産を遅らせたとされる。月延石は3つあったとされ、それぞれ長崎県壱岐市の月讀神社、京都市西京区の月読神社、福岡県糸島市の鎮懐石八幡宮に奉納されたと言われている。その帰路、筑紫の宇美で応神天皇を出産し、志免でお紙目を代えたと伝えられている。他にも壱岐市の湯ノ本温泉で産湯をつかわせたなど、九州北部に数々の伝承が残っており、九州北部に縁の深い人物であったと推測される。また八幡神と同じくその言い伝えは北は関東から近畿の大津や京都や奈良や大阪の住吉大社は元より瀬戸内海を挟んで広島や岡山そして四国にも数多くの伝承があり、九州はもとより日本全土にもその言い伝えは数多く存在する。数々の言い伝えが存在して戦前ではまさに有名人であり偉人でもあった。

神功皇后が三韓征伐の後に畿内に帰るとき、自分の皇子（応神天皇）には異母兄にあたる香坂皇子、忍熊皇子が畿内にて反乱を起こして戦いを挑んだが、神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命（彦国葺命の孫） の働きによりこれを平定したという。今でも全国各地で神功皇后の三韓征伐を祝うための山車が存在しており、その業績をたたえる祭りが多い。
（Wikipedia抜粋）

旧高額5円切手1908年

応神天皇

父は先帝仲哀天皇で、母は神功皇后とされるが、異説も多い。その理由は異常に出産が遅れたことにある。父として「是に皇后、大神と密事あり」（住吉大社の『神代記』）とある住吉大神や、あるいはまた武内宿禰とする考えもある。このような出生の神秘性は、本来応神天皇が前王朝との血統上のつながりを持たず、新王朝の開祖であるとされたことを物語っているとするものもある。九州から東進してきた誉田別（応神天皇）は河内の豪族の品陀真若王の家に婿として入り、品陀（誉田）の地名を冠するようになった。（（Wikipedia抜粋）

八幡神は大和朝廷の守護神、ヤマトの陸の軍神

【宇佐神宮（宇佐八幡宮）】

・祭　神：応神天皇（誉田別命 ほんだわけのみこと）（＝八幡神）
比売大神：多岐津姫命（たぎつひめのみこと）、
市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）
多紀理姫命（たぎりひめのみこと）
神功皇后（息長帯姫命 おきながたらしひめのみこと）

・由　緒：全国四万余社の八幡宮の総本宮。宇佐に初めて八幡神が顕れたのは欽明天皇の御代で、御許山（おおもとさん）に鎮座。同天皇三十二年（571）に現本殿のある亀山の麓の菱形池の辺に神霊が顕れ、「我は誉田天皇広幡八幡麻呂（ほんだのすめらみことひろはたのやはたまろ）なり」と告げたので、この地に祀られた。これが宇佐神宮の始まりという。延喜式神名帳には八幡大菩薩宇佐宮、比売大神、大帯姫廟神社の三座として名神大社とある。

現今、八幡神宮もしくは八幡神社と呼ばれるものは、全国に一体いくつぐらいあるのだろうか？諸縁起によれば、日本全国に八幡とつく神社は3万とも4万社とも言われている。八幡神社の総本山という表記にしても、京都府八幡市の「石清水八幡宮」にも、宇佐神宮にも、「全国八幡宮の総本山」という表記が見られる。一体「八幡宮」というのはどんな神様で、どこから始まっているのだろうか。なぜ日本中に「はちまんさん」があり、我々日本人はなぜさしたる疑問も抱かずに、家の氏神様としてすんなり「はちまんさん」を受け入れているのだろうか？

【八幡宮は現在日本中で祀られ広く知られているが、もともとは宇佐周辺で信仰されていた「地方神」だった。宇佐に初めて八幡神が顕（あらわ）れたのは欽明天皇三十二年（571）で、宇佐の御許山（おもとさん）に顕れたと言う。その後宇佐地方の神として大神（おおが）氏と辛島（からしま）氏によって祀られた。しかし、その神が一体どんな神だったかについてはわかっていない。】これは、大分県立歴史博物館が発行している「総合案内」に書かれた「八幡神について」の部分に書かれた文章である。ここに言う大神氏、辛島氏とは一体何物なのか？　またどうして「どんな神だったかについてはわかっていない。」のか。

欽明天皇と言えば、仏教伝来の時の天皇として古代史では有名である。伝来の年をめぐっても諸説あり、「日本書紀」では欽明十三年(552)とされ、また「元興寺縁起」では欽明七年の戊午年（538）となっている。一説によれば、古来より豊前地域は秦氏やその一族である漢氏の居住していた地域とされ、新羅系加羅人と思われる秦氏の故地である「加羅」から、辛島（からしま）という名前も来ているという。辛島氏も秦氏一族なのだ。「八幡」は「はちまん」ではなく「やはた」が古名で、「八」は多さを表し「八咫の鏡」の「八」と同義だという。「幡」は「秦」とも「旗」とも言われる。八幡とは文字通り、多数の「秦氏」が住むところ、あるいは多数の「秦＝旗」が立つ所なのだ。そして欽明の出自も豊前辺りだという。この説によれば、八幡神は新羅からの外来神で、宇佐においては新羅系加羅人の氏神だったという事になる。欽明天皇御代の国際的な記事として見逃せないのは「任那日本府」の滅亡である。

この地方の神に過ぎない宇佐八幡神が、一躍全国的な神へ展開していく画期が訪れる。養老四年（720）の大和朝廷による隼人出兵である。隼人出兵にあたって朝廷は八幡神を守護神とするが、この出兵が朝廷の勝利に終わり、八幡神は朝廷の守護神となるのである。

（つづく）

（つづき）

その後の藤原広嗣（ひろつぐ）の乱などにおいても守護神として敬われ、中央神としての性格を持つようになる。そして天平勝宝元年（749）の東大寺大仏造営を援助した功績で、八幡神は皇族に与えられる一品（いっぽん）という位を得た。皇族と同等のあつかいを受けることになった八幡神は、やがて大帯（おおたらし）姫神が息長帯（おきがなたらし）姫、つまり神功皇后に擬せられ、その結果として八幡大神は神功皇后の子・応神天皇と認識されるようになった。なぜ応神天皇とその母である神功皇后を、近畿地方でなく、宇佐で祭るのか。宇佐八幡宮の祭神は、延喜式（905～927年撰述）によれば、八幡大菩薩宇佐大神、大帯姫神、比咩（姫）神の三神とある。最後の比咩神とは宇佐地方・御許山の神であるが、宗像の三姫神と対比して論じられる事もある。比咩大神は三人の真ん中に鎮座していて、主神の扱いである。この神は一体どんな神なのか。宗像三女神といわれるのは、日本書紀の「一書」にあるだけである。

時代はくだり都が平安京へ移ると、八幡神は都の西南の男山に勧請（かんじょう：遷座）された。石清水八幡宮の創設である。さらに武士の頭領たる源氏が八幡神を信仰し、康平六年（1063）には鎌倉へ勧請して、鶴岡八幡宮を創設した。こうして八幡神は、時の権力と結びついて全国展開を遂げてゆくのであるが、その過程で宇佐神宮は石清水八幡宮の支配下となり、九州の有力神社という立場になっていった。鎌倉幕府の成立により、地頭が諸国へ派遣され、各地に源氏が信仰する八幡神を祀った。こうして全国に広まった鎮守としての八幡宮は、やがて「ムラの守護神」となっていき、村人達から「五穀豊穣」、生活の「安穏」を祈る神として信仰されたのである。

宇佐神宮にはほかの神社とは違った参拝の作法がある。“二拝四拍手一拝”と言って他の神社とは違う。四拍手を打つ神社はここと出雲大社くらいで、その由来をめぐる議論も盛んである。また、比売大神をめぐっても宗像大社の三女神との対比や、ヒメ大神という名前から、比売＝ヒメ＝姫子＝日女子（＝天照大神）＝卑弥呼という図式がある。

（宇佐神宮http://inoues.net/ruins/usajingu.htm抜粋）

宇佐神宮　Wikipedia

藤田

―謎の女神、宇佐神宮の比売大神とは―

宇佐神宮の祭神に比売大神（宗像三女神）と神功皇后が挙げられている。比売大神は、先に議論した賀夜奈流美命とは同一神か？

卑弥呼を日巫女とし、海神族の代々の女王の世襲名とすると、宗像三女神―下照姫－卑弥呼－台与―倭姫－神功皇后と世襲されてきたのであろうか。

（比売大神賀（夜奈流美命）の系譜）

宗像三女神（海神族の女王）：多岐津姫命、市杵嶋姫命、多紀理姫命

下照姫　大国主と宗像女神の一柱、多紀理姫神との息女神。

卑弥呼　邪馬台国の女王。下照姫の後裔の三上祝の一族で、和邇氏の巫女か。

台与　卑弥呼の後継の台与は、卑弥呼の姪か。台与は息長水依姫と思われ、和邇氏一族と見なされる日子坐王の妻。

倭姫　垂仁天皇の皇女で、母は皇后の日葉酢媛命。日葉酢媛命は、息長水依姫と日子坐王の息子（丹波道主）の息女。

神功皇后　日子坐王の4世孫。三韓征伐には和邇氏武将の武振熊命を伴い、対馬の和珥津から新羅に侵攻。

ヤマトの軍神

陸の軍神、八幡神（はちまんじん）は、日本で信仰される神で、清和源氏をはじめ全国の武士から武運の神（武神）「弓矢八幡」として崇敬を集めた。誉田別命とも呼ばれ、応神天皇と同一とされる。神仏習合時代には八幡大菩薩（はちまんだいぼさつ）とも呼ばれた。八幡神は応神天皇の神霊で、571年に初めて宇佐の地（宇佐神宮）に示顕したと伝わる。応神天皇（誉田別命）を主神として、比売神（宗像三女神）、応神天皇の母である神功皇后を合わせて八幡三神として祀っている。

海の軍神、住吉神は．底筒男命（そこつつのおのみこと）、中筒男命（なかつつのおのみこと）、表筒男命（うわつつのおのみこと）の総称である。住吉大神ともいうが、この場合は住吉大社にともに祀られている神功皇后を含めることがある。伊邪那岐尊が、黄泉国から伊邪那美命を引き戻そうとするが果たせず、筑紫で禊を行った。このとき、瀬の深いところで底筒男命が、瀬の流れの中間で中筒男命が、水表で表筒男命が、それぞれ生まれ出たとされる。

神功皇后が三韓征伐より帰還した時、神功皇后への神託により天火明命の流れを汲む田裳見宿禰が、住吉三神を祀ったのに始まる。八幡神である応神天皇の母の神功皇后を加えた住吉大神は、八幡神の祖神とされ、応神王朝の守護神とされる。また八幡神が陸の軍神であるのに対して住吉神は海の軍神ともされる。

宇佐神宮

↕

住吉大社

ヤマトの海の軍神

藤田

住吉神社

三大住吉神社
住吉大社（大阪市）– 摂津国一宮、住吉神社 (下関市) – 長門国一宮、住吉神社 (福岡市) – 筑前国一宮
祭神：住吉三神
底筒男命（そこつつのおのみこと）、中筒男命（なかつつのおのみこと）、表筒男命（うわつつのおのみこと）。伊邪那岐尊と伊邪那美命は国生みの神として大八島を生み、またさまざまな神を生んだが、伊邪那美命が火之迦具土神を生んだときに大火傷を負い、黄泉国（死の世界）に旅立った。その後、伊邪那岐尊は、黄泉国から伊邪那美命を引き戻そうとするが果たせず、「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」で、黄泉国の汚穢を洗い清める禊を行った。このとき、瀬の深いところで底筒男命が、瀬の流れの中間で中筒男命が、水表で表筒男命が、それぞれ生まれ出たとされる。
（Wikipedia抜粋）

住吉大社（大阪市）– 摂津国一宮
（藤田民枝撮影）

住吉大社（大阪市） – 摂津国一宮
祭神：住友三神、神功皇后
『日本書紀』神功皇后摂政前紀によれば、住吉三神（筒男三神）は神功皇后の新羅征討において皇后に託宣を下し、その征討を成功に導いた。そして神功皇后摂政元年、皇后は大和への帰還中に麛坂皇子・忍熊皇子の反乱に遭い、さらに難波へ向かうも船が進まなくなったため、務古水門（むこのみなと：兵庫県尼崎市の武庫川河口東岸に比定）で占うと住吉三神が三神の和魂を「大津の渟中倉の長峡（おおつのぬなくらのながお）」で祀るように託宣を下した。そこで皇后が神の教えのままに鎮祭すると、無事海を渡れるようになったという。一般にはこの「大津の渟中倉の長峡」が住吉大社の地に比定される。
(Wikipedia抜粋)

住吉神社 (福岡市) – 筑前国一宮

津守氏（つもりうじ）は、「津守」を氏の名とする氏族。住吉大社（大阪府大阪市住吉区）の歴代宮司の一族で、古代以来の系譜を持つ氏族である。
出自
　津守氏は、天火明命の流れをくむ一族であり、摂津国住吉郡の豪族の田蓑宿禰の子孫である。田蓑宿禰が「七道の浜」（大阪府堺市七道）(当時は住吉郡)において新羅征伐から帰還した神功皇后を迎えた時、神功皇后が住吉三神の神功があったことから、田蓑宿禰に住吉三神を祀（まつ）るように言い、田蓑宿禰の子の豊吾団（とよ・の・ごだん）に津守の姓を与えたのが始まり。津守とは「津（港）」を「守る」という意味。

住吉神社（福岡市） – 筑前国一宮 福岡市中心部、那珂川のかつての河口付近に鎮座する、航海守護神の住吉三神を祀る神社である。全国には住吉神社が2,000社以上分布し、一般には大阪の住吉大社がその総本社とされるが、これに対して当社が全ての住吉神社の始源になるとする説がある。
(Wikipedia抜粋)

住吉神社 (下関市) – 長門国一宮

住吉神社（下関市） ー長門国一宮（。旧社格は官幣中社で、現在は神社本庁の別表神社。『日本書紀』神功皇后摂政前紀によれば、三韓征伐の際、新羅に向う神功皇后に住吉三神（住吉大神）が神託してその渡海を守護し、帰途、大神が「我が荒魂を穴門（長門）の山田邑に祀れ」と再び神託があり、穴門直践立（あなとのあたえほんだち）を神主の長として、その場所に祠を建てたのを起源とする。

気比神宮（北陸道総鎮守）

神功皇后と応神天皇と深い繋がり

応神王朝になると朝鮮半島や中国東北部（渤海など）からの外交・交易ルートが但馬・丹後・若狭から越前の角鹿（敦賀）に代わる。また、角鹿は北陸から畿内への入り口としても栄えた。

氣比神宮（けひじんぐう、気比神宮）は、福井県敦賀市曙町にある神社。越前国一宮。旧社格は官幣大社。「ケヒ（気比/笥飯）」の由来としては、『古事記』では「御食津（みけつ）」から「気比」に転訛したという。福井県中央部、敦賀市市街地の北東部に鎮座する。**敦賀は天然の良港を有するとともに、北陸道諸国（現在の北陸地方）から畿内への入り口であり、対外的にも朝鮮半島や中国東北部への玄関口にあたる要衝である。神宮はそのような立地であることから、「北陸道総鎮守」と称されて朝廷から特に重視された神社であった。**

祭神

本殿（本宮）：伊奢沙別命（いざさわけのみこと）- 主祭神。「気比大神」または「御食津大神」とも称される。
仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）- 第14代天皇。神功皇后（じんぐうこうごう）- 仲哀天皇の皇后。
四社：宮東殿宮：日本武尊（やまとたけるのみこと）、総社宮：応神天皇（おうじんてんのう）- 第15代天皇。
平殿宮：玉姫命（たまひめのみこと、玉妃命）-『気比宮社記』では神功皇后の妹の虚空津比売命とする。
西殿宮：武内宿禰命（たけのうちのすくねのみこと）

史書では「笥飯」「気比」「御食津」と記されるほか、『気比宮社記』では「保食神」とも記される。これらは、いずれも祭神が食物神としての性格を持つことを指す名称であり、敦賀が海産物朝貢地であったことを反映するといわれる。このことから、神宮の祭神は上古より当地で祀られた在地神、特に海人族によって祀られた海神であると解されている。一方、『日本書紀』[に新羅王子の天日槍の神宝として見える「胆狭浅大刀（いささのたち）」との関連性の指摘があり、イザサワケを天日槍にあてて新羅由来と見る説もある。

応神天皇（『集古十種』）第15代天皇。『古事記』『日本書紀』によれば伊奢沙別命（神宮の主祭神）と名を交換したという。このイザサワケは、仲哀天皇・神功皇后・応神天皇と深いつながりにあることが『古事記』『日本書紀』によって知られる。両書では、仲哀天皇が角鹿に行宮として「笥飯宮」を営んだとあるほか、天皇の紀伊国滞在中に熊襲の謀叛があり角鹿にいた神功皇后を出発させたと見え、角鹿の地が登場する。神功皇后は、仲哀天皇の突然死を経て新羅に遠征（三韓征伐）、帰途に太子（誉田別尊；応神天皇）を産んだ。そして、皇后と太子がヤマトへ戻る際に謀叛があったが無事平定し、太子は武内宿禰に連れられて禊のため気比神に参詣したという。以上のように、歴史の早い段階から気比神が朝廷の崇敬を受ける神として登場しており、一連の出征の始まり・終わりを成したことから古くは軍神として崇敬されたとも見られる。

『古事記』ではその後の経緯として、武内宿禰に連れられた太子（応神天皇）はイザサワケと名の交換を行ったとする（易名説話）。説話によれば、太子が角鹿（敦賀）の仮宮を営んでいると、夜の夢にイザサワケが現れて名を交換するよう告げられた。太子が承諾するとイザサワケは翌朝に浦に出るように言い、太子が言われたとおりにすると浦には一面にイザサワケの献じた入鹿魚（イルカ）があった。これにより太子はイザサワケを「御食津大神（みけつのおおかみ）」と称え、のちにその名が「気比大神」となったという。同様の説話は『日本書紀』[原 4]でも別伝として記されている。この説話の解釈には諸説あるが、特にその真相を**「名（な）と魚（な）の交換」すなわち「名の下賜」と「魚の献上」であるとして、気比神（とその奉斎氏族）の王権への服属儀礼を二重に表す**と見る説が有力視される。また、以上のように当地が**応神天皇系の勢力基盤であったことは、越前から出た応神天皇五世孫の継体天皇（第26代）とも関係する**といわれる。

（Wikipedia抜粋）

大鳥居（国の重要文化財）
「日本三大鳥居」の1つに数えられる。（光一郎　撮影）

（中鳥居、奥に外拝殿　Wikipedia）

応神朝以降の朝鮮状況と出兵

応神天皇の母の神功皇后の「三韓征伐」のように、河内政権になる頃から倭軍の半島進出が盛んになった。それに伴って半島からの渡来人が目立ってきた。百済より和邇吉師（王仁）渡来、『論語』と『千字文』をもたらす。応神朝には、葛城襲津彦や倭軍の精鋭の助けにより新羅の妨害を排し、弓月君（秦氏の先祖）の民が百済より渡来した。この頃、海部（あまべ）、山部などの土木技術者も渡来した。これら渡来人の助けで大堤や巨大古墳を築くなどの大型の土木工事が行われた。仁徳朝には、大阪湾沿岸部の河内平野一帯で、池・水道・堤などの大規模な治水工事が行われた。また、難波の堀江の開削を行って、現在の高麗橋付近に難波津が開かれ、当時の物流の一大拠点となった。この時期につくられた倭製の土師器や青銅器ときには滑石の祭器が、伽耶と称される韓国南部の慶尚南道や全羅南道の墳墓や集落遺跡から発見されている。一方、倭においても、伽耶製の陶質土器や、鉄艇と呼ぶ半島製の鉄製の短冊形の鉄素材の出土量が急増しています。さらに、河内政権では、従来の古墳に埋められた埴輪などの素焼きの土師器に加えて、ろくろを使い成形し高温で焼く須恵器が造られ始めた。大阪府の陶邑窯跡群で生産された須恵器が前方後円墳分布域の北端と南端にまで運ばれている。また、牧畜が一般化し、なかでも平郡氏が王権の馬の管理に携わった。尚、允恭天皇は、氏姓の乱れは国家の混乱を招く原因になりかねないと考え、氏・姓の氏姓制度を整えた。この允恭の施策によって、貴族・百姓の身分的序列化が成し遂げられた。

応神朝以降日朝関係なくして政治情勢を語れない。雄略天皇の時代になると、倭と百済が同盟を結び新羅と争い、北方から高句麗が圧迫するという状況が出来上がってきました。

雄略4年、百済より昆支（こんき）王が来日した。百済の加須利君（かすりきみ）（蓋鹵王）弟・軍君（昆支王）を日本に派遣し、天皇に仕えるように命じた。この軍君は大和へ向かう途中の筑紫で、兄王から賜った女が出産したため、母子を百済に送り返した。この子がのちの武寧王とされている。雄略8年には新羅の求めに応じて高句麗を撃破。翌年には紀小弓宿禰らを新羅攻撃に派兵するも、内部分裂により失敗した。また、雄略20年に当たる475年に百済の都が高句麗に攻め落とされ、蓋鹵王らが殺害された際には逃げ延びた百済王族の依頼を受けて百済の再興に手を貸しました。

応神王朝以降の朝鮮史

391年	高句麗、広開土王即位する。
396年	高句麗、百済北部を占領。
397年	百済、倭と結ぶ。
400年	高句麗、半島南部に進出して倭を破る。
427年	高句麗、平壌に遷都する。
464年？	倭、新羅を攻撃する。
465年？	倭、新羅を攻撃するも失敗に終わる。
475年	高句麗、百済の漢城を攻撃し蓋鹵王を殺害する。百済、熊津に遷都し、文周王を擁して復興する。
532年	新羅、金官加耶を併合する。
551年	百済、高句麗より漢城周辺を奪回する。
552年	新羅、百済から漢城周辺を奪う。
554年	百済の聖明王、新羅と戦い敗死する。
562年	新羅、大加耶を併合する。
598年	高句麗、遼西へ侵攻する。
611年	隋、第1次高句麗遠征を行なう。
613年	隋、第2次高句麗遠征を行なう。
614年	隋、第3次高句麗遠征を行なう。
624年	高句麗・百済・新羅、唐に朝貢する。
644年	唐、高句麗を攻撃する。
655年	唐、再び高句麗を攻撃する。
660年	新羅・唐連合軍、百済を滅ぼす。
663年	倭・百済連合軍、白村江で新羅・唐連合軍に大敗。
668年	新羅・唐連合軍、高句麗を滅ぼす。
676年	新羅、唐を破り朝鮮半島から駆逐する。

古事記・日本書記、西東社

古墳時代中期

秦氏

秦氏の渡来

秦氏（弓月君）はカザフスタンの弓月国の出自で新羅（旧秦韓の地）から渡来か

弓月君（ゆづきのきみ/ユツキ）は、『日本書紀』に記述された、秦氏の先祖とされる渡来人である。『新撰姓氏録』では融通王ともいい、秦の帝室の後裔とされる。『日本書紀』による帰化の経緯は、まず応神天皇14年に弓月君が百済から来朝して窮状を天皇に上奏した。弓月君は百二十県の民を率いての帰化を希望していたが新羅の妨害によって叶わず、葛城襲津彦の助けで弓月君の民は加羅が引き受けるという状況下にあった。しかし三年が経過しても葛城襲津彦は、弓月君の民を連れて帰還することはなかった。そこで、応神天皇16年8月、新羅による妨害の危険を除いて弓月君の民の渡来を実現させるため、平群木菟宿禰と的戸田宿禰が率いる精鋭が加羅に派遣され、新羅国境に展開した。新羅への牽制は功を奏し、無事に弓月君の民が渡来した。

弓月君は、『新撰姓氏録』によれば、秦始皇帝三世孫、孝武王の後裔である。孝武王の子の功満王は仲哀天皇8年に来朝、さらにその子の融通王が別名・弓月君であり、応神天皇14年に来朝したとされる。渡来後の弓月君の民は、養蚕や織絹に従事し、その絹織物は柔らかく「肌」のように暖かいことから波多の姓を賜ることとなったのだという命名説話が記されている。その後の子孫は氏姓に登呂志公、秦酒公を賜り、雄略天皇の御代に禹都萬佐（うつまさ：太秦）を賜ったと記されている。『日本三代実録』によると、功満王は秦始皇帝十二世孫である。（子の融通王は十三世孫に相当。）

『三国志』魏書辰韓伝によれば朝鮮半島の南東部には古くから秦の亡命者が移住しており、そのため辰韓（秦韓）と呼ばれるようになったという。）『宋書』倭国伝では、通称「倭の五王」の一人の珍が元嘉15年（438年）「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」を自称しており、明確に秦韓を一国として他と区別している。その後の倭王の斉、興、武の記事にも引き続き秦韓が現れる。弓月君の帰化の伝承は、この辰韓、秦韓の歴史に関係するとも考えられている。
（Wikipedia抜粋）

弓月と兵主神 内藤湖南氏(京都帝国大学教授・東洋史)は、「奈良県三輪山傍の穴師の弓月嶽にある大兵主神社(奈良県桜井市穴師)は『史記封禅書』に、秦の始皇帝が山東地方で祀っていた「天主（天の神）、地主（地の神）、兵主（武器の神）、陰主（陰を知る神）、陽主（陽を知る神）、月主（月の神）、日主（太陽の神）、四時主（四季の神）」の八神のうち根本尾神である兵主神を祀る神社だから秦氏の祖の弓月君と結びつく」としている。兵主神は秦氏によって日本に持ち込まれた。

秦氏の故郷、弓月国

秦氏の故郷・弓月国（クンユエ）は、中央アジアのカザフスタン内にあり、東の一部が、シンチャンウイグル自治区にかかっている。天山山脈のすぐ北側に位置し、南にはキルギスタンが接している。昔、この地は、クルジア(Kuldja・弓月城)と呼ばれていた。
（備前西大寺地名考 金山の考察　Net、丸谷憲二 ）

（秦氏１（歴史）monmoのプログ－Yahoo！プログ）

秦氏

日本書紀によると応神天皇14年に弓月君（ゆづきのきみ：新撰姓氏録では融通王）が朝鮮半島の百済から百二十県の人を率いて帰化し秦氏の基となったというが、加羅（伽耶）または新羅から来たのではないかとも考えられている（新羅は古く辰韓＝秦韓と呼ばれ秦の遺民が住み着いたとの伝承がある）。ハタ（古くはハダ）という読みについては朝鮮語のパダ（海）によるとする説のほか、機織や、新羅の波旦という地名と結び付ける説もある。

その後、大和のみならず、山背国葛野郡（現在の京都市右京区太秦）、同紀伊郡（現在の京都市伏見区深草）や、河内国讃良郡（現在の大阪府寝屋川市太秦）など各地に土着し、土木や養蚕、機織などの技術を発揮して栄えた。山背国からは丹波国桑田郡（現在の京都府亀岡市）にも進出し、湿地帯の開拓などを行った。雄略天皇の時代には秦酒公（さけのきみ）が各地の秦部、秦人の統率者となったという。欽明天皇の時代には秦大津父（おおつち）が伴造となり大蔵掾に任ぜられたといい、本宗家は朝廷の財務官僚として活動したらしい。

秦氏の本拠地は山背国葛野郡太秦が分かっているが、河内国讃良郡太秦にも「太秦」と同名の地名がある。これを検討すると、河内国太秦には弥生中期頃の高地性集落（太秦遺跡）が確認されており、付近の古墳群からは5~6世紀にかけての渡来人関係の遺物が出土（太秦古墳群）している。秦氏が現在の淀川の治水工事として茨田堤を築堤する際に協力したとされ、現在の熱田神宮が広隆寺に記録が残る河内秦寺（廃寺）の跡だったとされる調査結果もある。そして、伝秦河勝墓はこの地にある。また、山背国太秦は秦河勝が建立した広隆寺があり、この地の古墳は6世紀頃のものであり、年代はさほど遡らないことが推定される。秦氏が現在の桂川に灌漑工事として葛野大堰を築いた点から山背国太秦の起点は6世紀頃と推定される。よって、河内国太秦は古くから本拠地として重視していたが、6世紀ごろには山背国太秦に移ったと考えられる。

山背国においては桂川中流域、鴨川下流域を支配下におき、その発展に大きく寄与した。山背国愛宕郡（現在の京都市左京区、北区）の鴨川上流域を本拠地とした賀茂氏と関係が深かったとされる。秦氏は松尾大社、伏見稲荷大社などを氏神として祀り、それらは賀茂氏の創建した賀茂神社とならび、山背国でももっとも創建年代の古い神社となっている。秦氏の末裔はこれらの社家となった。

秦氏で最も有名な人物が秦河勝である。彼は聖徳太子に仕え、太秦に蜂岡寺（広隆寺）を創建したことで知られる。またほぼ同時代に天寿国繍帳（中宮寺）の製作者として秦久麻の名が残る。

『隋書』「巻八十一 列傳第四十六 東夷 倭國」に「又至竹斯國又東至秦王國 其人同於華夏 以爲夷州疑不能明也」と風俗が中国と同じである秦王国なる土地（瀬戸内海沿岸付近？）が紹介されているが、これを秦氏と結び付ける考えもある。また佐伯好郎は1908年（明治41年）1月、『地理歴史 百号』（主宰　喜田貞吉）に収載の「太秦（禹豆麻佐）を論ず」において秦氏は景教（キリスト教のネストリウス派）徒のユダヤ人であるとの説をとなえ、またルーツを古代イスラエルに求めたり、八幡神（やはたのかみ）信仰の成立に深く関わったと考える人もいる。実際、景教（キリスト教ネストリウス派）が中央アジアの古代遊牧民国家や中国に与えた影響は非常に大きいため、今後さらなる研究が待たれる。

八色の姓では忌寸の姓を賜り、その後、忌寸のほか、公、宿禰などを称する家系があった。

平安遷都に際しては葛野郡の秦氏の財力・技術力が重要だったとする説もある。平安時代には多くが惟宗氏を称するようになったが、秦氏を名乗る家系（楽家の東儀家など）も多く残った。東家、南家などは松尾大社の社家に、西大路家、大西家などは伏見稲荷大社の社家となった。伏見稲荷大社の社家となった羽倉家、荷田家も秦氏の出自という説がある。また、高僧を含めて僧侶にも秦氏の出身者が、あまたいる。

（秦氏とは　河原姓のルーツ探し、NET）

秦氏の氏神とする木嶋坐天照御魂神社
（京都市右京区太秦森ケ東町）

藤田

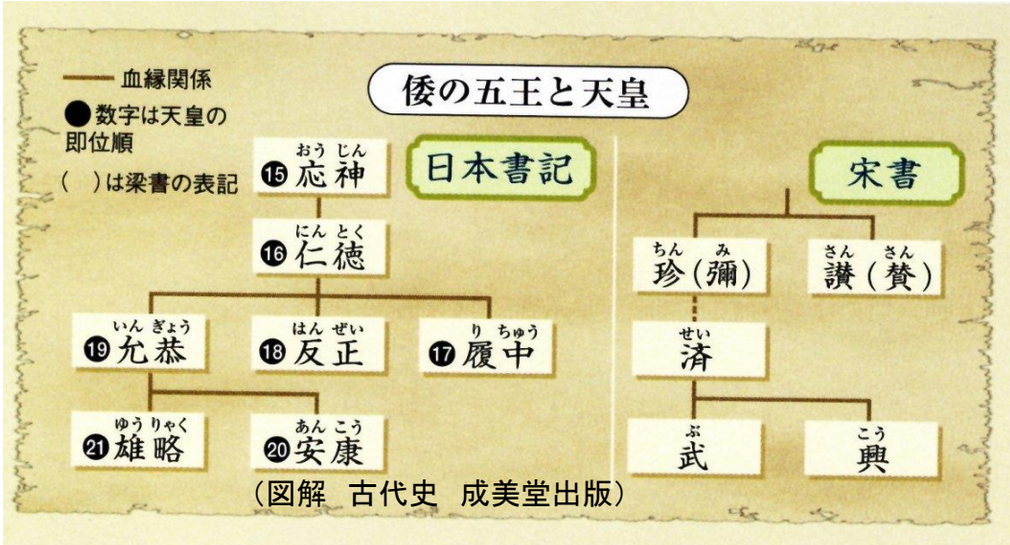
倭の五王

倭の五王、外交年表
413年 東晋 義熙9 讃 東晋・安帝に貢物を献ずる。(『晋書』安帝紀、『太平御覧』)
421年 宋 永初2 讃 宋に朝献し、武帝から除綬の詔をうける。おそらく安東将軍倭国王。(『宋書』夷蛮伝)
425年 宋 元嘉2 讃 司馬の曹達を遣わし、宋の文帝に貢物を献ずる。(『宋書』夷蛮伝)
430年 宋 元嘉7 讃? 1月、宋に使いを遣わし、貢物を献ずる。(『宋書』文帝紀)
438年 宋 元嘉15 珍 これより先(後の意味以下同)、倭王讃没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、正式の任命を求める。(『宋書』夷蛮伝)
4月、宋文帝、珍を安東将軍倭国王とする。(『宋書』文帝紀)
珍はまた、倭隋ら13人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍にされんことを求め、許される。(『宋書』夷蛮伝)
443年 宋 元嘉20 済 宋・文帝に朝献して、安東将軍倭国王とされる。(『宋書』夷蛮伝)
451年 宋 元嘉28 済 宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。安東将軍はもとのまま。(『宋書』倭国伝)
7月、安東大将軍に進号する。(『宋書』文帝紀)
また、上った23人は、宋朝から軍・郡に関する称号を与えられる。(『宋書』夷蛮伝)
460年 宋 大明4 済? 12月、孝武帝へ遣使して貢物を献ずる。
462年 宋 大明6 興 3月、宋・孝武帝、済の世子の興を安東将軍倭国王とする。(『宋書』孝武帝紀、倭国伝)
477年 宋 昇明1 興(武) 11月、遣使して貢物を献ずる。(『宋書』順帝紀)
これより先、興没し、弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する。(『宋書』夷蛮伝)
478年 宋 昇明2 武 上表して、自ら開府儀同三司と称し、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする。(『宋書』順帝紀)(「武」と明記したもので初めて)
479年 南斉 建元1 武 南斉の高帝、王朝樹立に伴い、倭王の武を鎮東大将軍(征東将軍)に進号。(『南斉書』倭国伝)
502年 梁 天監1 武 4月、梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を征東大将軍に進号する。(『梁書』武帝紀)

天皇と倭の五王
比定説
『日本書紀』などの天皇系譜から「讃」→履中天皇、「珍」→反正天皇、「済」→允恭天皇、「興」→安康天皇、「武」→雄略天皇等の説がある。このうち「済」、「興」、「武」については研究者間でほぼ一致を見ているが、「讃」と「珍」については『宋書』と『記紀』の伝承に食い違いがあるため未確定である。
(Wikipedia抜粋)

讃(履中天皇か)、珍(反正天皇か)や武(雄略天皇)は、自らを「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、宋の皇帝に正式に任命を求めている。皇帝は、百済だけは倭国の支配下であると認めず、他の半島南部は倭国の領域であることを認めている。このことは、半島南部は縄文時代中期から倭人(西日本縄文人)が住み、倭の勢力下にあったが、百済だけは後に漢や魏の強い影響下にあったことを、倭王のみならず南朝宋の皇帝もまた認識していたからだと思う(藤田)

倭の五王
倭の五王とは、「宋書」倭国伝などに記された、中国南朝に遣使した倭王「讃、珍、済、興、武」(「梁書」では讃=賛、珍=彌)を指す。この5人が歴代天皇の誰にあたるかは、『古事記・日本書記』から推定すると、済=允恭天皇、興=安康天皇、武=雄略天皇といわれている。しかし、残る讃、珍については、讃=応神天皇または仁徳天皇または履中天皇、珍=仁徳天皇または反正天皇など諸説がある。



(図解 古代史 成美堂出版)

藤田

仁徳　仁徳元年：西暦414年

聖帝仁徳天皇（オホサザキ）の政治

仁徳天皇は、難波の高津の宮で天下を治めました。この時代、大阪湾沿岸部の河内平野一帯で、池・水道・堤などの大規模な治水工事が行われました。工事の場所や様子は、図の通りであり、農業の生産力を高める一方、その規模の大きさから都市計画に基づいて行われたとも考えられています。仁徳天皇の治世下で、人々の暮らしは上向き、苦しむこともなかったと言われ、仁徳天皇の治世は聖の世と称されます。
（古事記・日本書記、西東社）

大仙陵古墳（だいせんりょうこふん）または大山古墳（だいせんこふん）は、大阪府堺市堺区大仙町にある古墳。形状は前方後円墳。百舌鳥古墳群を構成する古墳の1つ。

実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により「百舌鳥耳原中陵（もずのみみはらのなかのみささぎ）」として第16代仁徳天皇の陵に治定されている。名称は「仁徳天皇陵（にんとくてんのうりょう）」や「仁徳陵古墳」とも]。

全国で第1位の規模の巨大古墳であり、同古墳を擁する堺市は、クフ王ピラミッド及び秦の始皇帝墓陵に並ぶ「世界三大墳墓」と称している。（Wikipedia抜粋）

古墳時代中期

氏姓制度

允恭　允恭元年：西暦441年

允恭（いんぎょう）天皇

氏姓制度の改革

氏姓の乱れは国家の混乱を招く原因になりかねないと考えた允恭天皇は、全ての氏を甘樫丘に集めました。そして、盟神探湯をおこなって、氏姓を正しく定めた。

盟神探湯

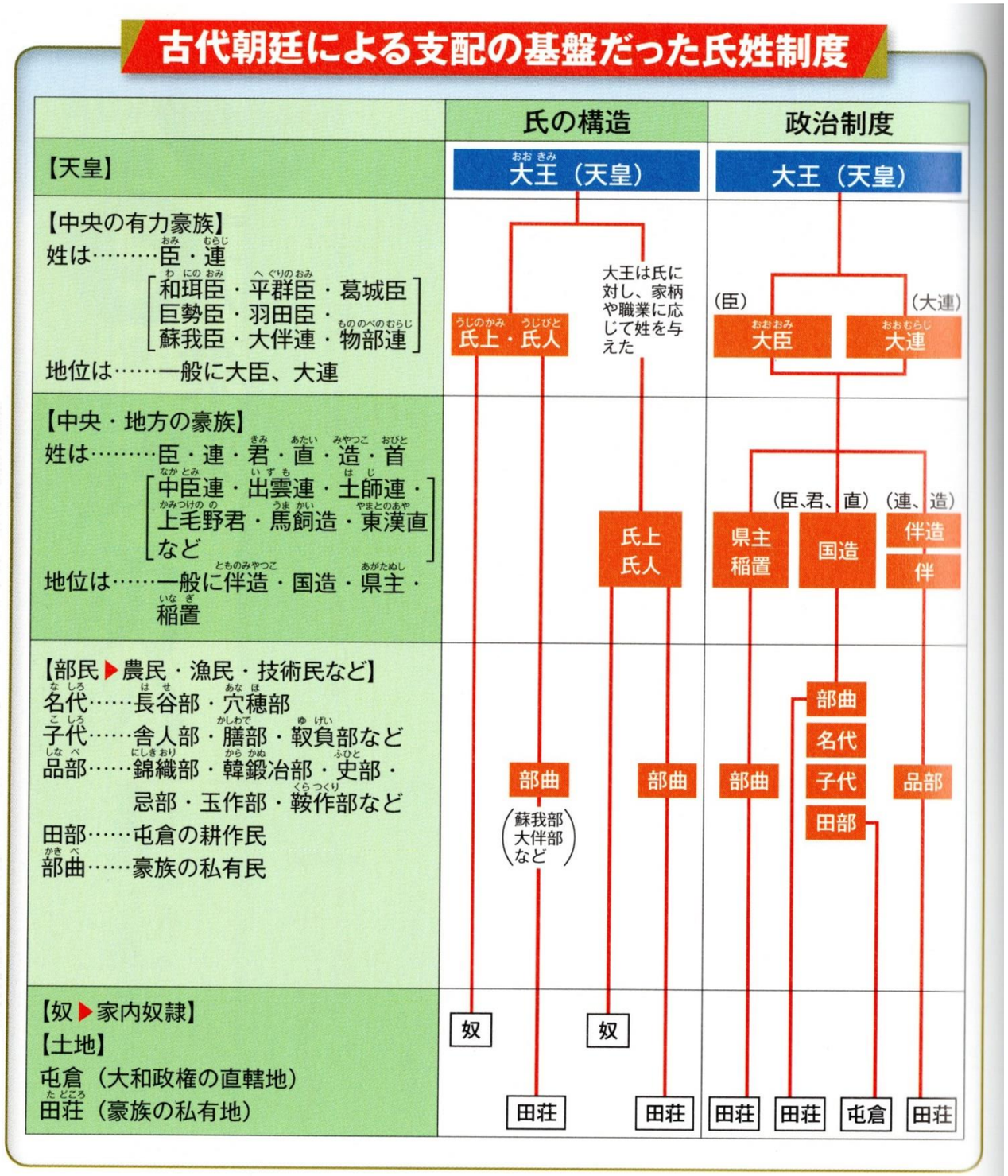
神に誓った後、熱湯に手を入れる誓約の一種。偽る人は火傷を負うとされ、偽る人に恐怖感を与え自白させる効果も持ちます。ヲアサヅマワクゴノスクネが乱れた氏姓を正すために行なったといわれ、名乗る氏姓に嘘偽りのないことを誓わせながら、誤った氏姓を正しました。

古事記・日本書記、西東社

表1　臣・連・君と出自

カバネ	氏の名の例	氏の名の由来	出自（氏の始祖）
臣	阿部・粟田・紀・巨勢・蘇我・平群	地名	伝説時代の天皇（神武～開化）（実年代でいえば三世紀以前にあたる）
君	上毛野・下毛野・犬上	地名	伝説時代の天皇（崇神～応神）（実年代でいえば四世紀頃にあたる）
君	大三輪・賀茂・宗像	地名	オオクニヌシ・大物主などの神（『姓氏録』の類別では「地祇」）
連	大伴・物部・中臣（もと卜部）	職名	ムスヒ・ハヤヒなどの神（『姓氏録』の類別では「天神」）
連	土師・犬養・津守	職名	アメノホヒ・ホノアカリ・アマツヒコネなど（『姓氏録』の類別では「天孫」）

（アマテラスの誕生、溝口）



古事記・日本書記、西東社

雄略　雄略元年：西暦465年

倭の五王の武に当たる
専制王権の確立

首長系譜の断絶と政変

一回目の変動

巨大前方後円墳が奈良盆地から河内へと移動した4世紀末から5世紀初頭である。このころの政変としては、神功皇后が三韓征伐の後に畿内に帰るとき、自分の皇子（応神天皇）には異母兄にあたる香坂皇子、忍熊皇子が畿内にて反乱を起こして戦いを挑んだが、神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命（彦国葺命の孫）　の働きによりこれを平定したことをあげる。

日本列島の他の多くの地域でも古墳の動向に変化が起きている。たとえば、岡山県の盟主墳は東部の備前地域（浦間茶臼山古墳等）から備中地域（造山古墳等）へ移動する。群馬県の毛野でも盟主墳墓譜は毛野中部（前橋天神山古墳）から毛野東部（太田天神山古墳）へと移った。

二回目の変動

5世紀後半の2回目の変動は、雄略天皇（倭王武）の登場と関係すると思われる。雄略天皇はそれまでの伝統的政治体制を破壊し官人を使って権力を中央に集中する革新的体制を敷き、平群氏、大伴氏や物部氏の力を背景に、軍事力で専制王権を確立した。天皇の次の狙いは、連合的に結び付いていた地域国家群をヤマト王権に臣従させることであった。葛城、吉備、毛野などの諸豪族を制圧したことが『記紀』から伺える。宮崎県の西都原古墳群では、5世紀前半になって女狭穂塚古墳や男狭穂塚古墳のような盟主墳が出現するが、これら盟主墳は5世紀後半以降は途絶える。畿内では、河内の王家と密接な関係のあった淀川水系有力首長系譜（大阪三島の安威川、長岡や南山城の久世系譜）がこの5世紀に盟主墳を築き、新たな全盛期を迎えるが5世紀後半にはこれらの系譜は断絶する。

5世紀後半に別の新たな系譜が巨大な前方後円墳を築き始める。熊本県菊池川流域の系譜の江田船山古墳、埼玉県の稲荷山古墳の系譜、群馬県の保渡田古墳群の系譜などである。（江田船山古墳と稲荷山古墳からは雄略大王に関した文字を刻んだ鉄剣が出土している。）

三回目の変動

6世紀に前半の3回目の変動は継体天皇の登場と密接な関係をもっていると思われる。淀川水系の系譜は5世紀後半に断絶したが、6世紀前半に復活する。復活した大阪三島の盟主墳である今城塚古墳は継体天皇陵と考えられている。その他、京都市嵯峨野や長野県天竜川流域で盟主墳が築かれるようになるが、渡来系集団が移住してきて新たに畑作や牧の経営がはじまったことと関係している。渡来系集団が政治的に力をもち継体を支える勢力になったことを意味すると思われる。

（古代国家はいつ成立したか、都出比呂志、藤田加筆）

葛城氏の滅亡

古事記・日本書記、西東社

吉備氏の没落

吉備氏の没落
雄略7年の吉備下道臣前津屋一族の誅殺、吉備上道臣田狭の謀反、雄略27年星川皇子と推媛が共謀して大蔵を占拠したが鎮圧され、砂鉄の産地の山部を没収される。これを境に吉備氏は急速に没落する。

平群氏の討滅

平群氏の討滅
仁賢天王が崩御すると平群真鳥が政権をほしいままにした。小泊瀬稚鷦鷯皇子（おはつせのわかさざき、後の武烈天皇）は、真鳥の子、鮪（しび）は、影姫を巡っての恋の争いに敗れると、皇子の怒りは真鳥・鮪親子に向かい、大伴金村に命じて鮪を殺害し、真鳥の館に火を放って焼き殺してしまう。ここに平群氏は討滅される。

『日本書記』では、武烈天皇を非道な悪行をなした、子孫の耐えた暴君に仕立て上げられ、あとに続く継体天皇の系統の正当性を示したとされる。

（古事記・日本書記、西東社）

雄略天皇と一言主

御所市の森脇に一言主神社というお社（やしろ）がある。一言主神社に祀（まつ）られている神さまは、一言主大神。この神さまは、託宣（たくせん）の神で、良いことも、悪いことも一言で託宣を下す神さまである。『古事記』にこんな話が載っている。

雄略天皇が葛城山に行幸した時の話。お供をしていた多くの役人たちは、皆紅い紐を付けた青摺（あおずり）の衣を着ていた。その時のこと、谷を隔てた向かいの山の尾根を登る人びとがいた。それがまったく天皇にお供でつき従っている人びとそっくりで、区別すらできない。そこで、天皇はこう言った。「この大和の国に、我のほかに二人と王はないはずだぞ。今このように行くのは誰なんだ（けしからんではないか。同じ装束を着て歩くなどとは）」と。すると、相手の答えて言う様子も、天皇の言葉と同じではないか。天皇は怒って弓に矢をつがえ、お供の者たちもみな弓に矢をつがえた。すると向こうの人びとも同じように矢をつがえるではないか。そこで、天皇は、「お前の名を名乗れ。そしてそれぞれ名乗りあってから矢を放とうではないか」と言った。これに対して、相手は「自分が先に尋ねられたので、まず自分が名乗りをしよう。自分は、悪いことも一言、良いことも一言、事を定めて託宣する神だ。葛城之一言主之大神だぞ」と言った。天皇はあわてて、「畏れ多いことです。神さまとは気付きませんでした」と言い、身に着けていた御刀と弓矢をはじめ、役人たちの着ている衣服を脱がせて、一言主大神に献上したというのである。

この話で重要なことは、天皇と同じ衣を着用することは古代においては不敬とされたことである。もう一つ考えねばならないのは、まるで鏡に映し出された自分を見るように、相手が自分と同じ行動をとるということであろう。そこに、神の恐ろしさが表現されているのであろう。

この話は『日本書紀』にも、ほぼ同話が載っている。天皇の力を上回る葛城の神の出現を描いた話であろう。（記紀に親しむ/奈良県公式ホームページ）

（図解　古代史、成美堂出版）

（図解　古代史、成美堂出版）

藤田

稲荷山古墳出土鉄剣　ワカタケル（雄略天皇）の代に作製

（埼玉県立さきたま史跡の博物館内展示）
稲荷山古墳出土鉄剣（いなりやまこふんしゅつどてっけん）は、1968年に埼玉県行田市の埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土した鉄剣。1983年に同古墳から出土した他の副葬品とともに国宝に指定された。「金錯銘鉄剣（きんさくめいてっけん）」とも称される（「金錯」は「金象嵌（きんぞうがん）」の意味）。
　1968年に行われた稲荷山古墳の後円部分の発掘調査の際、画文帯環状乳神獣鏡や多量の埴輪とともに鉄剣が出土した。1978年、腐食の進む鉄剣の保護処理のためX線による検査が行われた。その際、鉄剣の両面に115文字の漢字が金象嵌で表されていることが判明する。その歴史的・学術的価値から、同時に出土した他の副葬品と共に1981年に重要文化財に指定され、2年後の1983年には国宝に指定された。

銘文の内容
（表）
辛亥年七月中記、乎獲居臣、上祖名意富比垝、其児多加利足尼、其児名弖已加利獲居、其児名多加披次獲居、其児名多沙鬼獲居、其児名半弖比
（裏）
其児名加差披余、其児名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今、獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也
書かれている文字を解釈すると、

「辛亥の年（471）七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の児、（名は）タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、名はタカヒ（ハ）シワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテヒ。（表）其の児、名はカサヒ（ハ）ヨ。其の児、名はヲワケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケル（ワク（カク）カタキ（シ）ル（ロ））の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。（裏）「（オオヒコ（大彦、崇神朝）－6代－ヲワケ（ワカタケル、雄略天皇）代」

特色
　115文字という字数は日本のみならず他の東アジアの例と比較しても多い。この銘文が日本古代史の確実な基準点となり、その他の歴史事実の実年代を定める上で大きく役立つことになった。
　また1873年（明治6年）、熊本県玉名郡和水町にある江田船山古墳からは銀象嵌の銘文を有する鉄刀が出土した。この鉄刀にも当時の大王の名が刻まれていたが、保存状態が悪く、肝心の大王名の部分も相当欠落していた。その銘文は、かつては「治天下𤇾復□□□歯大王」と読み、「多遅比弥都歯大王」（日本書紀）または「水歯大王（反正天皇）」『古事記』にあてる説が有力であった。しかし稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣が発見されたことにより、「治天下獲□□□鹵大王」と読み、「獲加多支鹵大王（ワカタケル大王、雄略天皇）」にあてる説が有力となっている。このことから、通説では5世紀後半にはすでに大王の権力が九州から東国まで及んでいたと解釈される。

年代
辛亥年は471年が定説であるが一部に531年説もある。通説通り471年説をとるとヲワケが仕えた獲加多支鹵大王は、日本書紀の大泊瀬幼武（オオハツセワカタケ）天皇、すなわち21代雄略天皇となる。 銘文に獲加多支鹵大王が居住した宮を斯鬼宮として刻んでいる、雄略天皇が居住した泊瀬朝倉宮とは異なるものの、当時の磯城郡には含まれていることにはなる。この通説に則れば、21代雄略天皇の考古学的な実在の実証となりうる。 田中卓は、斯鬼宮と刻んだ理由を雄略天皇以前の数代の天皇は磯城郡以外に宮を置いており、当時の人にとって磯城宮といえば雄略天皇の宮のことであったためであるとし、『記紀』で雄略天皇の宮を泊瀬朝倉宮と呼ぶのは後世に他の天皇が磯城郡に置いた宮と区別するためそう呼称したものであるとした。

オホヒコ
銘文にある「オホヒコ」について、『日本書紀』崇神天皇紀に見える四道将軍の1人「大彦命」とみなす考えがある。

（Wikipedia抜粋）

辛亥銘鉄剣
（埼玉古墳群稲荷山古墳出土　埼玉県立さきたま資料館）

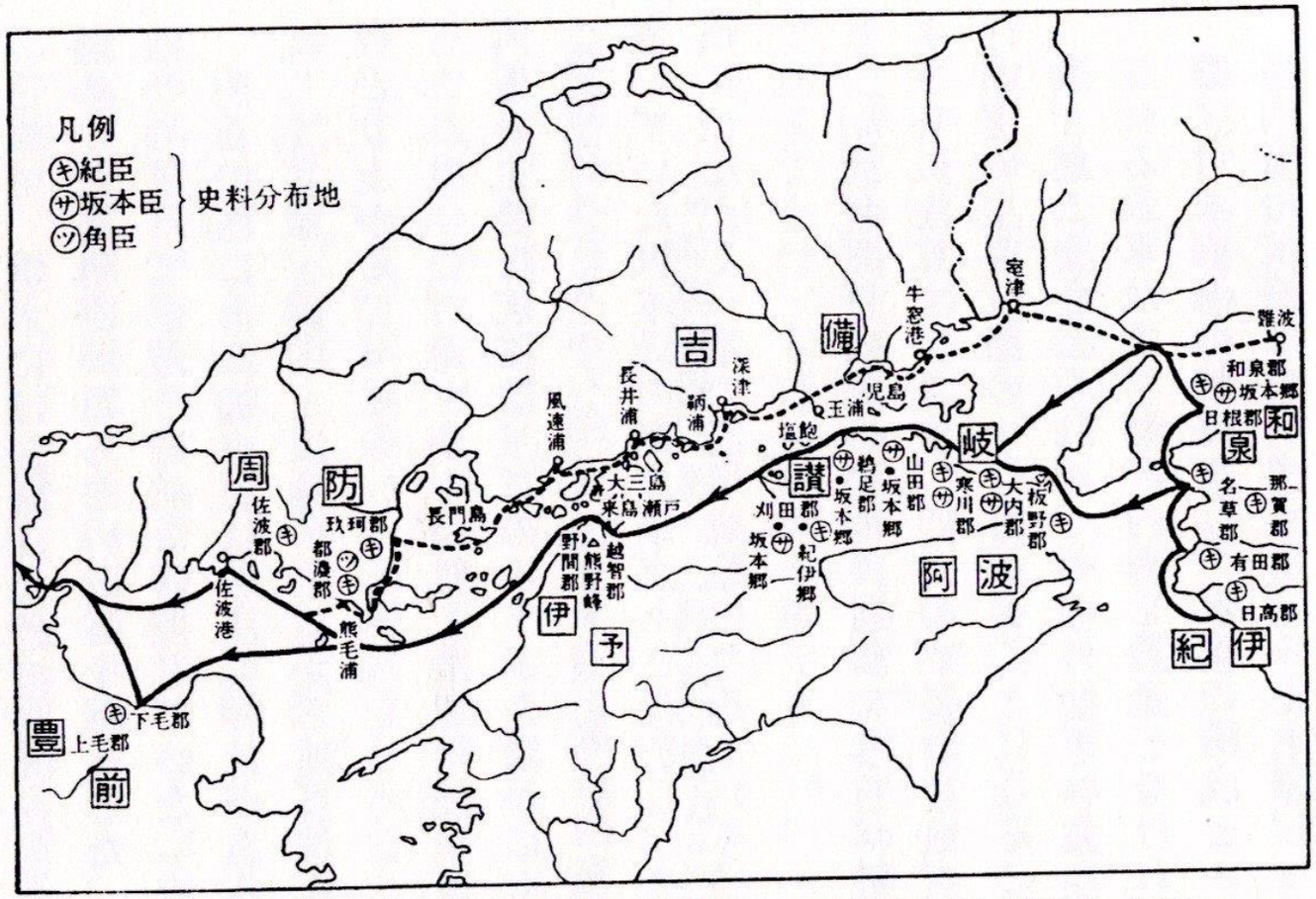
江田船山古墳から銀象嵌の銘文を有する鉄刀

1873年（明治6年）、熊本県玉名郡和水町にある江田船山古墳からは銀象嵌の銘文を有する鉄刀が出土した。この鉄刀にも当時の大王の名が刻まれていたが、保存状態が悪く、肝心の大王名の部分も相当欠落していた。その銘文は、かつては「治天下𤇾復□□□歯大王」と読み、「多遅比弥都歯大王」『日本書紀』または「水歯大王（反正天皇）」『古事記』にあてる説が有力であった。しかし稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣が発見されたことにより、「治天下獲□□□鹵大王」と読み、「獲加多支鹵大王（ワカタケル大王、雄略天皇）」にあてる説が有力となっている。

古墳時代中期になると半島や大陸との交流・交易に主として瀬戸内海航路を取るようになる

瀬戸内海航路

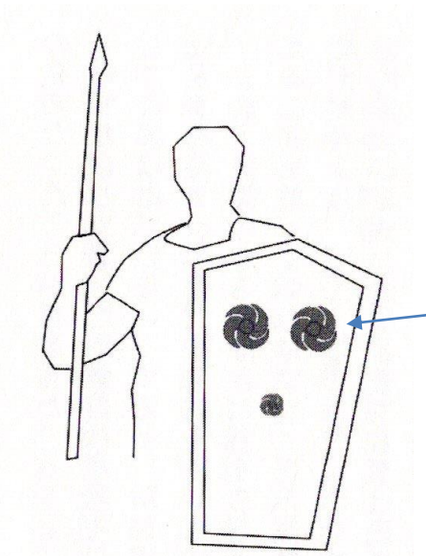
九州北部と畿内を結ぶ二つの瀬戸内海航路が存在した。山陽沿岸と四国沿岸を航行する二航路である。前者は「住吉津」から住吉の名を持つ神社を辿る「住吉の航路」と言われ物部氏の勢力下にあったと思われる。後者の航路は「紀氏の航路」と言われ、武内宿禰の影が伺える。二つの航路は周防の熊毛郡沖で合し、北九州に向かう。（武内宿禰の正体、藤井耕一郎　＋　藤田）



瀬戸内海における紀氏関係要図（岸俊男『日本古代政治史研究』塙書房、より）

巴形銅器は防御用の盾に付けられた装飾品で「矢除け」の呪術的な効果も期待されていたとも考えられる。巴形銅器の形は、古墳時代に作られたものは「四つ巴」のような四つの突起（足）をもっているのに対し、愛知県の朝日遺跡などから出土している弥生時代のものは、突起の数が五つ以上ある。（不思議なことに、「弥生時代後期から古墳時代初頭にいったん断絶し、古墳時代前期後半になって、それまでの巴形銅器とは異なった形で、ふたたび現れる」という（田中晋作　『筒形銅器と政権交替』）。古墳時代前期後半以降に列島で制作された巴形銅器は、瀬戸内海航路を通って、朝鮮半島南部の加羅に運ばれたと思われ、列島のみならず加羅の墳墓からも多く発見されている。

筒形銅器は杖頭に装着したと推定される古墳時代の青銅製品である。田中晋作氏の　『筒形銅器と政権交替』によると、「筒形銅器の出土は古墳時代前期半ばから中期前半という限られた時期の古墳だけに集中している。しかも、前期の有力古墳からたくさん出土する三角縁神獣鏡と一緒に副葬されていることは殆どない。」とある。筒形銅器は、南朝鮮の金管伽耶の象徴であったと思われる。伽耶で制作された筒形銅器は瀬戸内海航路により列島に持ち込まれたが、持ち込んだ人たちは邪馬台国で祭器として使われていた銅鏡を避ける傾向があったのではないか。
（武内宿禰の正体、藤井　＋　藤田）



巴形銅器の取り付け方

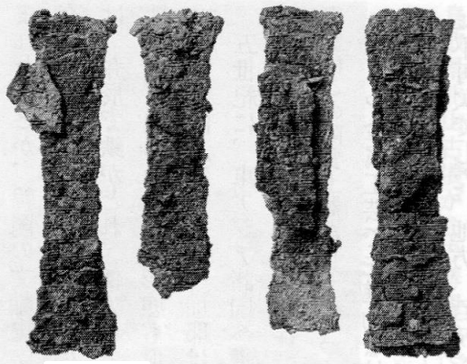
（左）巴形銅器、（右）筒形銅器　（国立金海博物館蔵
４世紀、日本製？）（韓国南部の古代遺跡（２）、Net）

藤田

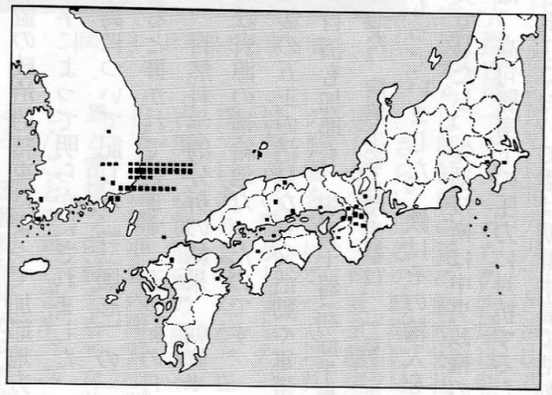
朝鮮半島からの鉄資源と先進文物

鉄資源と先進文物の確保

四世紀後半から五世紀につくられた和製の土師器や青銅器が、韓国南部の慶尚南道や全羅南道など、南海岸に面した墳墓や集落遺跡から発見されており、ときには滑石で作った倭製の祭器もみられる。ここには、かって日本と交流した伽耶の地域がある。一方日本列島においても、同時期の伽耶産の陶質土器や、鉄鋌と呼ぶ朝鮮半島製の鉄製の短冊形の鉄素材の出土量が急増している。この事実から、この時期の倭と朝鮮半島南部、とくに伽耶との交流が頻繁になったことがわかる。
（古代国家はいつ成立したか、都出比呂志）
鉄鋌は通貨の代用品となったと思われる。



鉄鋌（滋賀県新開２号墳）



鉄鋌の分布

古墳時代には畜産が行われていた

弥生時代にはまれながらウシが出土する。東京都港区伊皿子貝塚の弥生中期の方形周溝墓から「ウシの頭骨」が殉葬されたかのように出土して注目された。また、吉野ヶ里遺跡の大環濠にはウシ、ウマ、ブタの骨が残存していたことが脂肪酸分析などで推定されており。これらの骨は全国各地で出土している。古墳時代になると、畜産が一般化していたようである。火山灰に埋もれた遺跡として有名な群馬県黒井峰遺跡では5棟の家畜小屋が検出された。
(逆説の日本古代史、水野拓)

洋銀の合金技術は6世紀に始まった

群馬県高崎市の6世紀代の古墳から出土したといわれている「頭稚太刀（かぶつちのたち」は、日本製の柄頭（つかがしら）部分を卵形にふくらませた儀式専用の刀で、6世紀の古墳からかなりでるものである。問題の太刀は鞘部分のの14.3センチメートルのみ現存していた。鞘のケヤキ材を銅板で巻き上げ装飾し、その木と銅板に間の板を分析したところ銅、ニッケル、亜鉛の合金「洋銀」だったのである。

同じ合金でも、この3種の溶解温度が銅約1800度、ニッケル約1400度、亜鉛約400度極端に異なるため、金属学史的には17世紀にヨーロッパで開発されたとするのが定説であった。

今回の発見は、当時すでに1500度の溶解温度を必要とする鉄製産が始まっていたことから、理論的には可能であっても、合金技術は複雑であり、大変高度な技術といえる。しかも、初歩的な合金技術しか持ちえない弥生時代から、わずか2世紀足らずでこのような技術に到達している点は驚異的である。
(逆説の日本古代史、水野拓)

曽我遺跡（そがいせき）、5世紀後半から6世紀前半までの期間に営まれた大規模な玉造りの集落。（古代史　旧石器時代～律令国家までの写真と地図で解説、成美堂出版）

藤島寛高氏がFB投稿で『上記』の記述から推察されているように、縄文・弥生・古墳時代を通じての通貨代用品は勾玉ではと推察している。
奈良県橿原市の蘇我遺跡より出土した、玉類の成品・未成品・原石，砥石，木製舞錐等1000万点近い遺物である。玉類には勾玉・管玉・小玉・丸玉・棗玉 (なつめだま) ・切子玉・子持勾玉があるほか，各種滑石製模造品が見られた。石材は和歌山紀ノ川流域の滑石，山陰の碧玉，北陸の緑色凝灰岩が 95%を占め，岩手県久慈の琥珀，新潟糸魚川の翡翠，水晶，瑪瑙 (めのう) ，埋木，ガラス等各地よりさまざまなものが搬入されていた。これは本来の原石産地での玉作が，5世紀末～6世紀初頭ころヤマト王権の所在地の橿原に移動・集中したことを示している。蘇我遺跡は、当時の通貨に当たる勾玉などの玉類の制作工房、即ち造幣局に当たる遺跡ではないか。